兵庫県文化財調査報告　第１５３冊

神戸市所在

奥遺跡
宮ノ沢城跡
淡河上中遺跡

－山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸＩ－

１９９６年３月

兵庫県教育委員会

神戸市所在

奥遺跡（おくいせき）
宮ノ沢城跡（みやのさわじょうあと）
淡河上中遺跡（おうごかみなかいせき）

－山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸＩ－

１９９６年3月

兵庫県教育委員会

例　言

1．本書は、兵庫県　神戸市淡河町淡河字奥　　に所在する「奥遺跡」
神戸市淡河町行原字上中　に所在する「淡河上中遺跡」
神戸市淡河町北畑字宮ノ沢に所在する「宮ノ沢城跡」
の発掘調査報告書である。

2．調査は、山陽自動車道（神戸～三木）の建設に伴い、日本道路公団の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成元年度から平成２年度にかけて実施した。
各遺跡の調査年度は以下のとおりである。

	確認調査	遺跡調査番号	全面調査	遺跡調査番号
奥　遺　跡	平成元年度	８９０１０５	平成３年度	９１０１２２
淡河上中遺跡	平成２年度	９００１３４	平成３年度	９１００３８
宮ノ沢城跡	平成２年度	９００１４０	平成４年度	９２０３１６

3．本書に掲載した位置図には建設省国土地理院発行の20万分の１「京都及大阪」・「和歌山」・「姫路」・「徳島」を、第２図の淡河の遺跡には２万５千分の１「淡河」・「有馬」を使用した。

4．本書に使用した方位は国土座標第Ｖ系を基準にし、水準は東京湾平均水準（Ｔ．Ｐ．）を使用したものである。方位は座標北を指す。

5．本報告にかかる遺物・写真・図面等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５）及び、魚住分館（明石市魚住町清水字立合池の下630－１）に保管している。

6．本書の執筆は目次に示したとおり、編集は小川美奈・横山麻子の補助を得て高瀬が行った。

本　文　目　次

第１章　調査の経緯……（高瀬一嘉）……（１）
　１．調査に至る経過
　２．発掘調査の経過
　３．整理作業の経過

第２章　淡河の地理・歴史…（多賀茂治）……（４）
　第１節　淡河の地理
　第２節　淡河の歴史

第３章　確認調査……（甲斐昭光・高瀬）……（11）
　第１節　奥遺跡
　第２節　宮ノ沢遺跡
　第３節　淡河上中遺跡

第４章　奥遺跡の調査……（高瀬）……（13）
　第１節　遺跡の立地
　第２節　基本層序
　第３節　遺構
　第４節　遺物
　第５節　小結

第５章　宮ノ沢城跡の調査……（多賀）……（19）
　第１節　遺跡の立地
　第２節　調査の方法と経過
　第３節　遺構
　第４節　遺物
　第５節　小結

第６章　淡河上中遺跡の調査……（村上泰樹）……（23）
　第１節　遺跡の概要
　第２節　周辺の地形と遺跡の地形的変化
　第３節　遺構の概要
　第４節　遺物の概要

挿図目次

第１図　淡河城縄張図 …… （６）
第２図　淡河の遺跡 …… （8•9）
第３図　宮ノ沢城跡調査位置図 …… （19）
第４図　宮ノ沢城跡遺物出土範囲 …… （21）
第５図　淡河上中遺跡　土坑（ＳＫ01） …… （25）

表目次

表１　神戸市北区淡河町の遺跡 …… （10）
表２　淡河上中遺跡出土土器観察表（１） …… （28）
表３　淡河上中遺跡出土土器観察表（２） …… （29）

図版目次

図版１　遺跡の位置　兵庫県（上）・神戸市（下）
図版２　遺跡の位置　1／12000

〔奥遺跡〕

図版３　奥遺跡確認調査試掘坑設定図と全面調査範囲
図版４　奥遺跡基本層序　縦1／20、横1／400
図版５　奥遺跡全体図 1／500
図版６　奥遺跡検出遺構　ＳＫ01～04・06・07
図版７　奥遺跡検出遺構　ＳＤ02～06
図版８　奥遺跡出土遺物（１）　図版９　奥遺跡出土遺物（２）

〔宮ノ沢城跡〕

図版10　宮ノ沢城跡確認調査トレンチ設定図
図版11　宮ノ沢城跡調査前測量図　1／1000
図版12　宮ノ沢城跡測量図 1／500
図版13　宮ノ沢城跡断面図
図版14　宮ノ沢城跡北側平坦地
図版15　（上）　宮ノ沢城跡出土遺物　（下）　宮ノ沢城跡遠景（写真）

〔淡河上中遺跡〕

図版16　淡河上中遺跡確認調査試掘坑設定図
図版17　淡河上中遺跡調査区位置図　1／3000
図版18　淡河上中遺跡微地形等高線図　1／3000
図版19　淡河上中遺跡調査区土層断面図　縦1／40、横1／200
図版20　淡河上中遺跡全体図 1／500
図版21　淡河上中遺跡溝（ＳＤ01）
図版22　淡河上中遺跡池状遺構（ＳＷ01）
図版23　淡河上中遺跡出土遺物（１）　図版24　淡河上中遺跡出土遺物（２）
図版25　淡河上中遺跡出土遺物（３）　図版26　淡河上中遺跡出土遺物（４）
図版27　淡河上中遺跡出土遺物（５）

写真図版目次

〔奥遺跡〕

写真図版１　奥遺跡の位置（国土地理院撮影）
写真図版２　上・遺跡遠景（南西から）
中・遺跡遠景（北東から）
下・調査区周辺（南から）
写真図版３　上・調査区周辺（垂直方向）
中・調査区全景（南から）
下・調査区全景（東から）
写真図版４　上・調査区全景（西から）
中・谷部（西から）
下・ＳＫ01（南東から）
写真図版５　上・ＳＫ02（西から）
中・ＳＫ06（東から）
下・ＳＫ06断面（南東から）
写真図版６　上・ＳＫ07（北東から）
中・ＳＫ07断面（南東から）
下・ＳＫ10断面（西から）
写真図版７　上・ＳＤ02（西から）
中・ＳＤ02断面（東から）
下・ＳＫ09とＳＤ02の切り合い（西から）
写真図版８　奥遺跡出土土器（１）
写真図版９　奥遺跡出土土器（２）
写真図版10　奥遺跡出土土器（３）

〔宮ノ沢城跡〕

写真図版11　宮ノ沢城跡・淡河上中遺跡の位置（国土地理院撮影）
写真図版12　宮ノ沢城跡調査後全景（垂直方向）
写真図版13　上・宮ノ沢城跡遠景（南から）
中・調査前全景
下・調査前全景（南から）
写真図版14　上・宮ノ沢城跡調査後全景（南から）
中・第１ピーク（南から）
下・第１ピーク・東側尾根（東から）
写真図版15　上・第１ピーク・東側尾根（北から）
中・北側平坦地（東から）
下・第２ピーク・西側尾根（空から）
写真図版16　宮ノ沢城出土土器

〔淡河上中遺跡〕

写真図版17　上・調査区全景（垂直方向）
下・調査区全景（東から）
写真図版18　上・淡河上中遺跡遠景（南から）
中・　全景（南から）
下・　全景（南から）
写真図版19　上・ＳＤ01と池状遺構
中・ＳＤ01東辺部出土状況（西から）
下・池状遺構（南西から）
写真図版20　上・調査後全景（西から）
中・調査区土層断面（西から）
下・調査区土層断面（東から）
写真図版21　上・池状遺構
中・池状遺構排水部分（東から）
下・池状遺構土層断面（南東から）
写真図版22　淡河上中遺跡出土土器　(1) カラー
写真図版23　淡河上中遺跡出土土器　(2) カラー
写真図版24　淡河上中遺跡出土土器　(3) カラー
写真図版25　淡河上中遺跡出土土器　(4) カラー
写真図版26　淡河上中遺跡出土土器　(5)
写真図版27　淡河上中遺跡出土土器　(6)
写真図版28　淡河上中遺跡出土土器　(7)
写真図版29　淡河上中遺跡出土土器　(8)
写真図版30　淡河上中遺跡出土土器　(9)
写真図版31　淡河上中遺跡出土土器　(10)

第１章　　調査の経緯

１．　調査に至る経過

山陽道、正式には「高速自動車国道　山陽自動車道　吹田山口線」は、吹田市を起点にして瀬戸内沿岸の都市を結んで山口市に至る総延長約434kmの高速道路である。

このうち、神戸～三木間（28.6km）は第９次施工命令区間として、昭和57年に整備計画が決定した。その後、昭和59年11月30日に施工命令が出され、昭和60年３月25日に路線発表が行われた。

事業区域内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、日本道路公団と兵庫県教育委員会で協議を重ね、昭和61年４月と昭和62年３月の２回にわたって分布調査を実施した。その結果、74箇所について確認調査の必要が認められた。

この結果を受けて、兵庫県教育委員会では平成元年度に39の地点で、平成３年度に工事用道路の部分も加えて№38の地点で確認調査を行った。奥遺跡は平成元年度に確認調査を実施した遺跡で、確認調査の段階では№67 地点と命名されていた地点である。淡河上中遺跡と宮ノ沢城跡は平成２年度に確認調査を実施した遺跡で、それぞれ№70 、№205地点と命名されていた地点である。

２．　発掘調査の経過

奥遺跡の確認調査（遺跡調査番号890105）

調査担当者　岡田章一・山下史朗・高瀬一嘉・中村　弘・多賀茂治

昭和61・62年度に実施された分布調査で、土器の分布が認められ、集落遺跡が存在する可能性が指摘された。このため、この時点で№67地点と仮称して確認調査を実施することとなった。

確認調査は平成元年度に山陽自動車道（神戸～三木間）関連で行った39の地点のうちの１地点として実施した。平成元年度は平成２年１月10日～３月30日の期間に確認調査を行ったが、№67地点はこのうち２月19～23日の期間に実施した。調査の結果、遺構と遺物が検出されたため、全面調査の必要が認められた。

奥遺跡の全面調査（遺跡調査番号910122）

調査担当者　井守徳男・高瀬一嘉・三原慎吾

確認調査の結果により、№67地点では、東側約 2／3程度の範囲で主に中世の遺物の包含層と遺構が存在することが判明した。日本道路公団と兵庫県教育委員会との協議の結果、現状保存の処置をとることが不可能であると判断されたため、発掘調査を行い記録保存することとした。

全面調査は日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。調査対象範囲は2,825㎡である。

調査は重機で表土・無遺物層を除去した後に、人力により遺物包含層の掘削および遺構の検出を行った。遺構検出後は写真撮影、図面での記録保存の処置を行った。

全ての遺構を検出したのちに、ヘリコプターによる航空写真撮影を実施した。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の上記３名の職員が行い。現場補助員に高島知恵子、足立敬介、室内作業員に舟坂好子が調査に参加した。

淡河上中遺跡の確認調査（遺跡調査番号900134）

調査担当者　大平茂・平田博幸・甲斐昭光・山上雅弘・三原慎吾

平成２年度の４月18～21日にかけて工事用道路部分の分布調査を実施した結果、土器の分布が認められ、集落遺跡が存在する可能性が指摘された。このため、この時点で№205地点と仮称して確認調査を実施することとなった。

確認調査は平成２年度に山陽自動車道（神戸～三木間）関連で行った38の地点のうちの１地点として実施した。平成２年度は平成２年７月３日～平成３年３月20日の期間に確認調査を行ったが、№205地点はこのうち２月13・14日と３月６日の３日間に実施した。調査の結果、遺構と遺物が検出されたため、全面調査の必要が認められた。

淡河上中遺跡の全面調査（遺跡調査番号910038）

調査担当者　村上泰樹・西原雄大

確認調査の結果により、№205地点では、主に中世の遺物の包含層と遺構が存在することが判明した。日本道路公団と兵庫県教育委員会との協議の結果、現状保存の処置をとることが不可能であると判断されたため、発掘調査を行い記録保存することとした。

全面調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。調査対象範囲は 1,747㎡である。

調査は重機で表土・無遺物層を除去した後に、人力により遺物包含層の掘削および遺構の検出を行った。遺構検出後は写真撮影、図面での記録保存の処置を行った。

全ての遺構を検出したのちに、ヘリコプターによる航空写真撮影を実施した。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の上記２名の職員が行い、室内作業員に舟坂好子が調査に参加した。

宮ノ沢城跡の確認調査（遺跡調査番号900140）

調査担当者　大平茂・平田博幸・甲斐昭光・山上雅弘・三原慎吾

対象地区は「宮ノ沢城」という山城跡に当たっている。このため、№70地点と仮称して確認調査を実施することとなった。

確認調査は平成２年度に実施した。平成２年度は平成２年７月３日～平成３年３月20日の期間に確認調査を行ったが、№70地点はこのうち２月12日～３月13日の期間に実施した。調査の結果、遺構と遺物が検出されたため、全面調査の必要が認められた。

宮ノ沢城跡の全面調査（遺跡調査番号920316）

調査担当者　高瀬一嘉・多賀茂治

確認調査の結果により、№70地点は、周知の「宮ノ沢城」にあたることが判明した。日本道路公団と兵庫県教育委員会との協議の結果、現状保存の処置をとることが不可能であると判断されたため、発掘調査を行い記録保存することとした。

全面調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。調査対象範囲は2,949㎡である。

調査は重機で表土除去、除根作業を行った後に、人力により遺構の検出を行った。遺構検出後は写真撮影、図面での記録保存の処置を行った。

全ての遺構を検出したのちに、ヘリコプターによる航空写真測量を実施した。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の上記２名の職員が行い。現場補助員に高島知恵子、室内作業員に五百蔵道代が調査に参加した。

3.　整理作業の経過

出土品の整理作業は、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて平成６・７年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。

平成６年度の整理作業

出土品の水洗い、ネーミングは現地調査の期間で完了していたために、接合・補強、実測、復元作業を実施した。

整理担当職員　調査第１班　主　査　村上泰樹　技術職員　多賀茂治
整理普及班　技術職員　高瀬一嘉
調査第３班　研修員　三原慎吾

整理技術嘱託員　主任技術員　森本貴子
企画技術員　密谷美音
図化技術員　早川亜紀子・飯田章子・蔵　幾子・横山麻子・船木昌美
図化補助技術員　中西睦子

平成７年度の整理作業

復元、写真撮影、写真整理、遺構図補正、トレース、レイアウト、の作業を実施し、発掘調査報告書を刊行した。

整理担当職員　復興調査班　主　査　村上泰樹
整理普及班　主　任　高瀬一嘉
調査第１班　技術職員　多賀茂治

整理技術嘱託員　主任技術員　小川美奈
企画技術員　横山麻子
図化技術員　中田明美・蔵　幾子・鈴木まき子・木場裕美
図化補助技術員　茅原加寿代
日々雇用職員　藤池亜希・名田純子・三浦由起子・森實直子

第２章　淡河の地理・歴史

第１節　淡河の地理

１．地形・地質

奥遺跡、淡河上中遺跡、宮ノ沢城跡がある神戸市北区淡河町は神戸市街とは六甲山地を隔てた北側に位置している。東西約４㎞、南北約0.6㎞の小盆地であり、標高は100ｍを越える。盆地の南縁を加古川支流美嚢川の上流である淡河川が深い渓谷を作って西流する。盆地の西側は北側から延びる丘陵と南側の山地によって閉ざされ、わずかに淡河川の川筋のみが西へ通ずる。東側は低い丘陵を分水嶺として武庫川水系の三田盆地に接している。北側は標高200ｍ程の丘陵が広がり、小さな谷が多く刻まれている。南側には標高500ｍを越える丹生山地があり、さらにその南側には山田川の谷を挟んで六甲山地がそびえている。

この地域の基盤層は３千万年以上前、古神戸湖の底に堆積した水成堆積物である神戸層群に分類されるが、そのうちでも泥岩を主体とする吉川塁層に属する。この地層は水による浸食を受けやすく、斜面地は容易に崩壊をおこす。このため宮ノ沢城跡周辺などは地滑り対策地に指定されており、地元民から「ぬけやま」と呼ばれている。また盆地の南側には高槻－有馬構造線の一部である淡河断層が東西に走り、急傾斜の斜面を形成する。

盆地の内部を見てみると地盤は東から西へと緩やかに傾斜しており、淡河川によって形成された河岸段丘がよく発達している。『兵庫県美嚢郡誌』によれば、奈良時代末（宝亀11年）以前、淡河は湖であったという伝承がある。その真偽のほどは定かではないが、淡河川の狭隘な谷を閉鎖すれば、まさに湖と成りえる地形である。

奥遺跡は淡河川支流の僧尾川北側の河岸段丘上にあり背後に丘陵が迫る。淡河上中遺跡は淡河川北岸の河岸段丘上にあり、宮ノ沢城跡は淡河川北側の丘陵上にある。

２．土地利用

淡河には川沿いにわずかに平地があるのみで、ほとんどが丘陵および山地である。このため集落は淡河川の河岸段丘上に細長く展開し、また北側の丘陵に発達した開析谷の中にも小さな集落が散在する。平地が少ないために耕作地は限られる。淡河川北岸には比較的広い耕作地があるが、その他は丘陵斜面を造成した棚田が分布している。これらの耕作地には明治時代に開通した淡河疎水や開析谷をせき止めた溜池から配水されているが、大規模な土木工事がおこなわれる以前は小規模な谷川の水や広さ100㎡に満たないような小規模なため池が頼りであった。

３．交通

淡河は三田盆地と加古川流域をつなぐ重要な交通ルートであり、摂津と播磨の接点であった。南側は丹生山地があるため、この方面へのルートは発達していないが、北側は丘陵の尾根上を通る里道が発達している。現在は国道428号線が南北に盆地を横断し、県道三木三田線が淡河川にそって東西に走る。いずれも摂津と播磨をつなぐ主要ルートである。

第２節　淡河の歴史

１．遺跡からみた淡河の歴史

淡河における埋蔵文化財の状況は長らく不明な点が多かったが、神戸市教育委員会によって行われた分布調査や、ほ場整備に伴う試掘調査などにより、少しずつ資料が蓄積されている。ここでは縄文時代から中世に至る遺跡をとりあげ、淡河の歴史をたどってみる。

縄文時代

現在淡河で最も古い時代の遺跡は縄文時代のものである。淡河中村遺跡では中期の住居跡が発見され、土器や石棒が出土している。また淡河中山遺跡、神田遺跡、中山大杣池遺跡で縄文時代の遺物が出土しており、淡河川に沿った段丘上が縄文時代の人びとの生活領域であったことが知れる。

弥生時代

弥生時代になると水田耕作が始まるが、淡河は可耕地が少ないこともあって、弥生時代の遺跡は少ない。淡河城の下層からは終末期に属するベッド状遺構をもった住居跡が発見されている。また、ほ場整備に伴う試掘調査でも弥生時代後期の土器が出土している。淡河川沿いの段丘上を居住地とし、南北にのびる細い谷筋を水田としていたのであろう。

古墳時代

古墳時代になってもさほど耕作地は拡大していなかったようであり、集落遺跡は少ない。中村遺跡で前期の住居跡が調査されており、萩原遺跡では後期の遺物が出土している。集落の立地は弥生時代以来変化がないようである。

また淡河では確実な古墳は１基も知られていない。これは淡河地域の生産力が古墳を造営する階層を生み出すほどのものでなかったためであろう。

古代～中世

続く奈良時代から平安時代にかけても遺跡の数は少ない。わずかに中村遺跡で奈良時代の掘立柱建物跡が調査されているのみである。淡河で遺跡が増加するのは平安時代末から鎌倉時代にかけてであり、中村遺跡、中山遺跡、萩原遺跡など多くの遺跡で、建物や土坑などが調査されている。また淡河を代表する寺院である石峯寺が創建されるのはこの時期である。

このように中世の始まりとともに新しい集落が突如として形成されるが、これは淡河地域の開発がこの時期に始まったことを示す。開発の対象となったのはそれまで水利の悪かった河岸段丘上や丘陵斜面などであり、池溝の整備が進められたようである。考古資料からこの開発を主導した者を特定することは困難であるが、鎌倉時代には淡河の地頭として淡河氏が現在の淡河城に本拠を構えているこ

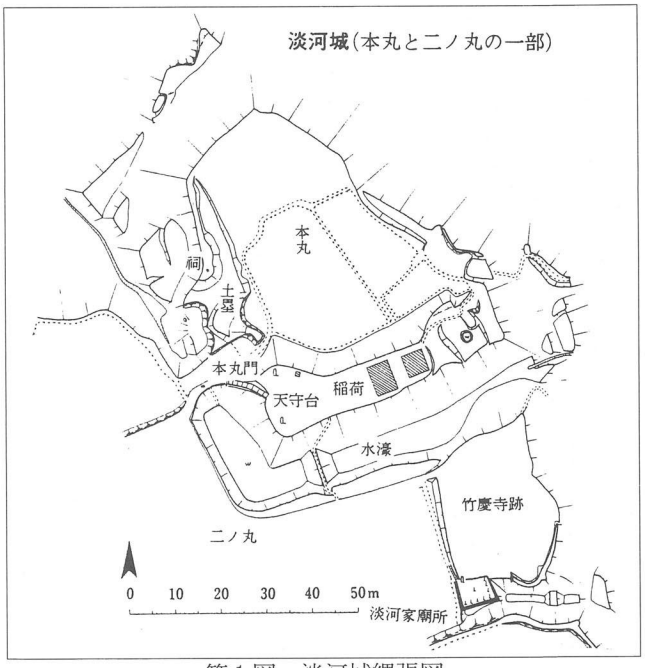
現在の石峯寺（1995年撮影）

とや、石峯寺が活動を始めていることなどから、これらの在地領主や寺社勢力が「淡河荘」の開発を進めた可能性が高いと考える。

室町時代になると集落遺跡としては神田、萩原遺跡などがこの時期まで継続する。この時代の後半から戦国騒乱の時代がはじまるが、淡河にも多くの城郭が築かれる。淡河氏の本拠である淡河城が現在のように整備されたのはこの時代であろうし、北畑城や萩原城が築かれたのもこの時代であろう。また石峯寺もこの時代に隆盛を誇り、多くの堂塔が建立されている。石峯寺に関連すると思われるものに多くの経塚がある。鎌倉時代から近世に至るものまで、多くの経塚が淡河周辺の丘陵上に作られる。西神自動車道建設に伴い平成6年度に兵庫県教育委員会が調査した淡河町勝雄の勝雄経塚では享禄3年（1530年）の銘をもつ金銅製の経筒が出土している。これは丹波焼の壺に納められていた。内部には法華経の経巻が8本納められていた。また石造物も近辺に多く見られる。

淡河氏は最後の当主淡河定範のとき三木城主別所氏と行動をともにし、織田軍の播磨侵攻に抵抗し、最後は三木城で討ち死にする。淡河城には有馬氏が入城するが、1601年の有馬氏の三田移封によって廃城となっている。淡河城は現在も往時の遺構を良く残している。また萩原城などの他の城郭もこの時に廃城になり淡河の近世が始まるのである。

以上のように淡河の遺跡は中世以降のものが大部分を占める。本書で報告する遺跡もいずれも中世のものである。奥遺跡は鎌倉時代、上中遺跡、宮ノ沢城跡が室町時代の遺跡である。



第1図　淡河城縄張図

現在の淡河城（1995年撮影）

萩原城（1995年撮影）

参考文献

美嚢郡教育会　『兵庫県美嚢郡誌』1925年

新修神戸市史編集委員会編　『新修神戸市史　歴史編Ⅰ　自然・考古』 1990 年

兵庫県教育委員会編『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』 1982 年

神戸市教育委員会編『昭和58年度神戸市文化財調査年報』

神戸市教育委員会編『昭和59年度神戸市文化財調査年報』

神戸市教育委員会編『昭和60年度神戸市文化財調査年報』

神戸市教育委員会編『昭和61年度神戸市文化財調査年報』

神戸市教育委員会編『昭和62年度神戸市文化財調査年報』

神戸市教育委員会編『昭和63年度神戸市文化財調査年報』

神戸市教育委員会編『平成元年度神戸市文化財調査年報』

神戸市教育委員会編『平成２年度神戸市文化財調査年報』

神戸市教育委員会編『平成３年度神戸市文化財調査年報』

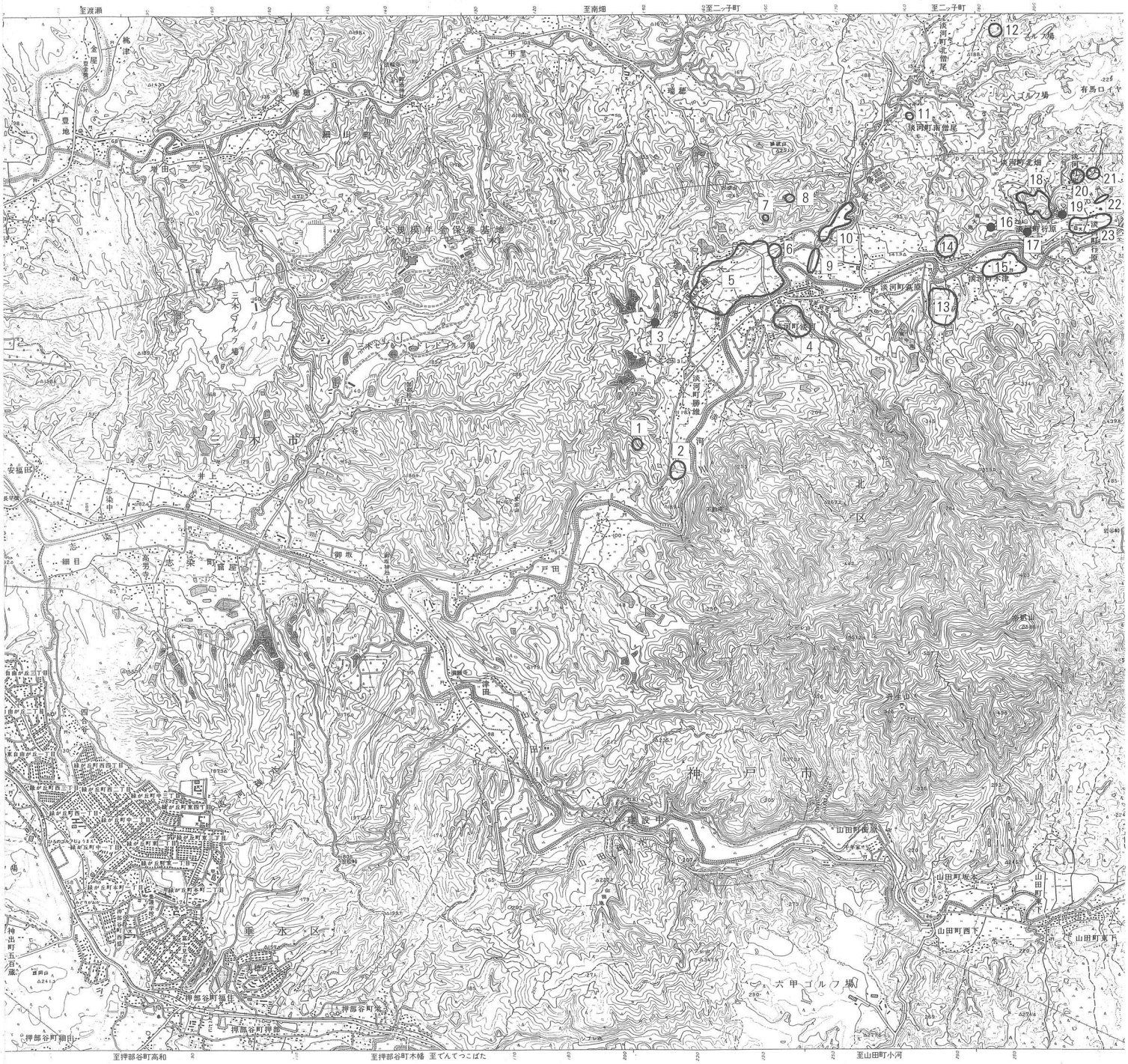
淡神文化財協会・淡河中山遺跡調査団『淡河中山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1993年

淡神文化財協会・萩原遺跡調査団『淡河萩原遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）』1992年

淡神文化財協会・萩原遺跡調査団『淡河萩原遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）』1992年

神戸市教育委員会『淡河城跡遺跡発掘調査概要』1977年

神戸市教育委員会『南僧尾Ａ・Ｂ地点発掘調査概要』1976年



1．勝雄経塚
2．野尻遺跡
3．愛宕遺跡
4．淡河城
5．淡河中村遺跡
6．宿池遺跡
7．天正寺城跡
8．北山経塚
9．歳田遺跡
10．奥遺跡
11．正神経塚
12．僧尾城跡
13．萩原城跡
14．萩原遺跡
15．（散布地）
16．南浦窯跡
17．投町経塚
18．宮ノ沢城跡
19．溝ノ上経塚
20．北畑城跡
21．東畑城跡
22．上中遺跡
23．行原遺跡

第2図　淡河の遺跡

Scale＝1/50000

24. 東畑遺跡
25. 筑前遺跡
26. 聖ヶ岡経塚
27. 聖岡城跡
28. 石峰寺遺跡
29. 中山遺跡
30. 尾上城跡
31. （散布地）
32. 中山大杣池遺跡
33. 神田遺跡
34. 野瀬城
35. 屏風遺跡

遺跡の位置・名称は『神戸市埋蔵文化財分布図』（1995.3）による。
（散布地）としたものは遺跡名がついてないものである。

表１　神戸市北区淡河町の遺跡

遺跡名	時代							所在地	遺跡の種類	文献	番号
	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	鎌倉	室町				
淡河中村	—		—	—	—	—	—	淡河町中村	集落・水田	神戸市	5
中山	—				—	—		淡河町中山	集落	淡神文化財協会・淡河中山遺跡調査団1993	29
中山大杣池	—							淡河町野瀬	散布地		32
神田	—					—	—	淡河町神田	集落	神戸市	33
萩原			—			—	—	淡河町萩原	古墳？・集落	淡神文化財協会・萩原遺跡調査団1992	14
行原						—		淡河町行原	集落・基地	神戸市	23
奥				—	—	—		淡河町淡河	包含層		10
上中						—	—	淡河町行原	庭園跡		22
宿池								淡河町淡河			6
愛宕											3
石峯寺坊跡						—	—	淡河町神影	寺院跡		28
天正寺廃寺							—	淡河町東畑	寺院跡		—
聖ヶ岡経塚								淡河町神影	経塚		26
溝ノ上経塚								淡河町行原	経塚		19
投町経塚						—		淡河町行原	経塚		17
正神経塚								淡河町僧尾	経塚		11
北山経塚								淡河町淡河	経塚		8
勝雄経塚							—	淡河町淡河	経塚		1
淡河城		—					—	淡河町淡河	集落・城郭		4
尾上城跡								淡河町神田	城郭		30
萩原城跡							—	淡河町萩原	城郭		13
荒堀城跡								淡河町東畑	城郭		—
北畑城跡								淡河町北畑	城郭		20
東畑城跡								淡河町北畑	城郭		21
宮ノ沢城跡		—				—	—	淡河町北畑	城郭		18
天正寺城跡								淡河町淡河	城郭		7
帝釈山砦								山田町坂本	城郭		—
丹生山城跡							—	山田町坂本	城郭		—

第３章　　確認調査

第１節　奥遺跡

調査の概要

第１章で述べたとおり昭和61年度に実施した分布調査で遺物の散布が認められたため、平成元年度に№67地点として確認調査を実施した。

調査は路線計画のSTA №134＋60からSTA №136＋60までの延長約200ｍ、幅35～45ｍの範囲を対象としている。対象面積は約6,500㎡である。

調査は２×２ｍの試掘坑を路線幅内に３ヶ所（北端、中央、南端）設置することを基本として、それを約20ｍ間隔で設定した。設置した試掘坑は合計19ヶ所である。調査は人力による掘り下げを行い、遺物と遺構の有無について調査を行った。

調査の結果

調査対象地のSTA №135＋80付近には、南北方向に１本の農道がある。この農道の東側と西側では水田面の標高に約60㎝の差がみられる。周辺の地形を観察すると、農道の西側は、背後の山塊を開析する谷の延長上にあることが判明した。この西側の地区では№１～７のグリッドを設定して調査を行ったが、谷を埋没させている土層のみが観察された。いわゆる遺構面と認められるようなしっかりした旧地表はみられず、遺物も出土していない。

農道から東側には13ケ所に試掘坑を設けて調査を行った。その結果、現地表下30～50㎝にしっかりしたベース面が検出され№17・18からは溝状遺構一部が、№20からは柱穴が検出された。さらに、厚いところでは約20㎝程度の土師器、須恵器など中世の遺物を包含した灰黄色の極細砂質シルト層が確認された。ただし、僧尾川に沿っている最下段に設定した№15グリッドでは川の氾濫の影響が大きく、遺構・遺物は全く認められなかった。

以上の結果から農道から東側について遺構・遺物の存在が認められたため、全面調査を実施することとした。

第２節　宮ノ沢城跡

調査の概要

分布調査の結果、路線内に含まれる周知の「宮ノ沢城跡」においては、土塁などの城跡関連施設や遺物の散布を確認することはできなかった。しかし、人為的な造成地と思われる平坦地がわずかに認められたため、平成２年度に№70地点として、遺跡の性格や範囲を確定するために確認調査を実施した。

路線内には、この城跡の主郭と思われる頂部と尾根筋および南斜面が含まれている。路線計画でいえば、STA№117＋10から、STA№119＋70までの、延長約250ｍ、幅約80ｍの広範囲にわたるため、調査にあたっては、地形の検討の結果、遺構の存在する可能性が高いと思われる尾根筋を中心として、幅２ｍのトレンチを９本設定した。

トレンチは、Ⅰ．東西方向に伸びる主尾根に設定したもの（⑥・⑧・⑨トレンチ）、Ⅱ．そこから南方向へ派生する小規模な尾根上に設定したもの（①～③・⑤トレンチ）、Ⅲ．南斜面の谷地形内に設定したもの（④・⑦トレンチ）からなる。トレンチを中心とした幅５ｍの範囲で伐木を行い、人力による掘削・精査、記録作成ののち、埋戻しを行って全調査を終了した。

調査の結果

Ⅰ．主尾根の状況（⑥・⑧・⑨トレンチ）

標高約 237ｍを測る頂部（第５章第３節の「第１ピーク」）の東側斜面は、著しい急斜面となっており、その斜面を約９ｍ降りたところには、北側に回り込む帯状の平坦面（「北側平坦面」）が明瞭に認められた。この平坦面を切る形で尾根筋に沿って東西方向に設定したのが⑥トレンチである。深掘り調査によれば、この平坦面は自然地形ではなく、明らかに盛土おそらくは第１ピーク東側斜面を削った土で造成されているらしいことが確認された。なお、この平坦面からは土師器皿が１点出土した。

⑧・⑨トレンチは、深さ30㎝までで地山面が現れ、遺構・遺物とも一切確認できなかった。

Ⅱ．派生尾根の状況（①～③・⑤トレンチ）

いずれも、自然崩壊による土砂の流出が激しく、20㎝程度で岩盤にいたる調査区がほとんどである。

①トレンチの頂部（第５章第３節の「第２ピーク」）のすぐ下方では、ごく小規模な平坦面を確認した。また、⑤トレンチにも、尾根の頂部からわずかに下がった場所に、岩盤をくり抜き、尾根を切断しているように見える箇所がある。ただし、調査区の狭さや後世の自然崩壊により、これらの平坦面ないし落ち込みを遺構と断定することはできない。

①・⑤トレンチ以外では、深さ20㎝までで地山面が現れ、遺構・遺物とも一切確認できなかった。

Ⅲ．谷地形の状況（④・⑦トレンチ）

両トレンチとも地山面までの深さは30㎝から150㎝と著しく、上方から土砂が流れ込み、谷地形が埋め尽くされつつある状況であった。いずれのトレンチでも南端部は、後世の開墾による造成が及んでおり、旧地形は失われている。

以上のように、遺構および遺構らしきものが確認されたのは①・⑤・⑥トレンチとなる。この調査結果から、第１ピークを中心として、西端は第２ピークを含む①トレンチから、東端は⑥トレンチまでの、尾根を中心とした部分には、中世以降の山城に関連すると思われる遺構の存在する可能性があり、この範囲について全面調査を実施することとした。

第３節　淡河上中遺跡

調査の概要

分布調査の結果、遺物の散布が認められたため、工事用道路の杭№24から杭№31までの、延長140ｍ、幅10～30ｍの範囲を対象として確認調査を実施した。２×２ｍの試掘坑を10ヶ所設定し、人力による掘り下げを行った。遺構と遺物の有無を明らかにし、記録作成ののち全地点について埋戻しを行って調査を終了した。

調査の結果

①～③グリッドは、西側の山裾に設定した調査区で、わずかに中世のものらしき遺物が出土するが、明確な遺構は認められなかった。

これに対して④～⑩グリッドでは、中世の遺物が大量に出土した。また、④・⑥グリッドから土坑・柱穴が認められたほか、⑥・⑧グリッドからは人為的に埋められたと思われる大規模な落ち込みが、⑦グリッドからは２条の溝が、⑨グリッドからは炭を含む溝が検出された。

以上の結果から、④～⑩グリッドの位置する台地上には、中世を中心とする時期の集落遺跡が存在する可能性が高いと判断され、当該範囲の全面調査を実施することとした。

第４章　　奥遺跡の調査

第１節　遺跡の立地

奥遺跡は神戸市北区淡河町淡河字奥 367他に所在する。大阪層群を基盤とした周辺の山並みは比較的緩やかで、丘陵状の地形を出現させている。周辺に平野と呼べる程広大な平坦部はなく、淡河川の両岸にわずかにみられるのみである。古くから人々はこの狭い土地を開墾し続け、現在淡河川の両岸には棚田が山裾に至り、のどかな風景となっている。かなり高い標高まで水田を開発していることもあって川から水源を求めることは困難で、周辺には開析谷をせき止めて造った溜め池を多くみることができる。一方、北側に広がる緩やかな丘陵部は、ゴルフ場建設にとっては絶好の地形を呈しており、加えて中国縦貫自動車道が開通することによって都市部からの交通が便利になりゴルフ場建設ラッシュとなった。ここ淡河地区も例にもれず、北側にはゴルフ場が点在している。遺跡はこの淡河川の支流である僧尾川が開析した谷部に位置している。僧尾川は奥遺跡付近で大きく蛇行して南下し淡河川に合流している。僧尾川が開析した谷にはさらに小さな支谷があり、そこから流出した堆積物が川の流れに影響を与えている。この支谷は奥遺跡の北西部にも存在しており確認調査で遺構・遺物が全く確認できず全面調査を除外した地区の、№１～７グリッドはこの支谷の延長上に位置している。この川に沿って現在の国道428号線がはしっており、北の吉川方面に抜ける街道として古くから利用されている。反対にこの街道を南に出ると東西にはしる淡河街道と交差する。その地点が淡河町淡河の中心部で本陣も置かれていた地点である。

第２節　基本層序

調査区にあたる地域の現地目は水田である。このあたりを微視的にみれば、確認調査の№13・14グリッド付近に小さな谷がはいっているようで、それは現水田の平面形状にも反映している。調査区内には３段に水田がつくられており、最も高い水田が133.36ｍ、最も低い水田が130.68ｍと2.7ｍ近い標高差が認められる。標準断面は調査区の北壁をとっているが、基本的に単純な堆積状況を示している。遺構検出面は20層の淡黄橙色のシルト質極細砂である。その直上には６層の灰色の小礫～極粗砂混じり極細砂、16層の灰褐色の極細砂、17層の黒褐色の巨礫～中礫混じり極細砂、18ａ層の灰色の極細砂、19層の褐色の細礫混じり細砂が堆積している。これらの層は遺物を包含しているものである。中央部が下がっており旧地形が谷状であったことが確かめられた。遺物は量的には谷部の最も低い位置から多く出土している。包含層より上では、現地表面を含めて４層程度の土壌化した土層が堆積している。

第３節　遺構

全面調査を行った結果、確認調査時の№ 17グリッドで確認した遺構はＳＤ０３に、№18グリッドで確認した遺構はＳＤ０２に、№20グリッドで確認したものはＳＫ０１にあたることが明らかとなった。さらに№10グリッドは谷部の包含層で比較的遺物の多い位置に設定していたことが判明した。

以下に検出した各遺構について記述する。

土坑

ＳＫ０１

調査区上段の北東部で検出したものである。遺構は一部確認調査の試掘坑で切られているが、全体を検出することができた。平面形はやや歪な楕円形を呈している。ほぼ東西方向に長軸の方向をとっている。規模は、長軸方向に5.75ｍ、短軸の最も幅の広い部分で2.50ｍである。深さは平面規模と比較して浅く、15㎝程度である。断面の形状は浅い皿状を呈する。埋土は底部の一部に炭化層かみられるほか、土層としては１層である。暗黄灰色で炭化粒を含む極細砂混じりシルトが堆積している。底部には直径25㎝の小穴が１穴検出されている。埋土がＳＫ０１と同じものであるため、同一の遺構であると考えられる。埋土中より土器が出土している。いずれも小片のため図化していないが、須恵器の椀・鉢、土師器の甕などが出土している。平安時代のものと考えられる。

ＳＫ０２

調査区上段の北東隅で検出したものである。遺構は全体を検出することができた。平面形は楕円形を呈している。北北西－南南東に長軸の方向をとっている。規模は、長軸方向に73㎝、短軸の最も幅の広い部分で44㎝である。深さは12㎝程度である。断面の形状は浅いＵ字形を呈する。埋土は１層の堆積が認められる。暗褐色で炭化物を含む極細砂が堆積している。埋土中より土器が出土している。１の須恵器の杯である。

ＳＫ０３

調査区上段の中央部の北壁付近で検出したものである。遺構は調査区境界にかかっているため、範囲外にのびており全体を検出することができなかった。平面形は溝状を呈しており、ここでは土坑としているが、溝である可能性も高い。北北西－南南東に長軸の方向をとっている。規模は、長軸方向に検出された範囲で2.50ｍ、短軸の最も幅の広い部分で1.26ｍである。深さは15㎝程度である。断面の形状は皿状を呈する。遺物は出土していない。

ＳＫ０４

調査区上段の中央部付近で検出したものである。ＳＫ０５と近接している。遺構は全体を検出することができた。平面形は楕円形を呈している。北西－南東に長軸の方向をとっている。規模は、長軸方向に1.85ｍ、短軸の最も幅の広い部分で0.93ｍである。深さは５㎝程度と非常に浅いものである。断面の形状は浅い皿状を呈する。遺物は出土していない。

ＳＫ０５

調査区上段の中央部付近で検出したものである。ＳＫ０４と近接している。遺構は全体を検出することができた。平面形は直径約50㎝の円形を呈している。深さは15㎝である。遺物は出土していない。

ＳＫ０６

調査区上段の中央からやや南西よりで検出したものである。ＳＫ０７と近接している。遺構は全体を検出することができた。平面形は検出面では円形ぎみであるが、底部では楕円形を指向しているようである。全体としては北－南に長軸の方向をとっている。規模は、長軸方向に87㎝、短軸の最も幅の広い部分で77㎝である。深さは20㎝程度である。断面の形状は浅いＵ字状を呈する。埋土は１層が認められる。黒褐色のシルト質極細砂が堆積している。遺物は出土していない。

ＳＫ０７

調査区上段の中央からやや南西よりで検出したものである。ＳＫ０６と近接している。遺構は全体を検出することができた。平面形は楕円形を指向しているようである。全体としては北西－南東に長軸の方向をとっている。規模は、長軸方向に70㎝、短軸の最も幅の広い部分で58㎝である。深さは22㎝程度である。断面の形状は浅いＵ字状を呈する。埋土は２層が認められる。上層に暗褐色の粗砂混じり極細砂が、下層に黒褐色のシルト質極細砂が堆積している。遺物は出土していない。

ＳＫ０８

調査区下段の中央からやや北東よりで検出したものである。ＳＫ０９と重複して検出され、これに切られている。平面形は歪な楕円形を呈している。北西－南東に長軸の方向をとっている。規模は、長軸方向に検出できた範囲で2.50ｍ、短軸の最も幅の広い部分で1.43ｍである。深さは12㎝程度である。断面の形状は浅い皿状を呈する。遺物は出土していない。

ＳＫ０９

調査区下段の中央からやや北東よりで検出したものである。ＳＫ０８、ＳＤ０４と重複して検出され、ＳＤ０４に切られ、ＳＫ０８を切っている。平面形は方形を指向している。北東－南西に長軸の方向をとっている。規模は、長軸方向が2.90ｍ、短軸の最も幅の広い部分で1.56ｍである。深さは10㎝程度である。断面の形状は浅い皿状を呈する。埋土は１層が認められる。炭を多量に含む黒色極細砂混じりシルトが堆積している。遺物は出土していない。

ＳＫ１０

調査区下段の南西部で検出したものである。遺構は全体を検出することができた。平面形は方形を指向しているようであるが、隅円状である。北東－南西に長軸の方向をとっている。規模は、長軸方向が5.00ｍ、短軸の最も幅の広い部分で2.05ｍである。深さは10㎝程度である。断面の形状は浅い皿状を呈する。埋土は１層が認められる。炭を多量に含む黒色極細砂混じりシルトが堆積している。遺物は出土していない。ＳＫ０９と非常に似通った遺構である。

溝

ＳＤ０１

上段で検出したものである。遺構は東側に調査区外に伸びている。中世の須恵器の椀などが出土しているが、これは現水田の溝と一致する位置にあるため、時期としては非常に新しいものである。

ＳＤ０２～０６

調査区の下段で検出したものである。ＳＤ０２～０６と５条の溝のようにしているが、本来は１本のものであったと思われる。溝は地形の等高線に並行しており、長さは60ｍ程度を検出し、東側は調査区外にのびている。幅は0.60～1.20ｍである。深さは20～40㎝を測る。埋土は暗褐灰色の細砂質シルトを主体としたものである。遺物は須恵器の杯・蓋・甕、土師器の小皿・甕か鍋などが出土しているが、須恵器の杯（２）と土師器の小皿（３）を図化している。

谷部

上段の西側の調査区境界から約15ｍ程度東側の位置で、比較的土器が多く出土した場所が認められた。標準断面でみると旧地形の谷部の最も低い地点にあたる。この部分は黒褐色の巨礫～中礫混じりの極細砂が堆積している。他の部分の包含層の灰色～褐色系のものとは違いをみせている。ここから出土した土器は須恵器の蓋・杯・壺、土師器の杯・甕などが出土し、そのうち15点を図化している。

第４節　遺物

ＳＫ０２出土の土器

１：須恵器の杯である。底部1/6、口縁部 1/6程度の残存している。高台をもつもので、やや外方に踏ん張っている。口縁部は比較的直線的にひらいている。口縁部径が復元で12.8㎝、器高が3.9㎝、底径が復元で10.0㎝である。

ＳＤ０４出土の土器

２：須恵器の杯で、底部が約 1/4程度残存している。高台をもつものである。残存高3.45㎝、底径が復元で9.8㎝である。

３：土師器の小皿である。口縁端部が若干欠失しているのみである。底部には糸切り痕がみられる。口縁部径は 8.6㎝、器高が 1.6㎝、底径が5.05㎝である。

谷部出土の土器

４：須恵器の蓋で約1/4が残存している。天井部に笠形のツマミを有している。口縁部付近で大きく屈曲し、端部は垂下する。口縁部径は復元で18.8㎝、器高が3.0㎝である。

５：須恵器の蓋で約1/6が残存しているが、天井部のツマミは欠失している。口縁部付近で大きく屈曲し、端部は垂下する。４と同タイプのものと思われる。口縁部径は復元で16.5㎝、残存高が2.3㎝である。

６：須恵器の杯で底部が約1/6が残存しているが、口縁部はごく僅かである。高台をもつもので、杯部の深いタイプである。口縁部は若干内湾しながら立ち上がる。口縁部径は復元で16.0㎝、器高は6.25㎝、底径は復元で8.4㎝である。

７：須恵器の杯で口縁部の約1/2が残存しているが、底部を欠失している。高台をもっていたものと思われる。杯部の深いタイプのものである。口縁部は若干内湾しながら立ち上がる。口縁部径は復元で14.3㎝、残存高は4.95㎝である。

８：須恵器の皿で口縁部の約1/8、底部の1/3が残存している。高い高台をもっており、口縁端部は上方

に摘まみ上げている。口縁部径は復元で18.3㎝、器高は3.35㎝、底径は復元で11.9㎝である。

9：須恵器の杯で底部の約1/4が残存しているが、口縁部の残りはごくわずかである。底部に回転ヘラケズリの後ナデを施している。口縁部径は復元で13.7㎝、器高は3.4㎝で、底径は復元で10.1㎝である。

10：須恵器の杯で口縁部から底部にかけての約1/5程度が残存している。底部は残りが悪いが、回転ヘラケズリの後ナデを施しているのが観察される。口縁部径は復元で12.4㎝、器高は3.15㎝で、底径は復元で8.2㎝である。

11：須恵器の壺である。口縁部から体部かけて1/10程度残存している。体部外面にはタタキの後カキ目、体部内面には同心円タタキが観察される。口縁部径は復元で17.2㎝、残存高は6.1㎝である。

12：須恵器の壺である。口縁部から頸部にかけて 1/3程度残存している。口縁部がおおきく開き、口縁端部は上方に摘まみ上げている。口縁部径は復元で10.3㎝、残存高は3.05㎝である。

13：須恵器の壺の底部である。 1/7程度の残存である。底部には高台をもつ。残存高6.05㎝、底径が復元で11.7㎝である。

14：須恵器の壺の底部である。1/4程度の残存である。底部には高台をもつ。残存高8.1㎝、底径が復元で18.7㎝と大型のものである。

15：須恵器の壺の底部である。1/5程度の残存である。底部には平底でヘラ切り後ナデを施している。外面の調整はタタキ後ナデ消し、内面は同心円タタキが観察される。残存高9.5㎝、底径は復元で22.2㎝である。

16：土師器の杯である。口縁部1/6、底部の1/2が残存している。焼成が悪く、磨滅が激しいため調整の観察は困難である。横方向のナデと底部内外面に指頭圧痕が観察される。口縁部径は復元で14.4㎝、器高は3.0㎝、底径は復元で10.1㎝である。

17：土師器の甕である。口縁部から体部にかけて1/8程度の残存である。口縁部は外側におおきく開き、端部は上方にわずかに摘まみ上げる。体部外面の調整は８条／㎝の縦方向のハケ、口縁部内面には８条／㎝と５条／㎝の２種の単位の横方向のハケが観察される。口縁部径は復元で32.3㎝、残存高は15.7㎝、腹径は復元で29.2㎝である。

18：土師器の甕である。口縁部から体部にかけて1/3程度の残存である。内外面の調整は磨滅が激しく観察不能である。口縁部径は復元で12.0㎝、残存高は6.2㎝、腹径は復元で11.1㎝と小型のものである。

包含層出土の土器

19：須恵器の杯で底部から口縁部にかけてごくわずかの残存である。高台をもつもので、口縁部は緩やかに外方に開いている。口縁部径は復元で13.0㎝、器高は4.25㎝、底径は復元で9.3㎝であるが、残存率が悪いため口縁部径に若干の不安がある。

20：須恵器の小皿である。底部から口縁部にかけて約1/5程度の残存である。底部には糸切り痕がみられる。口縁部径は復元で7.9㎝、器高が1.25㎝、底径が復元で6.0㎝である。

21：須恵器の小皿である。底部から口縁部にかけて約1/4程度の残存である。底部には糸切り痕がみられる。口縁部径は復元で7.9㎝、器高が1.65㎝、底径が復元で7.7㎝である。

22：須恵器の鉢である。口縁部のみ1/10程度の残存で、底部は欠失している。口縁端部は内側上方に摘まみ出している。口縁部径は復元で28.0㎝、残存高は3.4㎝である。

23：須恵器の鉢である。口縁部のみ1/10程度の残存で、底部は欠失している。口縁端部はわずかに上方

に摘まみ上げている。口縁部径は復元で28.4㎝、残存高は4.15㎝である。

24：須恵器の鉢である。口縁部のみ 1/8程度の残存で、底部は欠失している。口縁端部は磨滅が激しいが、わずかに上方に摘まみ上げているようである。口縁部径は復元で24.6㎝、残存高は6.25㎝である。

25：土師器の小皿である。底部は 3/4、口縁部はごくわずかの残存である。底部には糸切り痕がみられる。口縁部径は復元で7.4㎝、器高が1.6㎝、底径は4.7㎝である。

26：土師器の小皿である。底部は 1/2、口縁部は 1/4程度の残存である。全体に薄手のもので、杯部が深いタイプのものである。底部には糸切り痕がみられる。口縁部径は復元で8.3㎝、器高が2.1㎝、底径は5.0㎝である。

27：須恵器の底部である。杯のものと思われる。約1/2程度の残存である。高台をもつもので、底部外面にヘラ切り痕が、内面に一方向のナデが観察される。残存高は2.05㎝、底径は復元で8.9㎝である。

28：須恵器の底部である。椀のものと思われる。約1/2程度の残存である。平高台をもつものでかなり退化している。底部に糸切り痕がみられる。残存高2.5㎝、底径6.2㎝である。

29：須恵器の底部である。椀のものと思われる。約1/8程度の残存である。平高台をもつものである。底部も大半が欠失しているが、内面の見込みは若干落ちぎみである。底部に糸切り痕がみられる。残存高3.8㎝、底径7.6㎝である。

30：土師器の甕である。口縁部から体部にかけて1/8程度の残存である。口縁端部を外側に拡張している。体部外面に２条／㎝の横方向のタタキ、体部内面には横方向のヘラ削りを施している。口縁部は内外面ともに横方向のナデ調整を行う。口縁部径は復元で26.4㎝、残存高は7.6㎝である。

31：土師器の甕である。口縁部から体部にかけて1/2程度の残存である。内外面の調整は磨滅が激しく観察不能である。口縁部径は復元で12.2㎝、残存高は10.4㎝、腹径は復元で13.7㎝と小型のものである。

32：土師器の羽釜である。口縁部から体部にかけてわずかな残存である。口縁部は内傾した後、端部を若干外方に開く。鍔は水平よりやや上方にのびる。内外面の調整は横方向のナデである。口縁部径は復元で28.5㎝、残存高は6.45㎝である。

第５節　小結

調査の結果、検出した遺構としては土坑が10基と溝が６条である。遺構から出土した遺物は９世紀前半のものがみられ、これらの時期の遺構と考えられる。溝からは９世紀前半のものとともに10世紀以降の椀の破片が出土しているためより新しい時期のものと思われる。包含層から出土した土器についても、図化していないものを含めて９世紀台のものが多いと思われるが、10世紀以降の遺物も出土している。調査では、この時代の遺跡の中心部分を調査しているわけではないが、良好な包含層が存在していること、集落を想定するには山側との面的空間が狭いこと、包含層が黒褐色の極細砂で灰原の末端、あるいはその流れたものである可能性が考えられることなどから、調査区の北西側の傾斜面には窯跡が存在している可能性が強い。

第５章　宮ノ沢城跡の調査

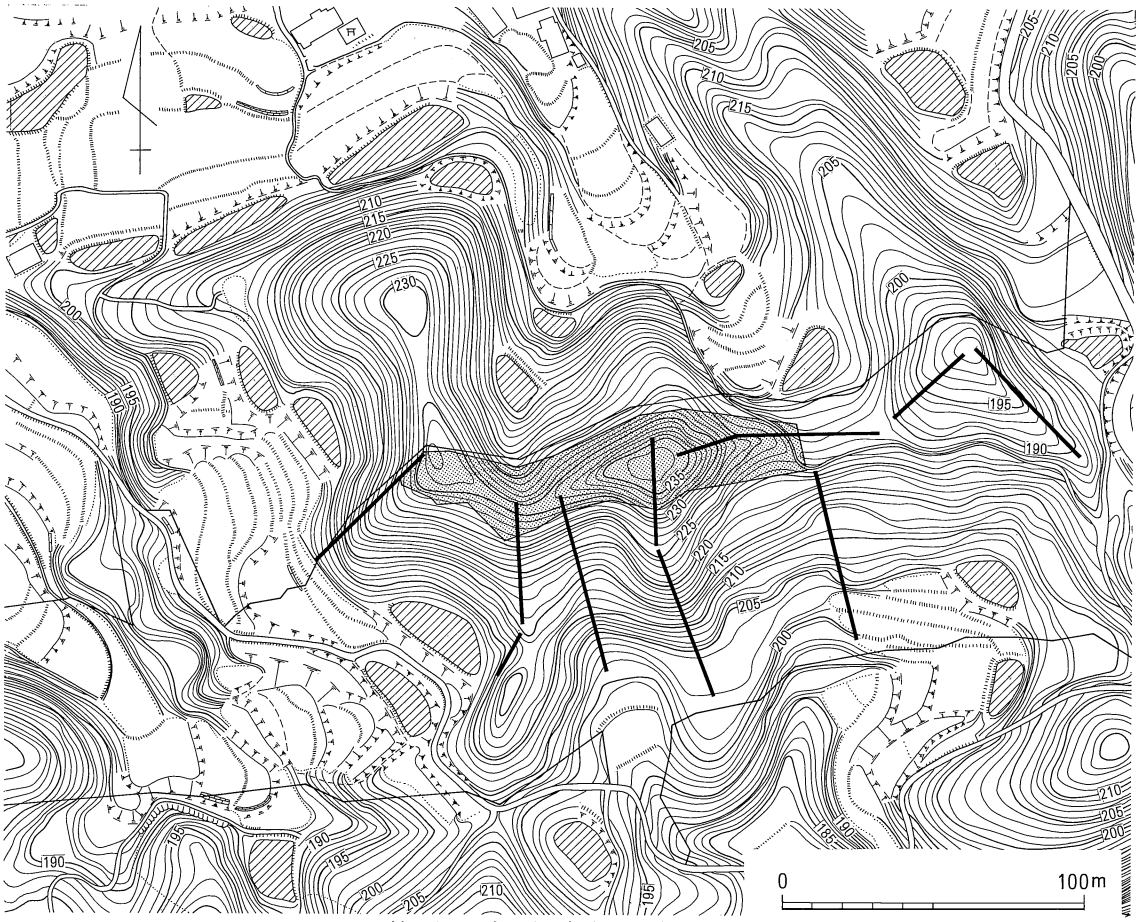
第１節　遺跡の立地

宮ノ沢城跡は神戸市北区淡河町北畑字宮ノ沢にある。淡河川北側にひろがる丘陵の南縁部であり、西側には現在北大池、南大池といった灌漑用溜池がつくられている開析谷がある。この谷から延びる支谷によって、北側と西側は急斜面となり、東側は細い尾根によって北畑城跡のある丘陵に続く。

城跡がある丘陵は東西・南北ともに約200ｍほどの範囲であり、３つのピークとこれをつなぐ細い尾根からなる。丘陵の標高は最高部で237ｍであり、尾根部で標高230ｍほどである。調査した範囲は南側の２つのピークと尾根であるが、周囲はいずれも急斜面であり、傾斜変換点付近から下は階段状に造成され、水田として利用されている。またこの水田に配水するための小さな溜池が谷をせき止めて造られている。

丘陵を構成する基盤は神戸層群に分類される泥岩質の地層であり、水による浸食によって崩壊しやすいものである。このため丘陵頂部付近は45°を越える急な崖となって岩盤が露出しており、その南側には崩壊した土砂の堆積によってゆるやかな張り出しが形成されている。

丘陵の東側の裾部を西国25番札所である清水寺（加東郡東条町）へ至る巡礼道が通っているが、三木三田へ向かう淡河川沿いの街道筋からは少し奥に入った所である。



第３図　宮ノ沢遺跡　調査位置図

第２節　調査の方法と経過

確認調査によって調査範囲とされた部分2949㎡について全面調査を実施した。調査はまず調査範囲を含む道路予定地内の現況測量を空中写真測量（縮尺 250分の１）によっておこなった。その後、抜根と表土除去のためにバックホーによって掘削をおこない、これに続き人力による掘削をおこなった。掘削終了後、再び空中写真測量（縮尺 100分の１）によって遺跡全体の測量を行い、最後に断割りをおこなって調査を終了した。

第３節　遺構

調査の結果、宮ノ沢城跡は自然崩壊が著しく、人為的な造成が確認できたのはわずかな範囲においてのみであった。このため以下の説明では「曲輪」という用語は用いず、第４図にしめしたように、丘陵の最高部を第１ピーク、そこから西へ続く尾根を西側尾根、西端の高まりを第２ピーク、第１ピークの東へ続く尾根を東側尾根、第１ピークの北側の唯一の人為的造成地の可能性がある場所を北側平坦地と呼称する。これは「曲輪」という用語が城郭に伴う人為的な造成地の意味を帯びるためである。

１．第１ピーク

調査範囲の東側にあり、丘陵の最高部である。標高は 237ｍであり、西側に細い尾根が続く以外は、３方が急傾斜の斜面となっている。頂部は東西20ｍ、南北10ｍほどの平坦地になっているが、岩盤が露出し自然地形のままの起伏が観察できる。ここからは四方に眺望が開け、淡河城や現在の淡河の町がみわたせる。斜面の傾斜は東側が約35°、西側が約20°、北側が30°、南側が30°から45°である。ことに南側斜面は崩壊が著しく、部分的には垂直に近い傾斜になっている。

頂部は薄い表土層に覆われるのみであり、盛土などの人為的な造成の痕跡は認められないが、平坦地を造るために若干の造作をくわえていた可能性はある。また柱穴や土坑などの遺構も全く認められなかった。遺物は北側の斜面から土師器の小皿や弥生土器が出土している。

２．第２ピーク

調査範囲の西端にある。標高は232ｍであり、東側と北側に尾根が続く。北側は谷であり、斜面の傾斜は30°を越える。南側、西側も比高差20ｍ以上の急斜面になっている。頂部は東西・南北10ｍほどの粗放な平坦地がある。ここからも南および西側に眺望がひらける。表土層を剥ぐとすぐに岩盤が露出し、盛土などの人為的な造成の痕跡は認められなかった。遺構もなく遺物も出土していない。

このピークの北側に続く尾根には、堀切らしき窪みがあるが、調査範囲外であったために人工のものかどうか確認していない。

３．北側平坦地

第１ピークの北側にある平坦地である。東西14ｍ、南北８ｍの三角形の部分の東側に幅２～３ｍ程の帯曲輪状の平坦地が続く。標高は228ｍであり、第１ピークからは10ｍほど下がる。北側は調査範囲外に続くため、一部のみしか調査していない。また帯曲輪状の平坦地も一部削平を受けていた。

斜面の上側を削り、その土を盛り上げて平坦地を作り出している。断ち割り断面で見てみると、旧表土の上に薄く盛土がされているのが観察できた。柱穴や土坑などはないが、土師器の小皿や鍋、サヌカ

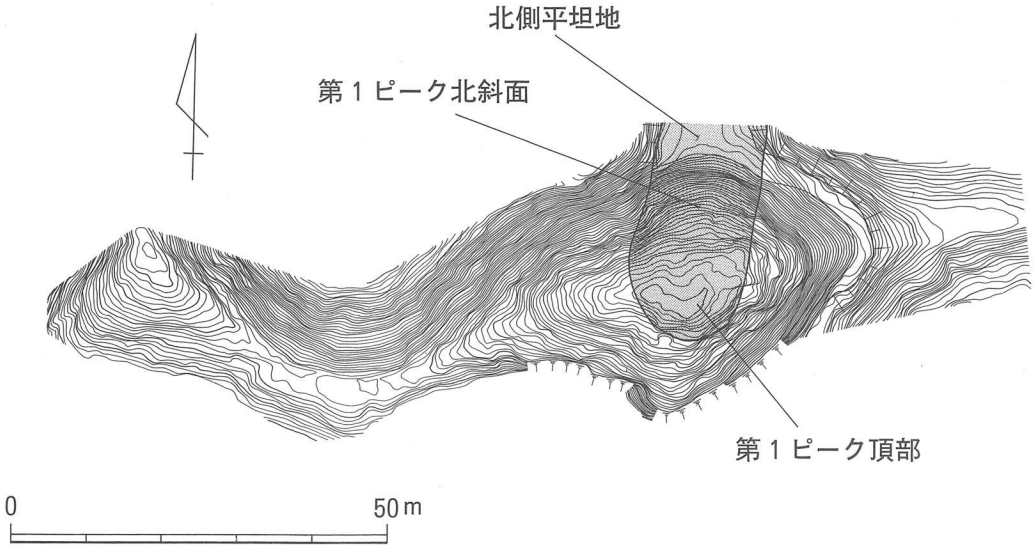
イト剝片などが出土している。

4．西側尾根

第１ピークと第２ピークをつなぐ尾根である。標高は 230ｍである。幅は最も広いところで５ｍほどであり、南北は30°以上の急な斜面になっている。表土を剥ぐとすぐに岩盤が露出した。人為的な造成は無い。遺物は須恵器のこね鉢（12）が出土している。

5．東側尾根

第１ピークの東側に続く幅の広い尾根である。最大幅は10ｍほどであり、標高は224ｍである。南側はゆるやかな斜面、北側は急な斜面である。尾根はさらに東へと続いている。人為的な造成は認められず、遺構もない。遺物も出土していない。



第４図　宮ノ沢城跡　遺物出土範囲

第４節　遺物

第１ピーク北側斜面、北側平坦地、西側尾根か１弥生時代と中世の遺物が出土している。１～３、５～７、10が北側平坦地からの出土であり、４・８・９・11が第１ピーク北側斜面からの出土、12が西側尾根からの出土である。

１～８は土師器の皿である。色調はいずれも赤味かかった褐色で、胎土に砂粒を含む。手づくねのものであり、口縁部に強いヨコナデを加える。口径は11.5㎝前後である。器形は口縁部が外反する深めのもの（１～７）と外反しない浅目のもの（８）とがある。

９・10は土師器の鍋である。口縁部はやや外反し、端部は折り返して丸くおさめる。外面にはタタキを施し、内面はハケで仕上げる。色調は９が褐色であり10が赤味がかった褐色である。

11は弥生土器の高杯である。外面に４条の凹線文を施す。12は須恵器のこね鉢である。片口がつくと思われる。口縁部は内側に折り返されている。

以上が出土遺物であるが、11は弥生時代中期のもの、他はいずれも13世紀後半から14世紀のものである。

第5節　小　結

調査の結果、宮ノ沢城跡では北側平坦地を除いては人為的な造成の痕跡は認められなかった。また出土した遺物は13～14世紀のものであり、中世城郭が一般化する応仁・文明の乱以降の時期の遺物は全く出土していない。これらの材料をもとに考えるとき、前提としてこの遺跡を城郭と見るか否かによってその結論は異なるものとなる。

まずこの遺跡を城郭とみる立場で論をすすめよう。まず人為的造成が顕著でない点についてであるが、この城は自然地形を最大限に利用したものであると考えれば、解釈は可能である。すなわち第1、第2ピークは自然地形のままではあるが曲輪として使用することは不可能ではない。また周囲が急斜面であるために堀切や土塁を設けなくても、充分に防御できると考えられる。また北側に平坦地が作り出されているのは、この方面を防御の要と考えたからである。すなわち北側の谷筋を上り詰めると北側平坦地に至るのであるから、この方向の防御拠点として北側平坦地が造られたのである。遺物が古い時期のものである点については、これらの遺物は城郭化の前になんらかの行為によってこの場所まで運ばれたものであり、北側平坦地が造成された後に第1ピーク頂部から流れ落ちたものであると解釈できる。16世紀以降の遺物が無いのは、この城が単なる見張り台的なものであり、ここに生活用具を持ち込んで、戦闘に備えるようなことがなかったためと考えられる。以上のように考えれば、宮ノ沢城跡は中世城郭の一例として捉えることが可能である。

次にこの遺跡を城郭であるという先入観無しに論を進めよう。人為的な造成の無い部分についてはこれを誰がどう利用していたかという判断の根拠は何もない。北側平坦地が人為的造成であることは疑問の余地はない。ただこの造成が城郭に伴うものであるかどうかは明確には判断できない。この平坦地のすぐ下まで階段状の棚田の造成が迫っており、溜め池も造られている。北側平坦地の造成がこのような耕地開発の一環として行われた可能性も否定できないのである。また13～14世紀の遺物が出土したことも、これを城郭の一部とするには否定的な要素と考えることも可能である。すなわちこの遺物を含む流土が平坦地造成の直後に堆積したものであると考えれば、この平坦地の造成は14世紀頃となり、中世城郭がん盛行する時期よりはかなり古い時期のものとなる。この時期に曲輪を造成した城郭が存在することを否定することはできないが、全国的にも数少ない鎌倉時代の城郭と宮ノ沢城跡を捉えることには若干の不安を覚える。以上のように宮ノ沢城跡を城郭の可能性が低いものと捉えることも可能である。

上記の二通り以外にも解釈は可能かも知れないが、どちらが正しいのかの選択は困難である。考古学の立場では後者を採るべきかもしれないが、前者も全く根拠の無いものではない。城郭を人為的な造成によって防御施設が構築された遺構の集合体と定義するならば、宮ノ沢城跡はこの定義からは逸脱する。しかし人為的な造成が希薄でも、戦時に人間が籠もる場所を城郭とするならば宮ノ沢城跡も城郭の範疇で捉え得る。ただし後者をも城郭とするならば、発掘調査によって遺構・遺物が得られる可能性は低く、これを城郭かどうか判断するには別の基準が必要となる。

いずれにしても「宮ノ沢城」の全体を発掘調査しえたわけではないため、現時点での判断は本報告の事実報告にとどめておきたい。

参考にすべき文献史料もない場合の城郭の調査の限界であるというのが、調査担当者の正直な感想であり、今後このような事例にあたる時にまで何らかの解決方法を検討する必要性が認められる。

第６章　淡河上中遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

淡河上中遺跡は、神戸市北区淡河町行原字上中440他に所在する中世に比定される遺跡である。周囲の周辺は標高 200ｍ前後の山々に囲まれ、大小の谷部が複雑に入り組み、これらの谷部から流出した土砂によって扇状地が形成されている。遺跡は行原集落の北側に展開している扇状地の扇頂部に位置し、扇状地の南端は、東西に蛇行して流れる淡河川の浸食によって形成された段丘崖によって限られ、西側は中世寺院の石峰寺が所在する神影集落に端を発する石峰川によって限られている。南側には扇状地を東西に横切る形で主要県道三木三田線が走る。

遺跡の周辺は幅５ｍ～10ｍ前後の狭小な水田が営まれ、これら水田の水源として、遺跡の北側に展開する山地部分の谷部および尾根部に小規模の溜池が掘られている。

淡河地区は古くは鎌倉幕府の副執権北条時房の所領である淡河荘として栄え、その後時房の孫にあたる朝盛の時、淡河氏と号したと言われている。南北町時代には南朝方として播磨の赤松円心と敵対し、一時その居城である淡河城を奪われている。その後淡河氏は文明18年以降、播磨の有力豪族であった別所氏に属し、天正６年には羽柴秀吉に破れ、当地区の淡河氏支配は終わった。

遺跡の北東方向約1.5㎞の地点には中世に栄えた石峰寺、その背後には南北朝時代に石峰寺の僧兵が立て籠もったと言われている石峰寺城が控えている。

遺跡の南西側、主要県道三木三田線に沿って点々と中世の荻原城・天正寺城・淡河城の各城が築かれており、当地区が摂津と播磨地方を結ぶ交通の要所として戦略上重要な位置を占めていたと考えられる。このような地理的・歴史的環境のなかで淡河上中遺跡は成立している。

調査の結果、池、池に連結する「コ」の字状の溝、土坑、柱穴等の遺構が確認された。

遺物は土師器、須恵器、瓦質土器、丹波焼・備前焼・瀬戸美濃焼の国産陶器、輸入磁器などの製品をはじめ、少量ではあるが平・丸瓦および軒丸瓦が出土している。土鍋・土師器皿・捏鉢等の生活雑器のなかに、貯蔵器として壺・甕などの丹波焼の地元国産陶器が用いられていることが、本遺跡の特徴である。

第２節　周辺の地形と遺跡の地形的変化

調査区の南側に展開する扇状地は、調査区付近（標高176ｍ）を扇頂部として南東方向に大きく張り出す微高地を形成している。微高地は扇頂部から比較的急な傾斜が続き標高167ｍ付近で緩やかな傾斜に変化し、比較的平坦になる。扇状地の南端および東側は旧淡河川および石峰川の浸食作用による比高差10～15ｍの段丘崖によって地形を限られている。遺跡はこの扇頂部付近の南方向に僅かに張り出す小尾根上、および谷部に立地する。

扇状地の西側は幾筋かの小さな谷部が南北方向に走り、その間には小規模の微高地が存在している状況が見とれる。扇状地の傾斜が緩やかになる168ｍ付近と段丘崖の間には鎌倉時代の集落遺跡である行原

遺跡が存在している。平成３年の神戸市教育委員会による調査ではこの微高地上から平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物跡・木棺墓が確認されている。

調査区内に設定した土層断面の観察から、調査区内の土地利用は大きく３段階に大別できる。

第１段階：調査区中央を南北方向に走る小尾根上を削平し、狭小な平坦部つくる段階。

第２段階：調査区西南部の谷部分を1.5～２ｍの高さで盛土し（第１次整地層）、平坦面を南側へ拡大する段階。

第３段階：第２段階で造成した平坦面北側をさらに盛土（第２次整地層）し、50㎝程度の段差で平坦面を作り、狭小な水田に細分される段階。

以上の３段階である。

池および「コ」の字状の溝（ＳＤ01）などの遺構は、小尾根上の基盤の安定した部分に築かれており、層序的把握はできなかったが、調査者の見解では第１段階の造成後、築かれたと判断している。

池および「コ」の字状溝の存在する尾根の東側は、幅10ｍ前後の小さな谷が南向きに開口している。

谷部内の土層観察では、第６層砂礫層上面で護岸工事の痕跡と考えられる杭列を確認している。また、池の排水溝も第６層上面まで続いているところから、第１段階の時期には、ある程度谷部内の埋没が進み、護岸施設が施されていたと推察される。

第２段階は、平坦面が拡大する時期に相当し、確認した遺構は、調査区西側の柱穴群およびＳＤ01内の一部の柱穴が該当すると判断している。

第３段階は現在の水田地割りとほぼ整合することから、当地区が水田地ないしは畑地化した時期と推察される。谷部はある程度埋没化が進んだ後、盛土造成され水田化したと考えられる。

第３節　遺構の概要

調査の結果、池、池に連結する「コ」の字状の溝、土坑、柱穴等の遺構が確認された。

以下、個々の遺構について概要を述べる。

柱　穴　群

柱穴は21基確認した。その分布は調査区西側の高位部分と溝内およびその周辺に集中する。柱穴はいずれも掘り方の直径が15～30㎝と小型のもので、深さは15～20㎝と浅い。確認できた柱径は10㎝前後と小さい。建物として識別できる柱穴群はなかった。

溝（ＳＤ01）

調査区中央北寄りに位置する「コ」の字状の溝である。溝の西辺は長さ5.0ｍ、幅1.6ｍで、溝底は平坦である。確認面からの深さは25㎝である。溝の南端は削平を受け消滅している。溝西辺の北西隅の溝底と南端の溝底では10㎝の比高差で南に下がる。北辺は長さ13.0ｍ、幅120～180㎝で、溝底は平坦である。北辺の北西隅と北東隅では14㎝の比高差で北西方向に下がる。溝の東辺は長さ9.6ｍ、幅80～126㎝で北側が狭くなっている。溝底は鍋底気味である。溝の南端は池とつながっており、溝東辺の北端と南端では80㎝の比高差で南に下がっている。

北辺の溝内は、下層に炭層が15㎝程度の厚さで焼土混じりの炭層が堆積した後、５×５㎝～20×10㎝

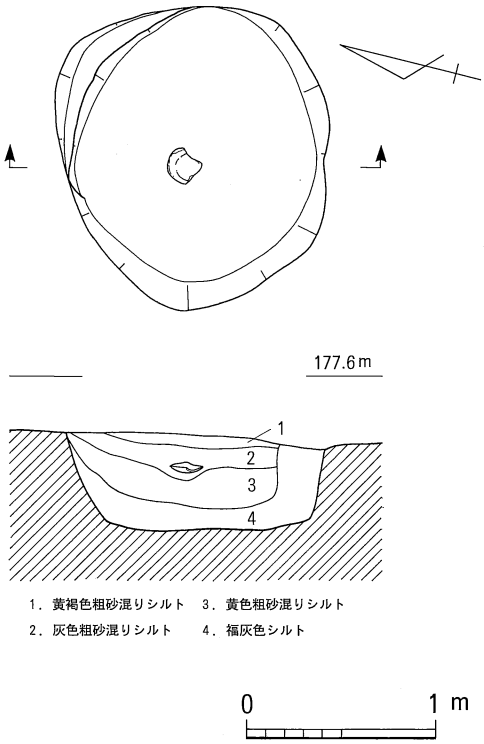
大の河原石、炭化材が投棄された状態で出土した。河原石の中には、火を受け赤化した石が混じる。溝の上層は、地山土で埋め、人為的に整地している。

遺物は溝内下層より出土している。

土坑（ＳＫ01）

「コ」の字状に巡る溝の内側北西隅に位置する。長軸を東西方向にもち、長さは1.58ｍ，短軸方向が1.43ｍで楕円形を呈する。確認面からの深さは53㎝で、土坑底は平坦である。土坑内の埋土は、地山土に類似しており、土層の堆積状況から、人為的に埋められている状況が考えられる。

遺物は、第２層中より土師器小皿の破片が出土している。



第５図　土坑（ＳＫ01）

池状遺構（ＳＷ01）

調査区の中央に位置し、北側には「コ」の字状の溝が近接する。この溝の南東端は池に注ぎ込む形で続いている。池の東側は、池内の水を谷に流した排水溝が掘られている。

池は小尾根上の地山面を72㎝程度の深さで、南北方向に長い不整楕円形に掘削してつくられ、その規模は長軸方向６ｍ、短軸方向5.5ｍである。池内の土層堆積は、大きく２層に分かれ、下層（第７～９層）は細砂混じりのシルトが堆積し、下層と上層との境、第７・９層上面には東西方向に直径15㎝前後、長さ１～ 2.6ｍ前後の加工された丸材、７㎝幅の臍穴のある角材などの建築部材が東西方向に並べた状態で出土した。これら部材のなかには部分的に炭化したものが認められた。また池の東壁付近には直径１㎝前後の木枝が集中して出土している。この第７・９層上面までの深さは35㎝である。

池の西壁付近の上層中には10×15㎝～20×30㎝大の河原石が投棄された状況で確認された。河原石の周辺には炭・焼土辺が確認されている。

池内の土層観察では、今回図示できなかったが池内埋土最上層に、地山土に類似した土を確認しており池の廃絶は、溝同様人為的に埋められた可能性がある。

池東側の排水溝は幅75㎝・深さ30㎝で、池側の溝底は池底より40㎝高い位置にあるが、木材が出土した第７・９層上面とは溝底と同じ高さである。また、谷側の溝底は73㎝の比高差で一段下がっている。

池の西・北壁および溝の南壁際には直径５㎝の丸杭が50㎝の間隔で「Ｌ」字形に並んだ状態で出土した。また排水溝の谷部への落ち込み際には、南と北側に２本一組で計４本の杭が確認された。

これら杭の配列から判断して、池の西・北壁および溝の南壁は護岸施設があったと推定され、谷部の４本の杭は、池内に水を溜める際、板材等で堰止めるための支持杭の役割を果たしたと推察される。

遺物は多くが上層中より出土している。

小　結

以上、主な遺構についてその詳細を述べた。ここでこれら遺構の出土状況をまとめてみる。

確認した遺構は柱穴群・「コ」の字状溝・池および排水溝・土坑である。第２節で述べた第１段階の遺構は、「コ」の字状溝・池および排水溝・土坑が該当すると理解している。「コ」の字状溝およびその付近で確認した柱穴群は、遺存状況が極めて不良で建物として識別できる柱穴群がなかった。「コ」の字状溝内の柱穴群の存在は、溝の性格を建物を区切る機能と考え、溝内に掘立柱建物の存在を想定させることも可能であるが、今回の調査ではこの点を明らかにできなかった。溝内東辺部および池内より出土した河原石の中には、礎石として利用可能な大型の偏平な石も混じっており、礎石をもつ建物の存在も否定できない。

「コ」の字状溝・池および排水溝は、その確認状況から同時期に存在した遺構と考えられる。すなわち「コ」の字状溝の東辺は池と連結しており、池の取水溝としての機能を果していると考えられる。池は杭列の配置から西壁・南壁にかけて「Ｌ」字状に護岸施設をもち、護岸施設はさらに排水溝の南壁まで及んでいたと推察される。排水溝は谷に注ぐ形で機能しており、池の水を溜める堰はこの谷部付近に構築されている。谷部の西壁部分には杭列の痕跡が幾つか確認されており、谷部にも護岸施設があったことが知れる。溝内より出土した焼土・炭層・炭化材・焼石の存在、池内より出土した部分的に炭化した建築部材の存在は、火災に遭遇した痕跡と考えられ、この遺構群の廃絶は火災に起因した可能性が高い。その後、これらの遺構群は埋められ、整地された状況が見とれる。この火災による整地の時期は、第２段階の整地に相当すると理解している。

第４節　遺物の概要

遺物は、コンテナ箱に換算して11箱の土器が出土した。出土した土器の大半が土師質堝・皿類で、これらの土器以外では須恵器、瓦質土器、丹波焼・備前焼・瀬戸美濃焼の国産陶器、輸入磁器などの製品をはじめ、少量ではあるが平・丸瓦および軒平瓦が出土している。

器種は、前記したように土師質土器の皿・鍋が多く、須恵器の椀・捏鉢・甕が続く。これら以外に瓦質土器の蓋、丹波焼の壺・甕・擂鉢、備前焼の擂鉢・瓶が出土している。その他、量的には極めて少ないが青磁椀などの中国製磁器、瀬戸・美濃焼の天目椀などが出土している。

個々の土器の詳細については土器観察表に譲り、ここでは各種別毎にその概要を述べる。

土師質土器

土師質土器は、本遺跡から出土した土器のなかでも量的にもっとも多く出土しており、全体の95％以上を占める。器種は皿と鍋に限られ、破片を含めた出土量はほぼ同様の比率を示す。

皿は、底部丸底の一群（１・７・61・63）と底部が回転糸切りの８～10・17・62・64の一群に大別できる。前者の一群は外面体部の調整に指押さえ調整を施し、調整技法は似ているが器形にみると時期差のある一群である。とくに61の「へそ皿」と63の大皿は胎土が精良で白色を呈するなど、特徴的な皿で、１・７に比べ時期的に下る皿である。後者の一群は、胎土が精良で白色を呈し、器形的にも近似する一群である。

堝は外面体部にタタキ調整を施すなど共通の調整が施されているが、器形的には２つに大別できる。前者は「く」の字形に屈曲する口縁部をもつのに対し、後者は体部と口縁部の境に鍔様の突起をもつ特

徴がある。前者は口縁端部が外方に突出する4・20・22・23と端部が肥大する2・5・28・29・45・46とに細分できる。後者は突起が比較的大きな11・12・13・27・30・31・66・67と突起の小さな47～50の一群に分けることが可能である。前者の堝には内面に凹み様の強い撫でを施す11・27と卸目様の刷毛目を施す66の特徴的な鍋が含まれる。

須恵器

須恵器は土師質土器に続く出土量をもち、椀・捏鉢・甕が出土している。

椀は器高が低く杯に近い器形を呈し、とくに24はその傾向が強い。

鉢は端部に特徴がある。端部が上方に突出気味に肥大する25・26・60・70と上下方向に肥大する19・71～73に大別できる。前者の70と後者の73は口縁部の肥大が小さく、時期的に古い様相を示す。

国産陶器

本遺跡で出土した国産陶器のうちに丹波焼の製品が、大半を占める。破片を含めた器種の内訳は、甕が24点、壺が21点、擂鉢を含めた鉢が3点を数える。これ以外に備前焼擂鉢・瓶各1点、瀬戸・美濃焼天目碗1点がそれぞれ出土している。

丹波焼は壺・甕の大型製品の出土が多く、14・15のように焼成段階で溶着した製品の存在は、当遺跡と、生産地との間に強い結びつきがあったことを示す資料として注目される。

これらの製品の時期は13世紀から14世紀にかけての時期におさまると理解している。

備前焼の製品は丹波焼に比べ量的に少なく、器種も擂鉢・瓶と小型の製品に限られる。

瀬戸美濃焼は天目茶碗が1点のみ出土している。

中国製磁器

龍泉窯系の青磁碗・杯が出土している。内訳は破片を含め碗が5点、杯2点となる。6の青磁碗の底部外面には墨書が施されているが、内容は不明である。これ以外に胎土の状態から判断して中国製ではないかと思われる38の天目茶碗が出土している。

瓦

瓦は7点出土した。いずれも遺構に伴うものではなく、包含層中より出土している。内訳は平瓦3点丸瓦3点、軒平瓦1点で軒丸瓦の出土はなかった。

以上が出土遺物の概要である。これらも遺物の時期は、土師質堝のうち「く」の字形に屈曲する口縁をもつ堝類、須恵器碗、口縁端部が肥大する捏鉢、丹波焼の甕・壺などは13世紀から14世紀におさまると思われる一群と、48～49の鍔条突起の小さな鍋、54の備前焼も瓶、土師質皿63の示す16世紀を中心とした一群の2時期に大別できると理解している。

さいごに

当遺跡の調査で確認した主な遺構は、「コ」の字状溝と池である。「コ」の字状溝に囲まれた空間には遺構として確認はできなかったが、建物の存在が認めることは可能である。溝の北東端は池に繋がっており、建物の北東側に池を配した姿が想像される。また建物の構造については、量的に少ないものの瓦が出土しており、あるいは瓦葺き建物の存在を認めることも可能である。

しかし、今回の調査ではこれらの可能性について明らかにすることはできなかった。その可能性の是非については、周辺の調査を待たねばならない。

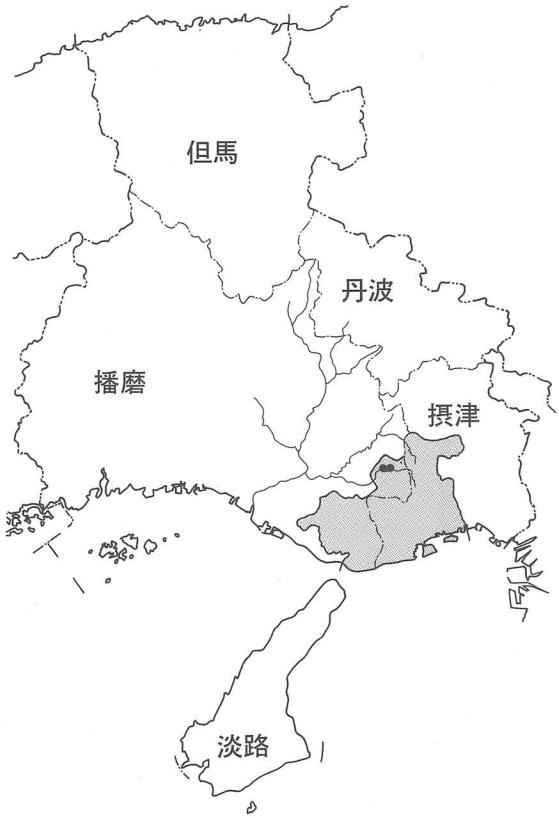
表２　淡河上中遺跡出土土器観察表（１）

番号	出土位置	種　別	器種計測値（cm）			調　　整
1	池・第６層	土師質	小皿	口径(8.0)	・器高1.3	外面: 体部指押さえ→口縁: 横撫で 内面: 磨滅
2	池・第６層	土師質	堝	口径 ――	・器高12.4＋	外面: 体部: 平行タタキ, 口縁: 横撫で 内面: 体部: あて具痕跡→撫で
3	池・第３層	土師質	堝	口径(19.6)	器高8.0 ＋	外面: 体部: 平行タタキ, 口縁: 横撫で 内面: 体部: 横位撫で
4	池・第６層	土師質	堝	口径(24.0)	器高14.1＋	外面: 体部: 平行タタキ, 口縁: 横撫で 内面: 体部: 指押さえ→撫で
5	池・第６層	土師質	堝	口径(21.4)	器高11.4＋	外面: 体部: 平行タタキ, 口縁: 横撫で 内面: 体部: 刷毛目, 口縁: 横撫で
6	排水溝	青磁	碗	底径 6.0	器高1.7 ＋	外面: 高台内: 施釉・墨痕跡 内面: 見込み: 圏線・印花文
7	溝東辺・下層	土師質	小皿	口径(9.0)	・器高1.3	外面: 体部指押さえ 内面: 磨滅
8	溝東辺・下層	土師質	小皿	口径 ――	・器高1.5 ＋	外面: 底部回転糸切り, 体部回転撫で 内面: 体部回転撫で, 底部撫で
9	溝東辺・下層	土師質	小皿	口径 ――	・器高1.6 ＋	外面: 底部回転糸切り, 体部回転撫で 内面: 体部回転撫で, 底部撫で
10	溝東辺・下層	土師質	小皿	口径(8.1)	・器高1.5	外面: 底部回転糸切り, 体部回転撫で 内面: 体部回転撫で, 底部撫で
11	溝東辺整地層	土師質	堝	口径 ――	・器高4.1 ＋	外面: 体部横位撫で, 口縁横撫で 内面: 体部横位撫で(凹状),口縁横撫で
12	溝東辺・下層	土師質	堝	口径 ――	・器高7.7 ＋	外面: 体部平行タタキ→口縁横撫で 内面: 体部横位撫で, 口縁横撫で
13	溝東辺・下層	土師質	堝	口径 ――	・器高7.4 ＋	外面: 体部平行タタキ→口縁横撫で 内面: 体部横位撫で, 口縁横撫で
14	溝東辺・下層	丹波焼	甕	口径 ――	・器高12.1＋	甕口縁部と肩部が溶着
15	溝東辺・下層	備前焼	壺	口径 ――	・器高5.9 ＋	外面: 横位撫で 内面: 撫で
16	溝東辺・下層	丹波焼	甕	口径 ――	・器高12.1＋	甕胴部が溶着
17	溝西辺・下層	土師質	小皿	口径(8.0)	・器高1.7	外面: 底部回転糸切り, 体部回転撫で 内面: 体部回転撫で, 底部撫で
18	溝西辺・下層	須恵器	椀	口径14.8	・器高4.2	外面: 底部回転糸切り, 体部回転撫で 内面: 体部回転撫で, 底部一方向撫で
19	溝西辺・下層	須恵器	鉢	口径 ――	・器高5.8 ＋	外面: 体部回転撫で 内面: 体部撫で
20	溝西辺・下層	土師質	堝	口径 ――	・器高6.1 ＋	外面: 体部平行タタキ→口縁横撫で 内面: 体部横位撫で, 口縁横撫で
21	溝西辺・下層	須恵器	甕	口径(22.9)	・器高4.7 ＋	外面: 体部タタキ→口縁回転撫で 内面: 体部横位撫で, 口縁回転撫で
22	SX01・下層	土師質	堝	口径 ――	・器高7.5 ＋	外面: 体部平行タタキ→口縁横撫で 内面: 体部横位撫で, 口縁横撫で
23	SX01・下層	土師質	堝	口径(23.8)	・器高8.7 ＋	外面: 体部平行タタキ→口縁横撫で 内面: 体部撫で(指頭跡),口縁横撫で
24	SX01・下層	須恵器	杯	口径(14.8)	・器高3.1 ＋	外面: 底部回転糸切り, 体部回転撫で 内面: 体部回転撫で, 底部不定方向撫で
25	SX01・下層	須恵器	鉢	口径 ――	・器高7.1 ＋	外面: 回転撫で 内面: 体部横位撫で
26	SX01・下層	須恵器	鉢	口径(16.7)	・器高6.1 ＋	外面: 底部回転糸切り, 体部回転撫で 内面: 体部回転撫で
27	谷部・上層	土師質	堝	口径 ――	・器高5.7 ＋	外面: 体部平行タタキ→口縁横撫で 内面: 体部横位撫で, 口縁横撫で
28	谷部・上層	土師質	堝	口径 ――	・器高4.5 ＋	外面: 体部平行タタキ→口縁横撫で 内面: 体部刷毛目, 口縁横撫で
29	谷部・上層	土師質	堝	口径(22.5)	・器高4.9 ＋	外面: 体部平行タタキ→口縁横撫で 内面: 体部撫で, 口縁横撫で
30	谷部・上層	土師質	堝	口径(22.5)	・器高4.9 ＋	外面: 体部平行タタキ→口縁横撫で 内面: 体部撫で, 口縁横撫で
31	谷部・上層	土師質	堝	口径(19.5)	・器高4.5 ＋	外面: 磨滅 内面: 体部刷毛目, 口縁横撫で
32	谷部・上層	瓦	丸瓦	長さ13.3＋	・幅 6.7 ＋	外面: へら磨き(縦方向) 内面: 布目
33	谷部・上層	須恵器	甕	口径(15.7)	・器高8.9 ＋	外面: 体部斜位タタキ→口縁回転撫で 内面: 体部斜位撫で, 口縁回転撫で
34	谷部・上層	丹波焼	擂鉢	口径 ――	・器高5.6 ＋	外面: 口縁横撫で, 内面: 口縁～体部横位撫で→一回一条描き卸目
35	谷部・上層	備前焼	擂鉢	口径 ――	・器高3.9 ＋	外面: 横位撫で, 底部未調整 内面: 横位撫で→６本一単位卸目
36	谷部・上層	丹波焼	壺	口径 ――	・器高6.9 ＋	外面: 口縁回転撫で 内面: 口縁回転撫で
37	谷部・上層	丹波焼	甕	口径 ――	・器高7.4 ＋	外面: 口縁回転撫で　自然釉付着 内面: 口縁回転撫で
38	谷部・上層	瀬戸・美濃焼	天目椀	口径 ――	・器高4.3 ＋	外面: 体部下半無釉
39	谷部・上層	須恵器	鉢	口径 ――	・器高4.6 ＋	外面: 回転撫で 内面: 回転撫で
40	谷部・上層	青磁	杯	口径 ――	・器高3.9 ＋	内外面: 灰オリーブ色釉
41	谷部・上層	丹波焼	瓶	底径(12.4)	・器高5.9 ＋	外面: 体部不定撫で→横位撫で 内面: 指押さえ→横位撫で
42	谷部・上層	備前焼	甕？	底径 ――	・器高7.8 ＋	外面: 体部不定撫で 内面: 指押さえ→横位撫で
43	谷部・上層	丹波焼	甕？	底径 ――	・器高11.5＋	外面: 体部横位撫で 内面: 横位撫で
44	谷部・上層	丹波焼	壺	底径(13.2)	・器高7.9 ＋	外面: 体部指押さえ→横位撫で 内面: 体部不定撫で

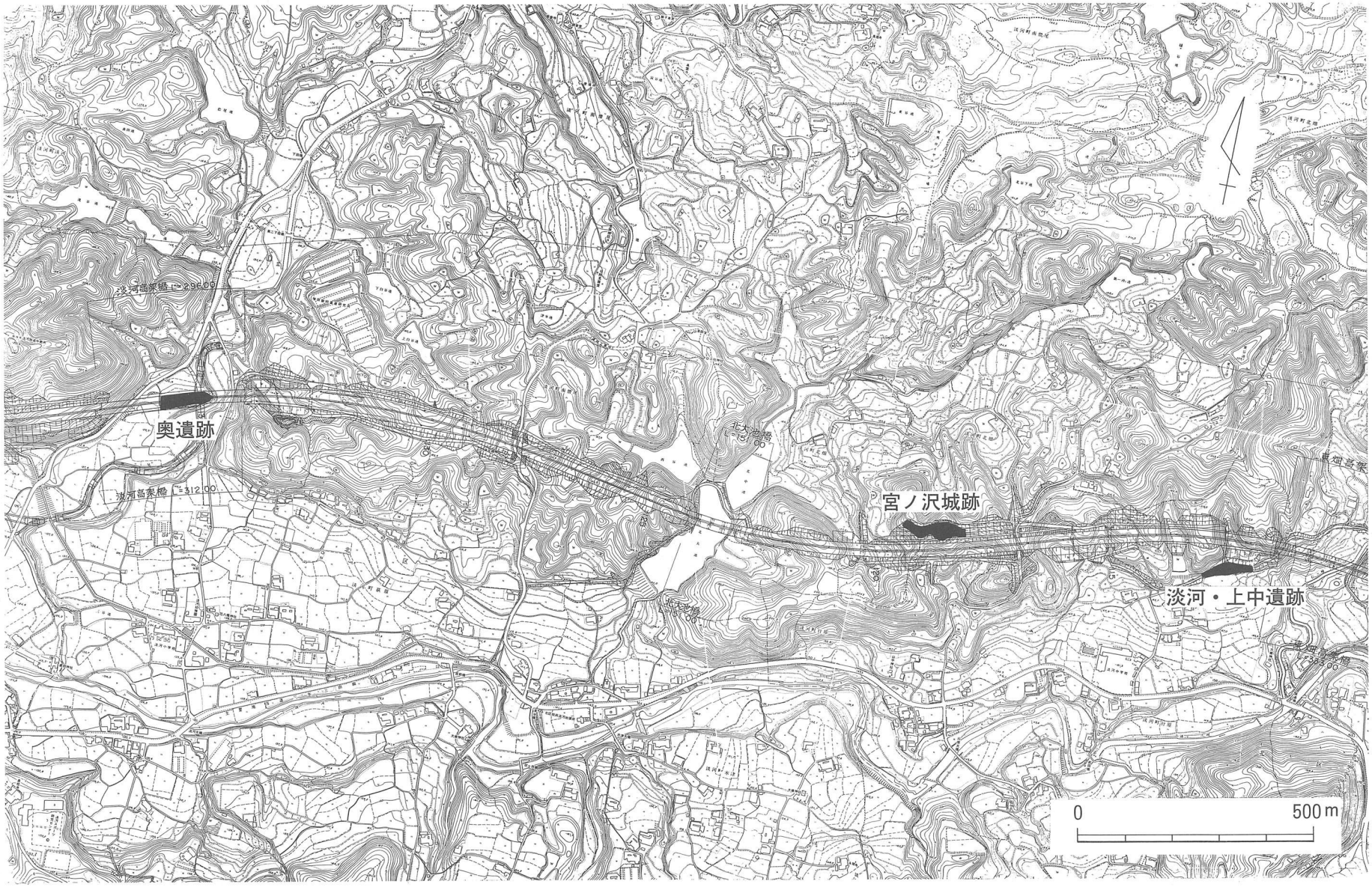
表３　淡河上中遺跡出土土器観察表（２）

番号	出土位置	種　別	器　種	計 測 値（cm）	調　　整
45	谷部・最下層	土師質	堝	口径(19.1)・器高7.1 ＋	外面: 口縁横撫で，体部平行タタキ
46	谷部・最下層	土師質	堝	口径――・器高4.0 ＋	外面: 口縁横撫で，体部平行タタキ 内面: 口縁横撫で，体部横位撫で
47	谷部・最下層 上・下層理面	土師質	堝	口径――・器高4.0 ＋	内外面: 調整不明
48	谷部・下層	土師質	堝	口径――・器高4.0 ＋	外面: 口縁上位横撫で、体部タタキ→削り 内面: 口縁横撫で，体部横位撫で
49	谷部・下層 上・下層理面	土師質	堝	口径――・器高11.9＋	外面: 口縁横撫で、体部斜位タタキ 内面: 口縁横撫で，体部横位撫で
50	谷部・下層 上・下層理面	土師質	堝	口径(32.8)・器高6.8 ＋	外面: 口縁横撫で、体部斜位タタキ 内面: 口縁横撫で，体部横位撫で
51	谷部・下層 上・下層理面	瓦　質	蓋	口径(24.5)・器高7.8	外面: 口縁横ヘラ磨き→天井部不定撫で 内面: 口縁端部撫で，体部ヘラケズリ
52	谷部・下層 上・下層理面	丹波焼	小壺	底径(8.6) ・器高8.1 ＋	外面: 回転撫で，釉付着 内面: 横位撫で
53	谷部・下層 上・下層理面	丹波焼	壺？	底径(19.5)・器高4.4 ＋	外面: 不定撫で，釉付着 内面: 不定撫で，釉付着
54	谷部・下層 上・下層理面	備前焼	瓶	底径 9.5 ・器高22.6＋	外面: 体部回転撫で→下位ヘラケズリ 頸部ヘラ描き文，内面: 回転撫で
55	谷部・下層 上・下層理面	青磁	碗	底径(5.4) ・器高2.3 ＋	外面: 底部内面露胎 内面: 見込み印花文
56	谷部・下層	土師質	堝	口径――・器高8.1 ＋	外面: 口縁横撫で，体部斜位タタキ 内面: 口縁横撫で，体部横位撫で
57	谷部・下層	土師質	堝	口径(21.3)・器高8.5 ＋	外面: 口縁横撫で，体部平行タタキ 内面: 口縁横撫で，体部同心円文→横位撫
58	谷部・下層	須恵器	皿	口径(14.5)・器高3.6	外面: 回転撫で，底部ヘラ切り？ 内面: 回転撫で
59	谷部・下層	須恵器	碗	口径(15.9)・器高3.0 ＋	外面: 回転撫で 内面: 回転撫で
60	谷部・下層	須恵器	鉢	口径(31.4)・器高9.1 ＋	内外面：口縁回転撫で，体部不定撫で
61	包含層	土師質	皿	口径(7.3) ・器高1.8	外面: 口縁横撫で，体部指押さえ 内面: 調整不明
62	包含層	土師質 (白色系)	皿	口径(8.4) ・器高1.25	外面: 回転撫で，底部回転糸切り 内面: 回転撫で
63	包含層	土師質 (白色系)	皿	口径(12.8)・器高1.25＋	外面: 口縁横撫で，体部指押さえ 内面: 調整不明
64	包含層	土師質 (白色系)	皿	口径(8.3) ・器高2.2	外面: 回転撫で，底部回転糸切り 内面: 回転撫で
65	包含層	土師質	堝	口径(20.4)・器高7.2 ＋	外面: 口縁横撫で(2段),体部斜位タタキ 内面: 口縁横撫で，体部横位撫で
66	包含層	土師質	堝	口径――・器高8.8 ＋	外面: 口縁横撫で，体部斜位タタキ 内面: 口縁横撫で，体部刷毛目(横位)
67	包含層	土師質	堝	口径――・器高3.6 ＋	外面: 口縁横撫で 内面: 口縁横撫で，体部撫で
68	包含層	土師質	堝	口径(21.0)・器高7.0 ＋	外面: 口縁横撫で，体部斜位タタキ 内面: 口縁横撫で，体部回転撫で
69	包含層	須恵器	椀	口径(16.3)・器高4.7 ＋	外面: 口縁回転撫で，体部下位不定撫で 底部回転糸切り，内面: 回転撫で
70	包含層	須恵器	鉢	口径(27.8)・器高6.4 ＋	外面: 口縁回転撫で，体部下位斜位撫で 内面: 口縁回転撫で，体部斜位撫で
71	包含層	須恵器	鉢	口径――・器高5.4 ＋	外面: 口縁回転撫で，体部下位斜位撫で 内面: 口縁回転撫で，体部斜位撫で
72	包含層	須恵器	鉢	口径――・器高5.1 ＋	外面: 口縁回転撫で，体部下位斜位撫で 内面: 口縁回転撫で，体部斜位撫で
73	包含層	須恵器	鉢	口径(28.2)・器高9.3 ＋	外面: 口縁回転撫で，体部下位斜位撫で 内面: 口縁回転撫で，体部斜位撫で
74	包含層	丹波焼	甕	口径(28.5)・器高6.0 ＋	外面: 口縁回転撫で，体部横位撫で 内面: 口縁回転撫で，体部不定撫で
75	包含層	須恵器	甕	口径――・器高13.6＋	外面: 羽状タタキ 内面: 斜位撫で
76	包含層	丹波焼	擂鉢	底径――・器高5.0 ＋	外面: 横位撫で 内面: 横位撫で→一回一条描き卸目
77	包含層	丹波焼	擂鉢	口径――・器高6.6 ＋	外面: 口縁回転撫で，体部不定撫で 内面: 回転撫で→一回一条描き卸目
78	包含層	丹波焼	壺	口径――・器高9.5 ＋	外面: 体部上半撫で→３条の沈線，下半回転ヘラ削り，内面: 斜位撫で
79	包含層	丹波焼	鉢	口径――・器高4.2 ＋	外面: 口縁回転撫で，体部不定撫で 内面: 回転撫で
80	包含層	須恵器	甕	口径――・器高4.9 ＋	内外面: 口縁回転撫で
81	包含層	須恵器	甕	口径――・器高5.8 ＋	内外面: 口縁回転撫で
82	包含層	丹波焼	甕	口径――・器高11.2＋	外面: 口縁回転撫で，体部横位撫で 内面: 口縁回転撫で(沈線),体部横位撫で
83	包含層	丹波焼	甕	口径(29.0)・器高8.7 ＋	外面: 口縁回転撫で 内面: 口縁回転撫で(沈線),体部指頭撫で
84	包含層	丹波焼	甕	口径――・器高3.1 ＋	外面: 口縁回転撫で 内面: 口縁回転撫で
85	包含層	？	天目碗	底径(5.7) ・器高2.5 ＋	外面: 底部端回転糸切り
86	包含層	青磁	碗	口径――・器高5.2 ＋	外面: 蓮弁文
87	包含層	丹波焼	壺	底径(16.4)・器高6.9 ＋	外面: 横位撫で，底部砂付着 内面: 指撫で，横位撫で
88	包含層	瓦	平	長さ13.5＋，幅9.1 ＋，厚さ3.0	
89	包含層	瓦	平	長さ13.6＋，幅11.0＋，厚さ2.0	凸面ハナレ砂
90	包含層	瓦	丸	長さ13.3＋，幅9.1 ＋，厚さ2.2	
91	包含層	瓦	丸	長さ11.0＋，幅12.5＋，厚さ1.9	
92	包含層	瓦	軒平	長さ3.8 ＋，幅5.3 ＋，厚さ3.9 ＋	

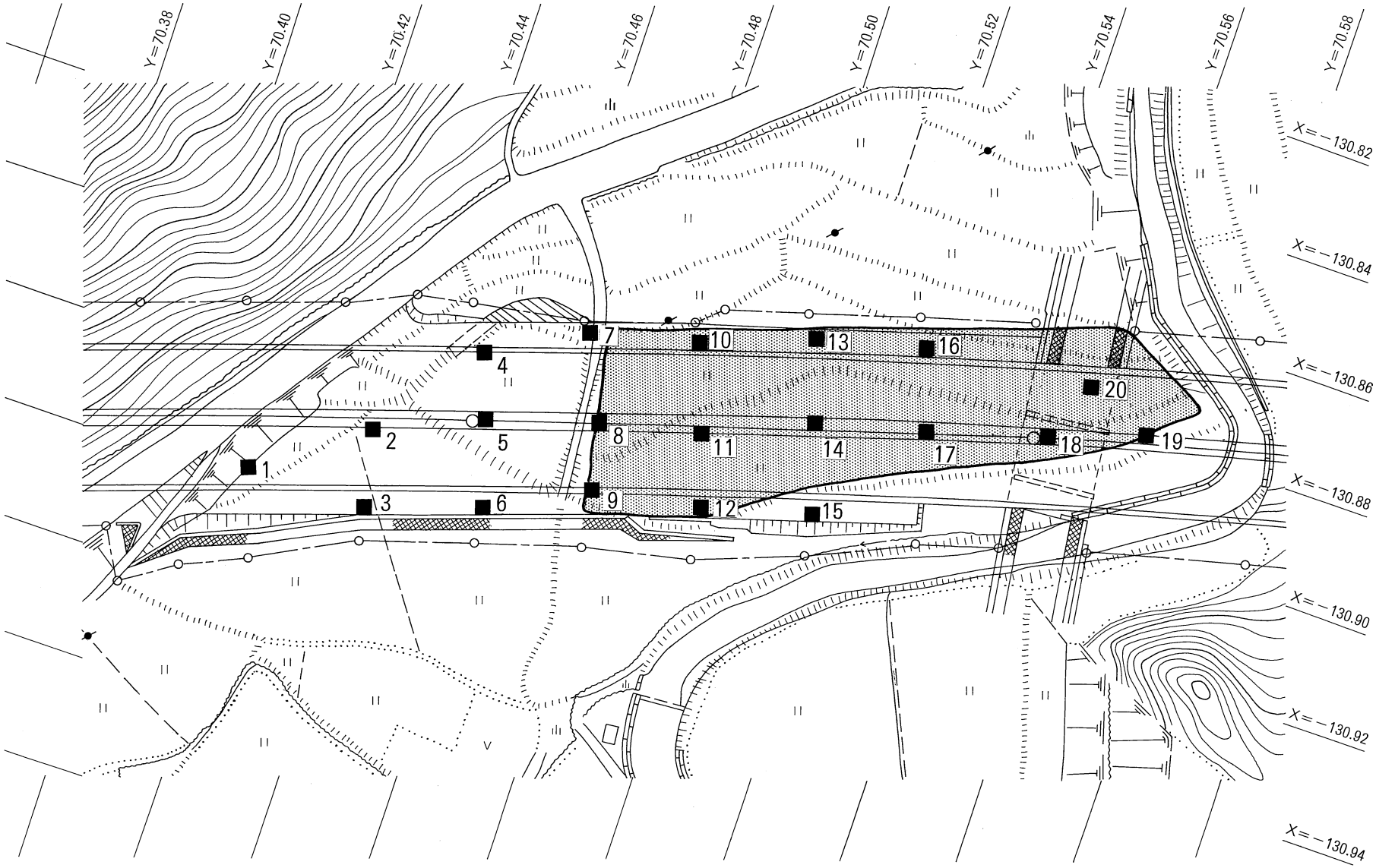
図　　版



遺跡の位置　兵庫県（上）・神戸市（下）

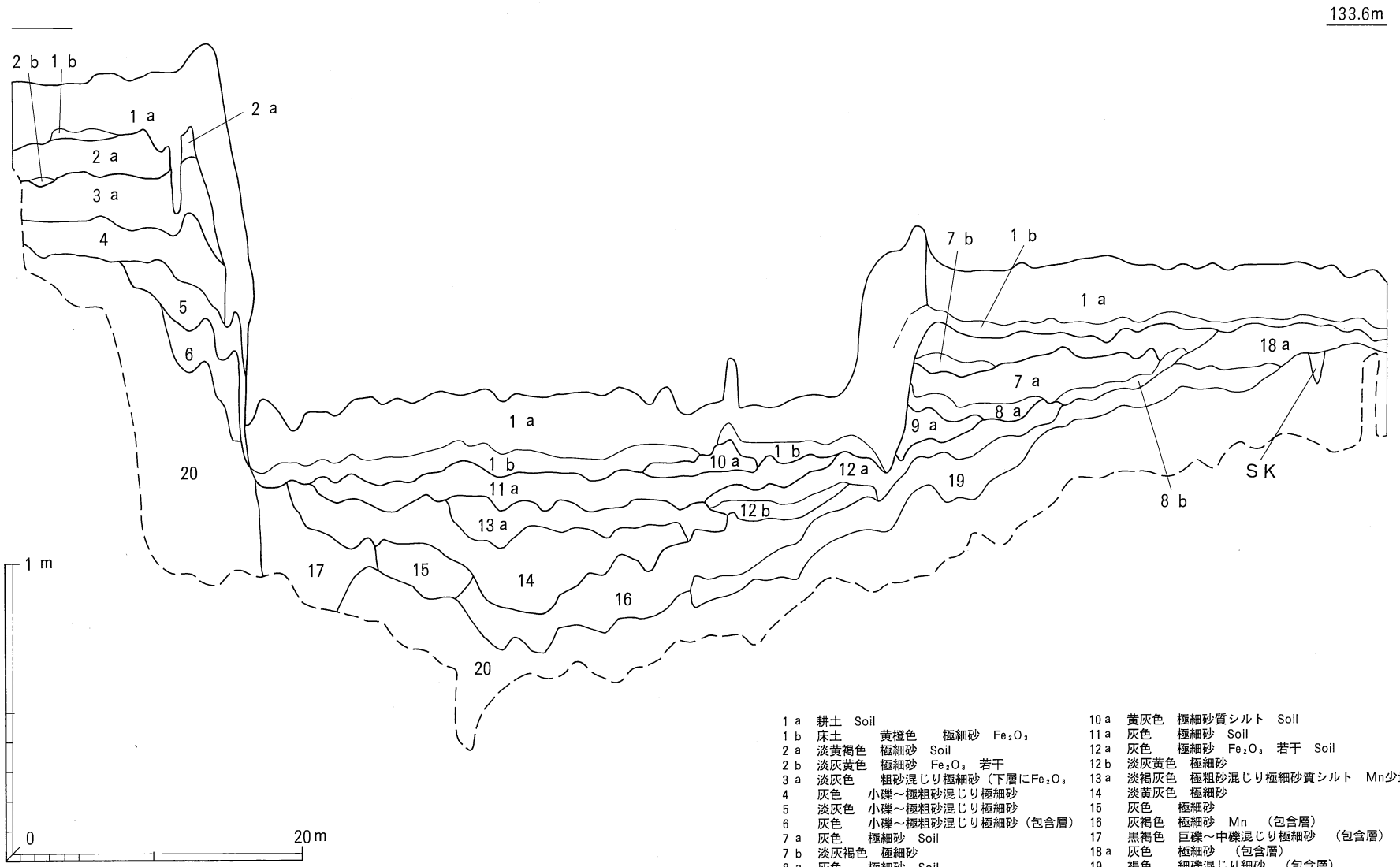


遺跡の位置　1／12000



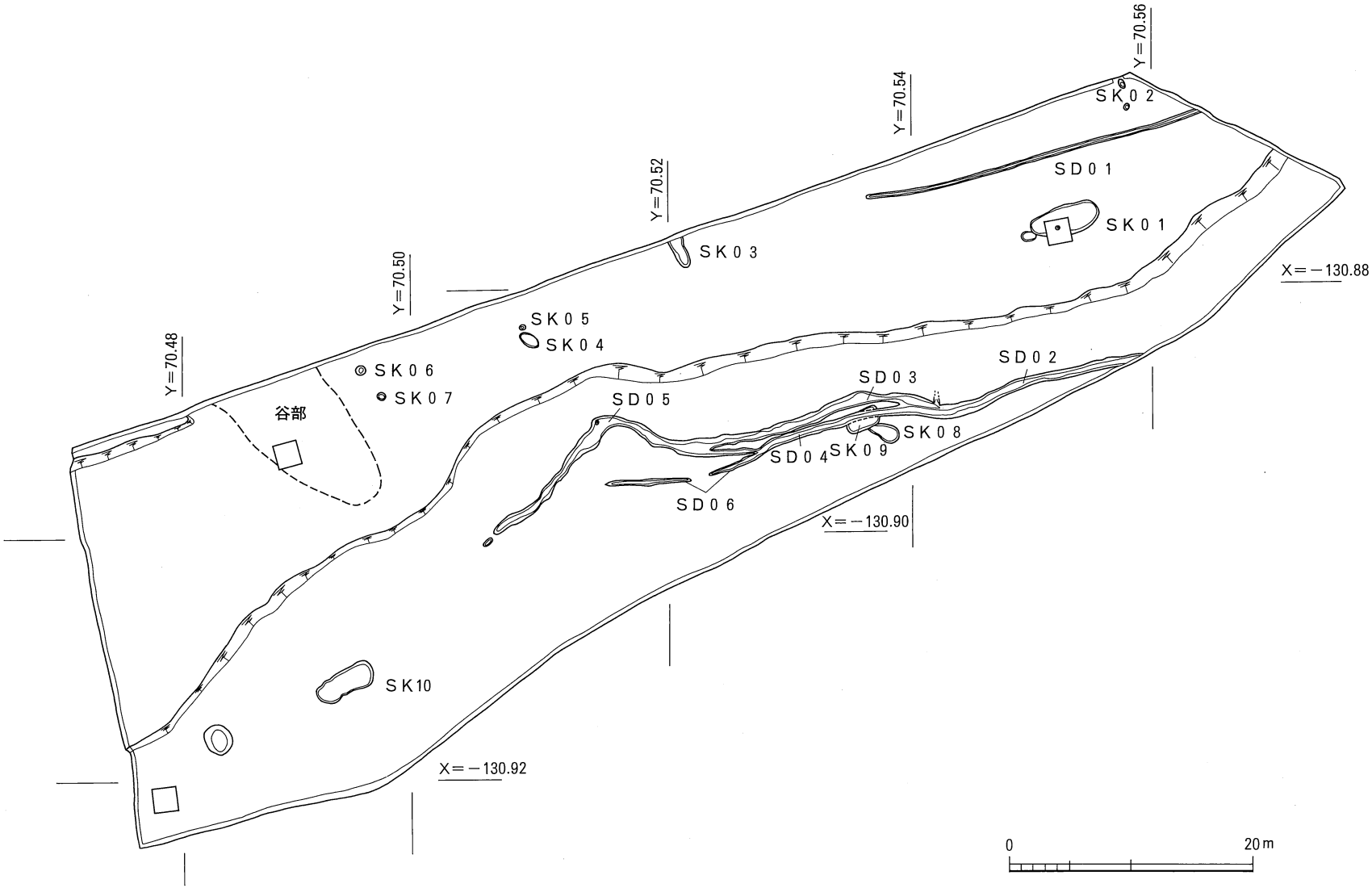
奥遺跡確認調査試堀坑設定図と全面調査範囲

図版3



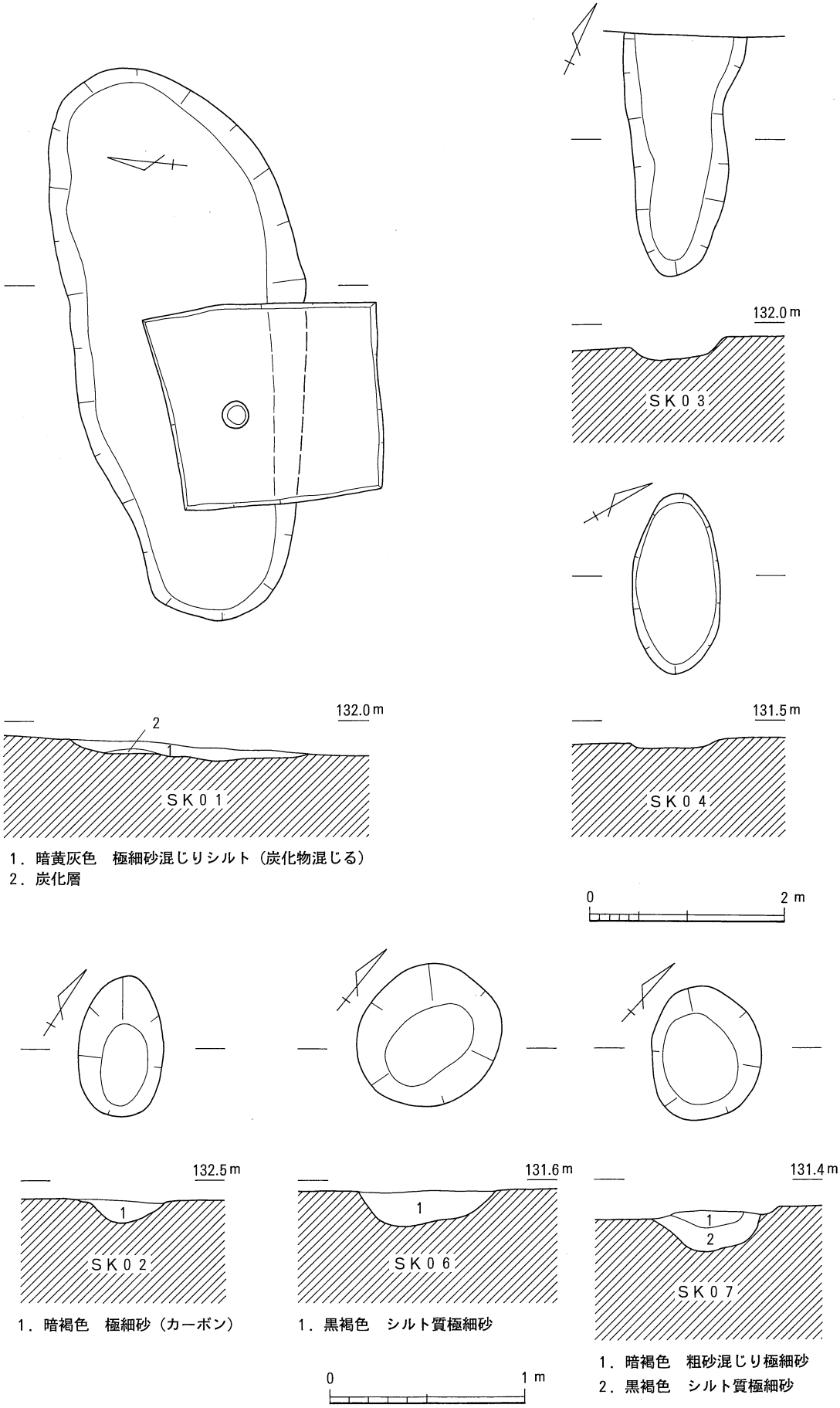
1 a　耕土　Soil
1 b　床土　黄橙色　極細砂　Fe_2O_3
2 a　淡黄褐色　極細砂　Soil
2 b　淡灰黄色　極細砂　Fe_2O_3　若干
3 a　淡灰色　粗砂混じり極細砂（下層にFe_2O_3
4　灰色　小礫～極粗砂混じり極細砂
5　淡灰色　小礫～極粗砂混じり極細砂
6　灰色　小礫～極粗砂混じり極細砂（包含層）
7 a　灰色　極細砂　Soil
7 b　淡灰褐色　極細砂
8 a　灰色　極細砂　Soil
8 b　淡灰褐色　極細砂
9 a　灰色　極細砂　Soil
10 a　黄灰色　極細砂質シルト　Soil
11 a　灰色　極細砂　Soil
12 a　灰色　極細砂　Fe_2O_3　若干　Soil
12 b　淡灰黄色　極細砂
13 a　淡褐灰色　極粗砂混じり極細砂質シルト　Mn少量　Soil
14　淡黄灰色　極細砂
15　灰色　極細砂
16　灰褐色　極細砂　Mn　（包含層）
17　黒褐色　巨礫～中礫混じり極細砂　（包含層）
18 a　灰色　極細砂　（包含層）
19　褐色　細礫混じり細砂　（包含層）
20　淡黄橙色　シルト質極細砂　（地山）

奥遺跡基本層序　縦1／20、横1／400



奥遺跡全体図　1／500

図版5



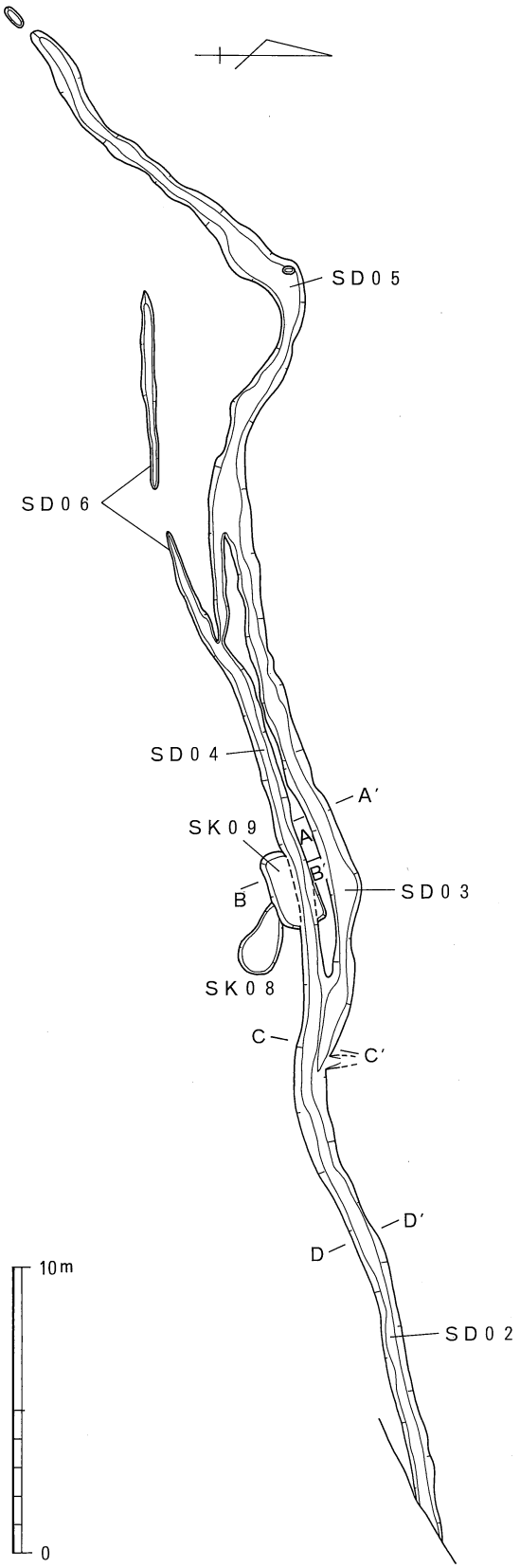
1．暗黄灰色　極細砂混じりシルト（炭化物混じる）
2．炭化層

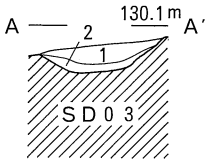
1．暗褐色　極細砂（カーボン）

1．黒褐色　シルト質極細砂

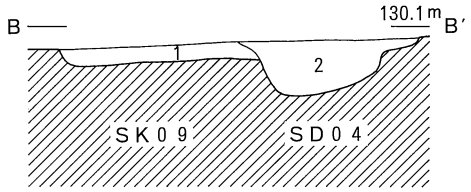
1．暗褐色　粗砂混じり極細砂
2．黒褐色　シルト質極細砂

奥遺跡検出遺構　ＳＫ01～04・06・07

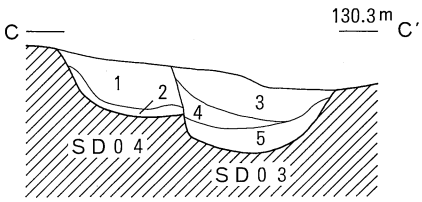




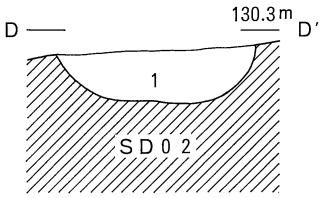
1．暗褐灰色　細砂混じりシルト（Fe_2O_3、Mn）
2．暗黄灰色　中細砂混じりシルト（Fe_2O_3）



1．黒色　極細砂混じりシルト（炭多量に含む）
2．褐灰色　細砂～極細砂（Mn、カーボン含む）

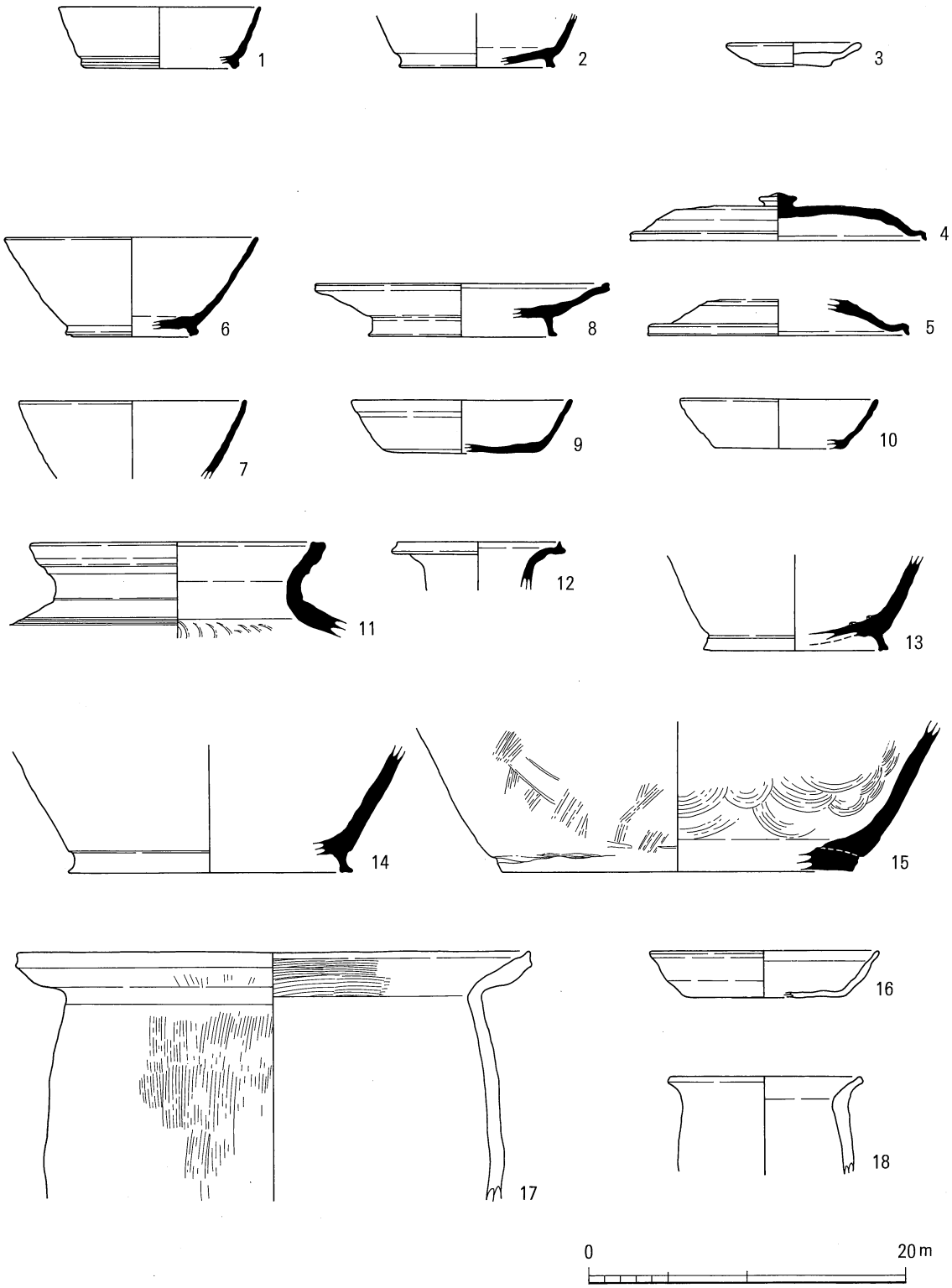


1．暗褐灰色　細砂質シルト（Fe_2O_3、Mn、φ3cm以下礫）
2．褐灰色　シルト混じり細砂～極細砂（Fe_2O_3）
3．黄褐灰色　細砂～極細砂（Fe_2O_3、Mn、汚れ激しい）
4．暗褐灰色　細砂質シルト（Mn）
5．暗灰色　細砂～極細砂混じりシルト

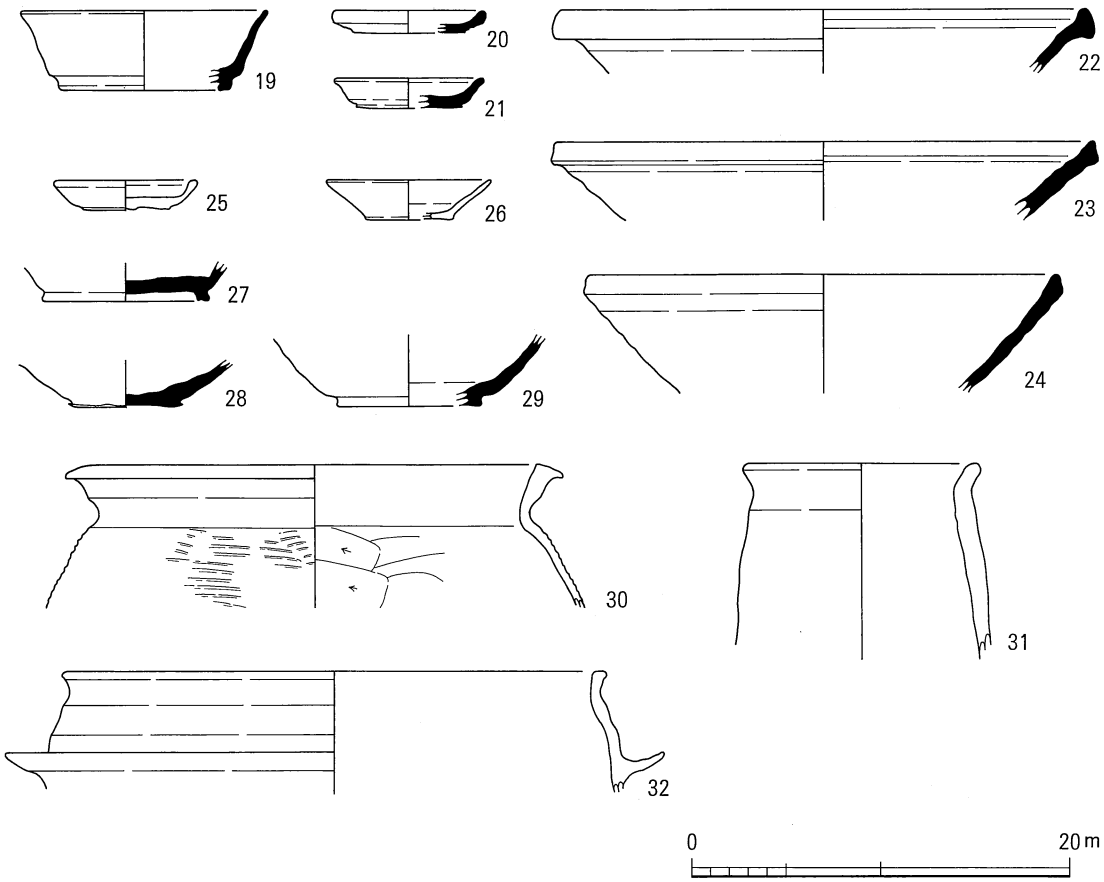


1．暗灰色　シルト混じり細砂（φ3cm以下礫）

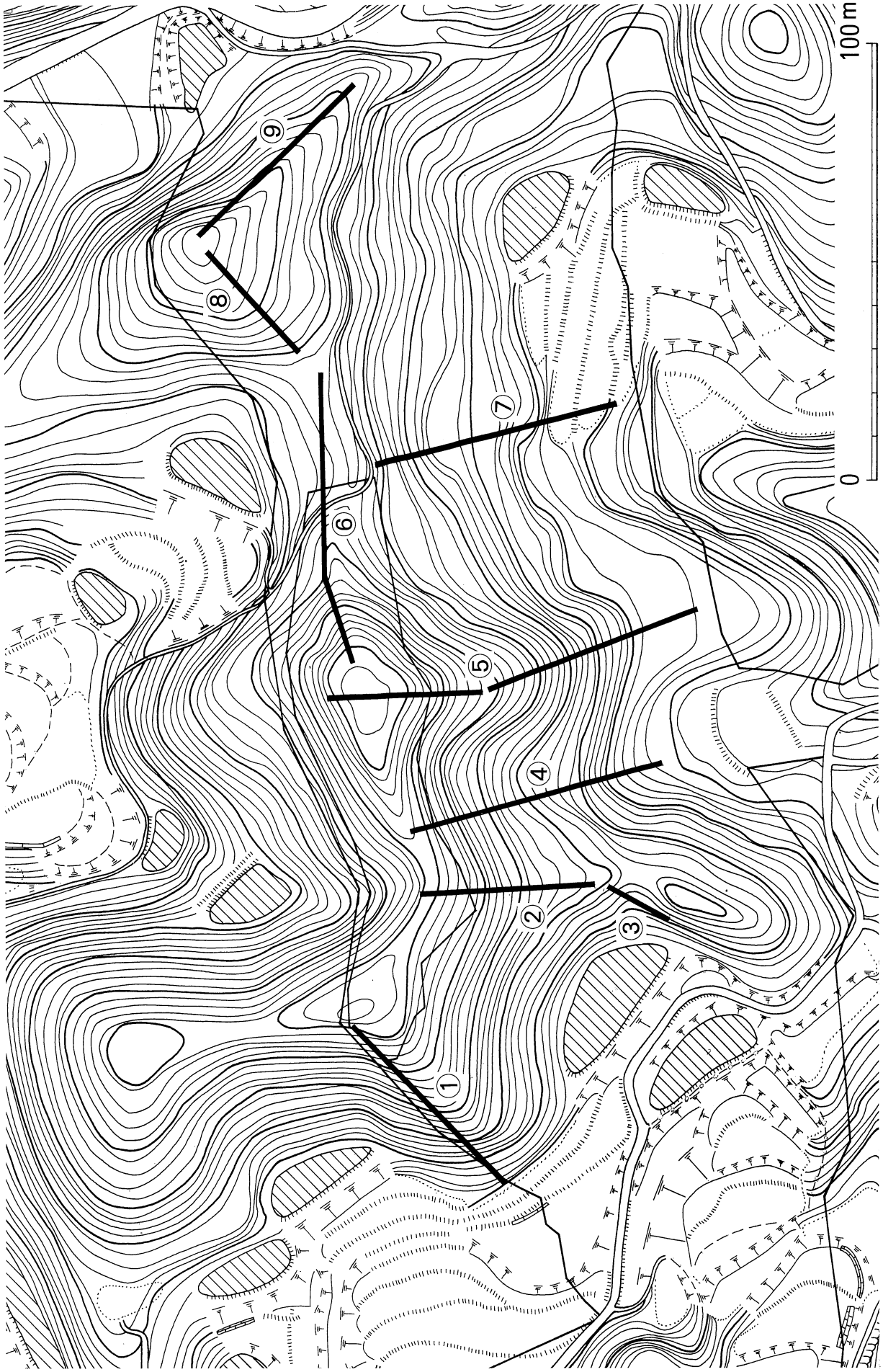
奥遺跡検出遺構　SD02～06



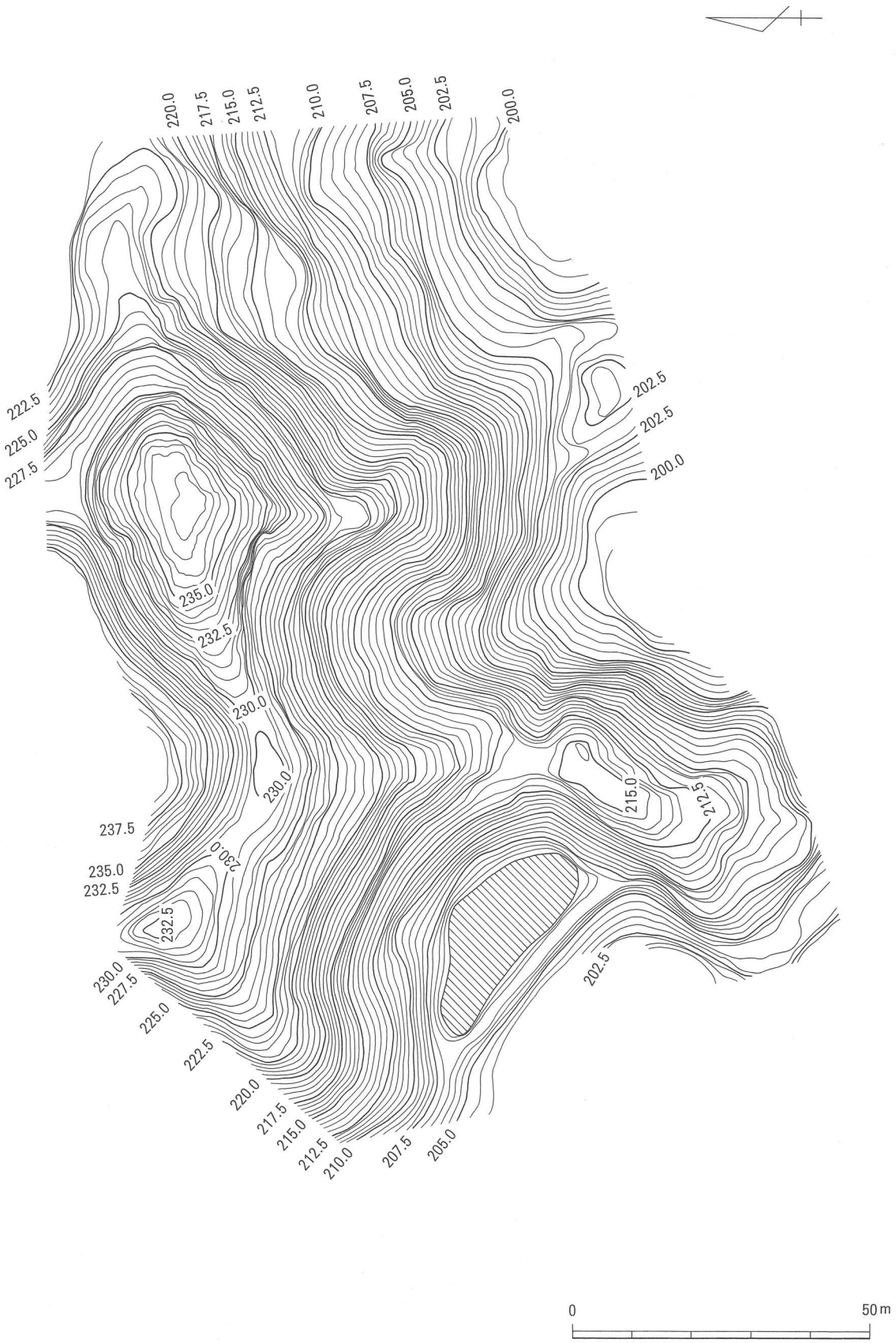
奥遺跡出土遺物（1）



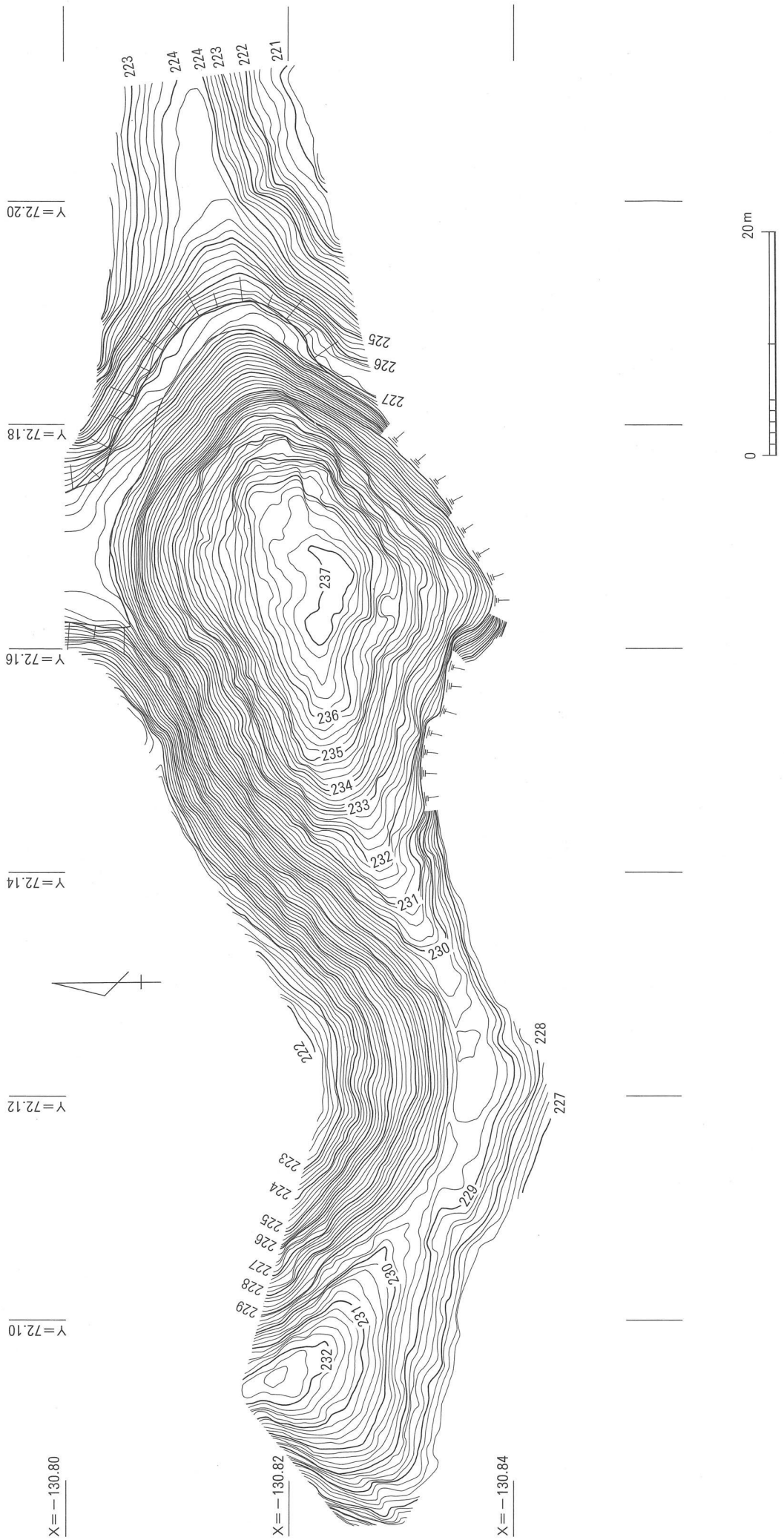
奥遺跡出土遺物（2）



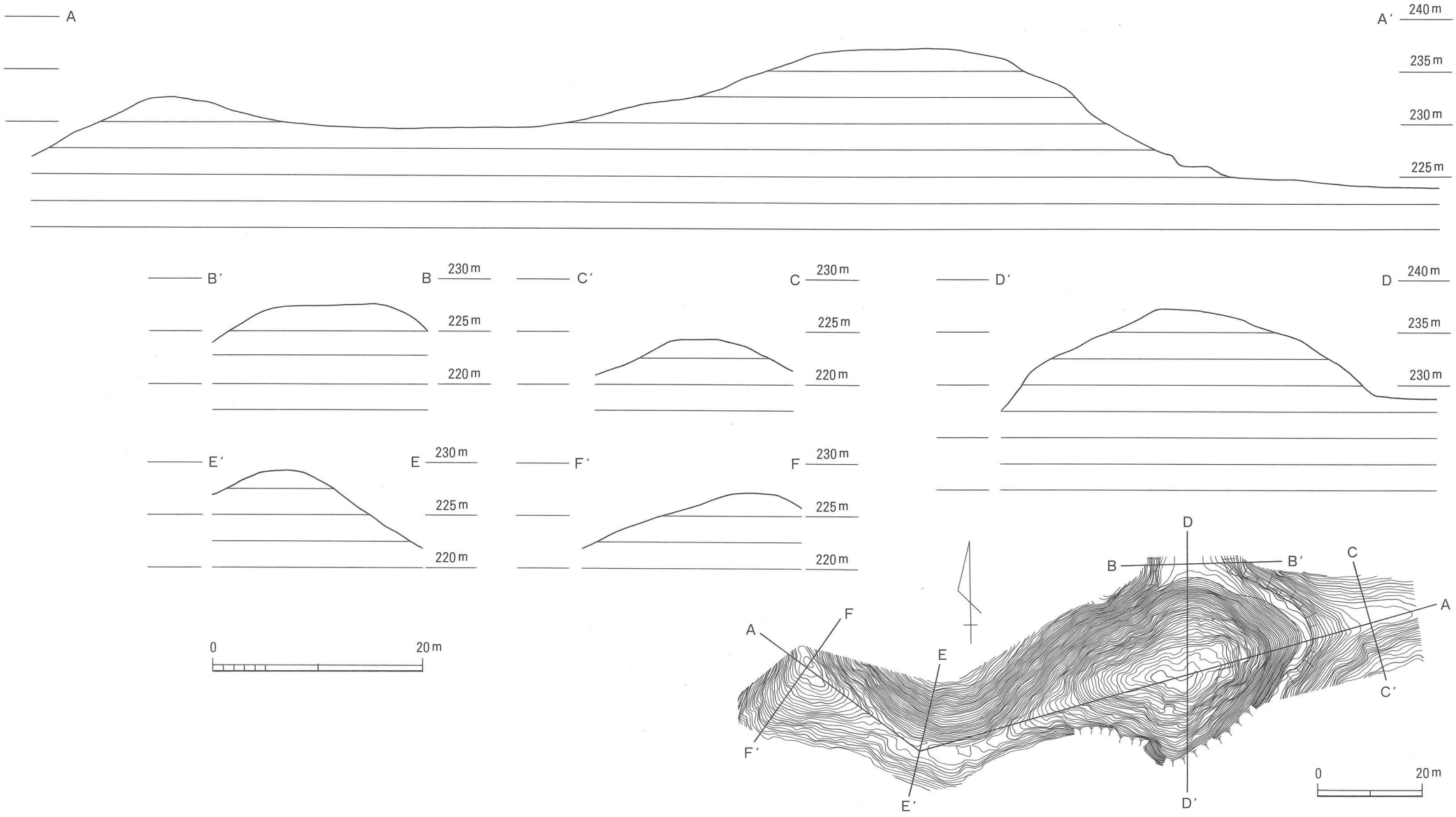
宮ノ沢城跡確認調査トレンチ設定図



宮ノ沢城跡調査前測量図　1／1000

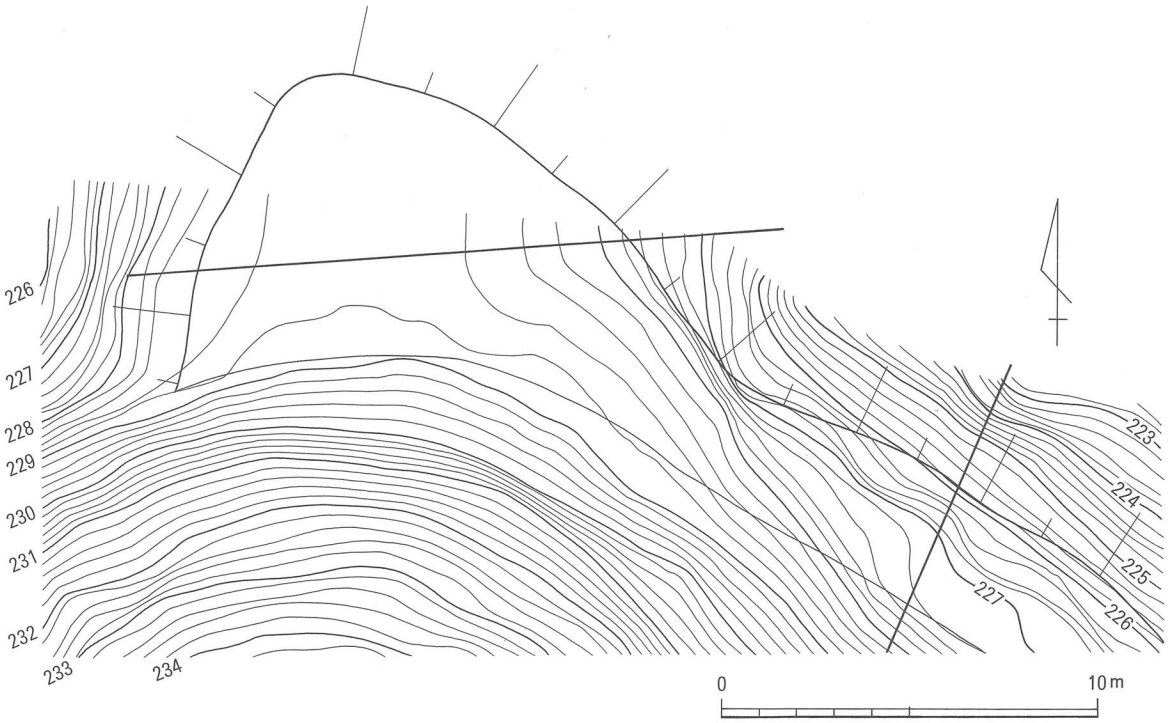


宮ノ沢城跡測量図　1／500

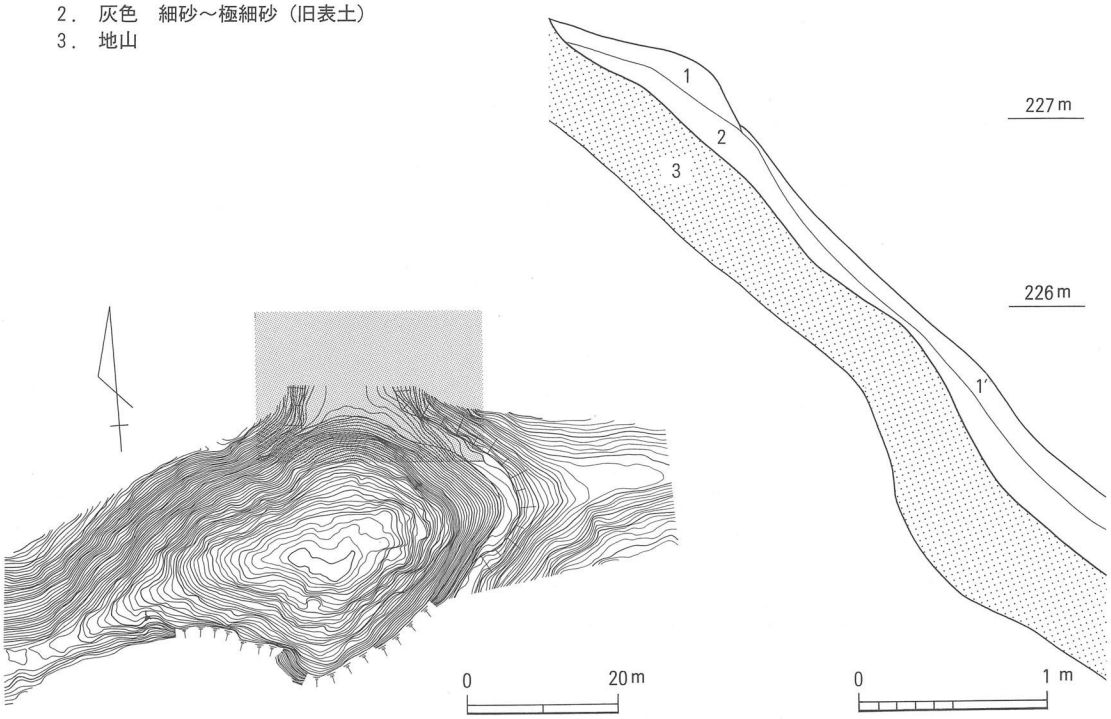


宮ノ沢城跡断面図

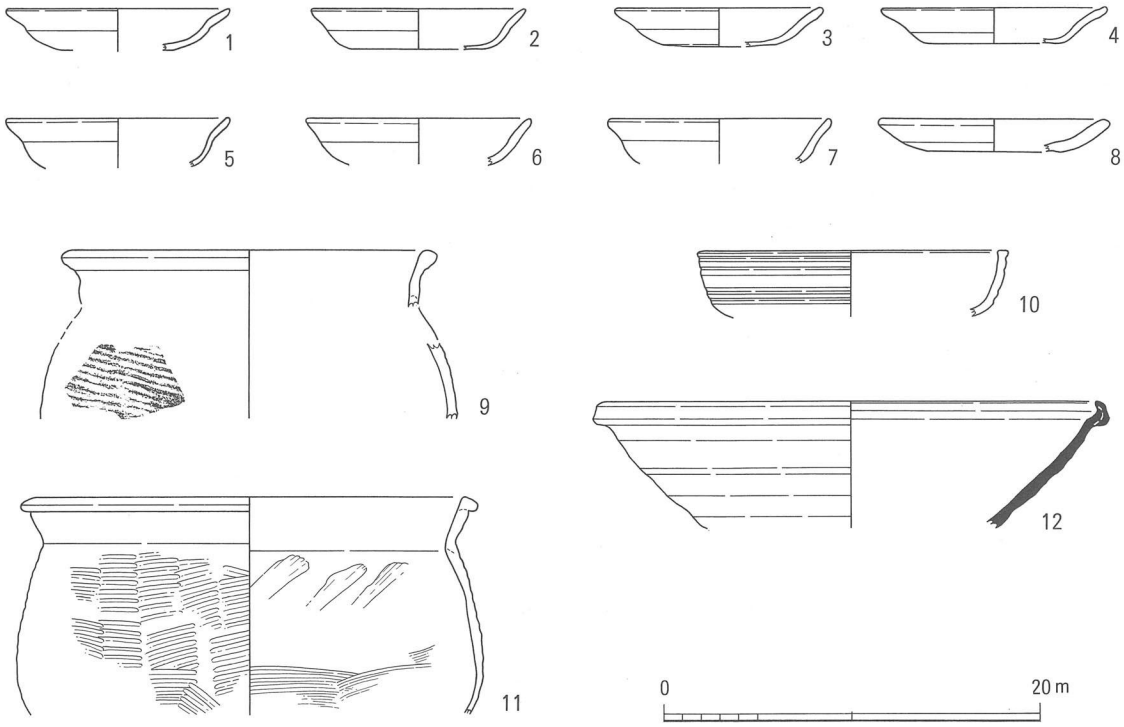
図版13



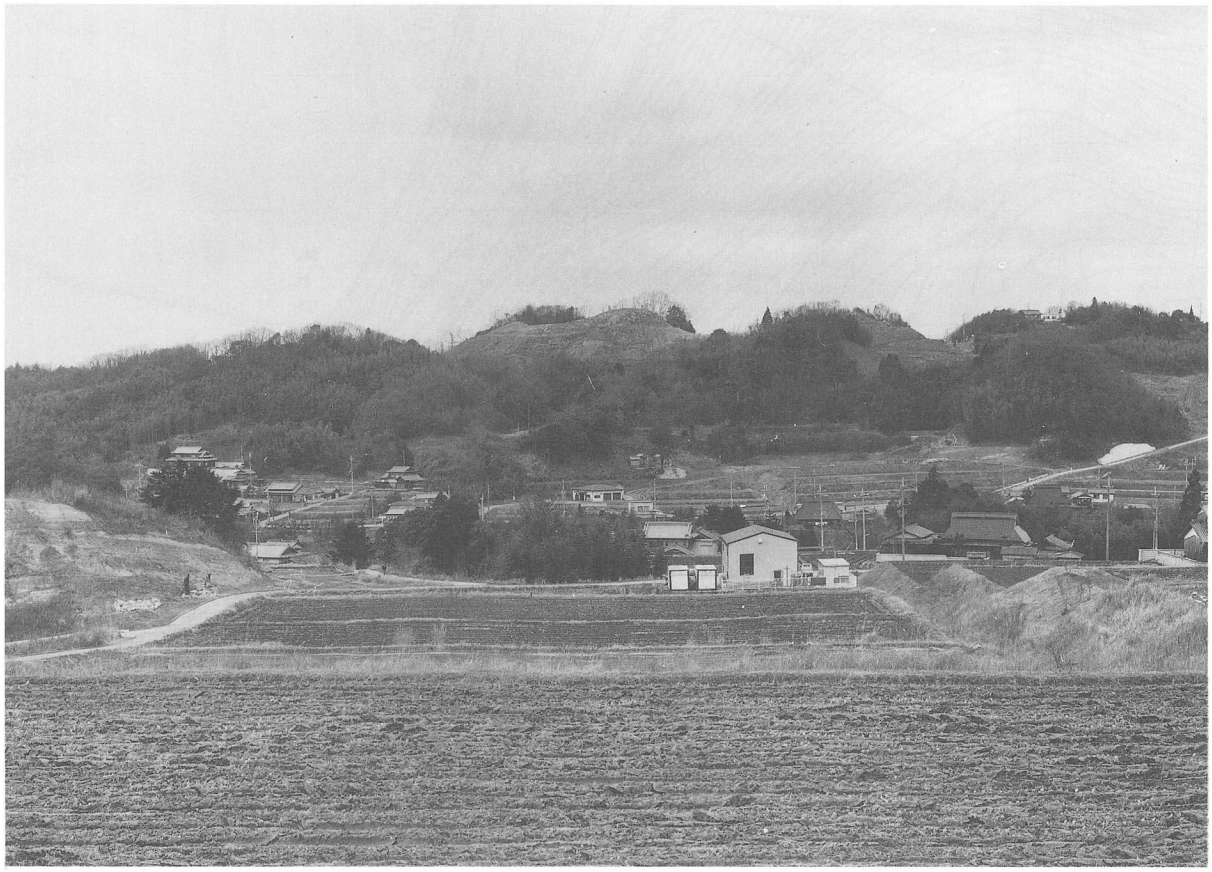
1．　黄灰色　極細砂（盛土）
1′．　黄灰色　極細砂（流土）
2．　灰色　細砂～極細砂（旧表土）
3．　地山



宮ノ沢城跡北側平坦地

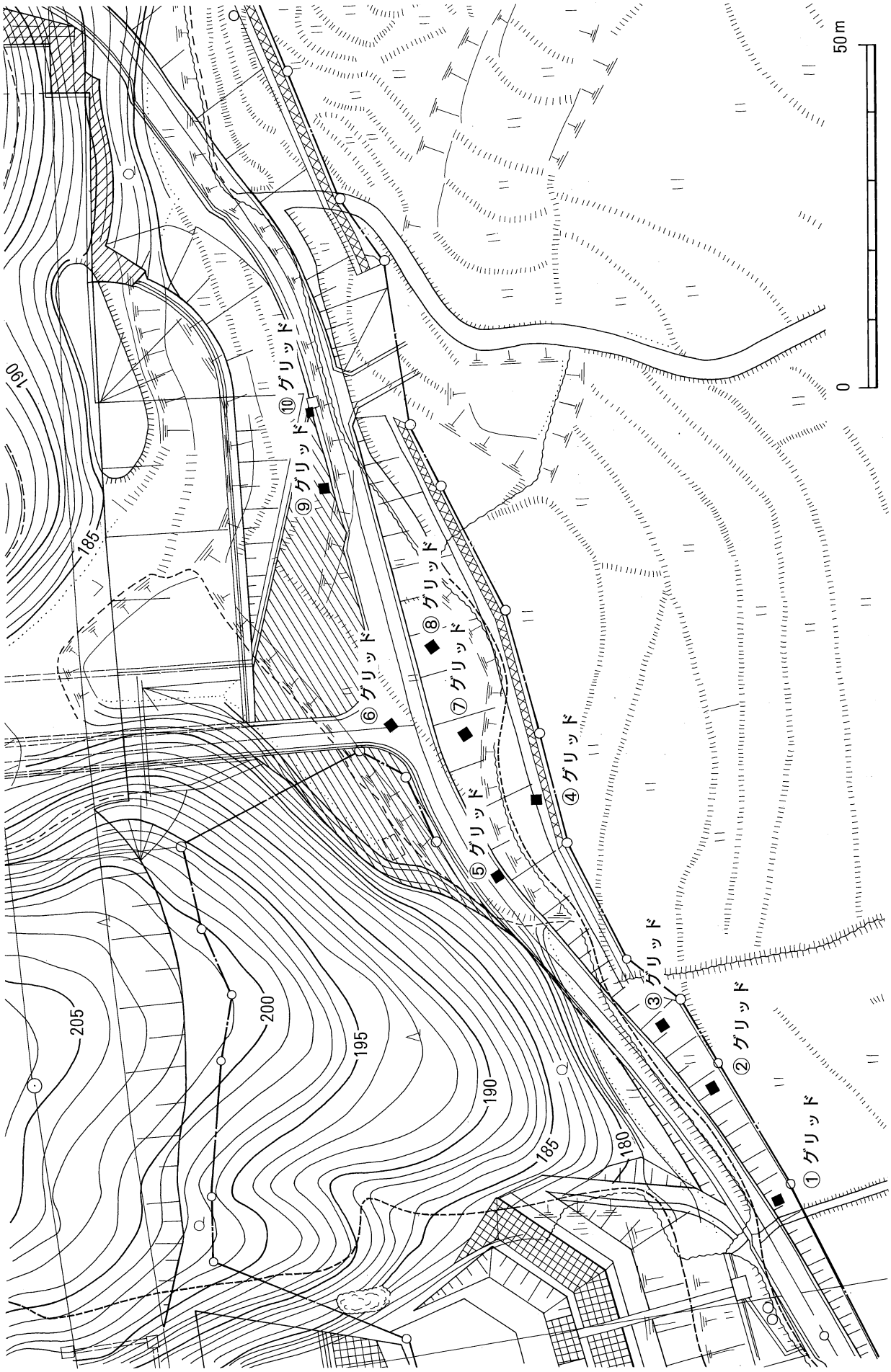


宮ノ沢城跡出土遺物

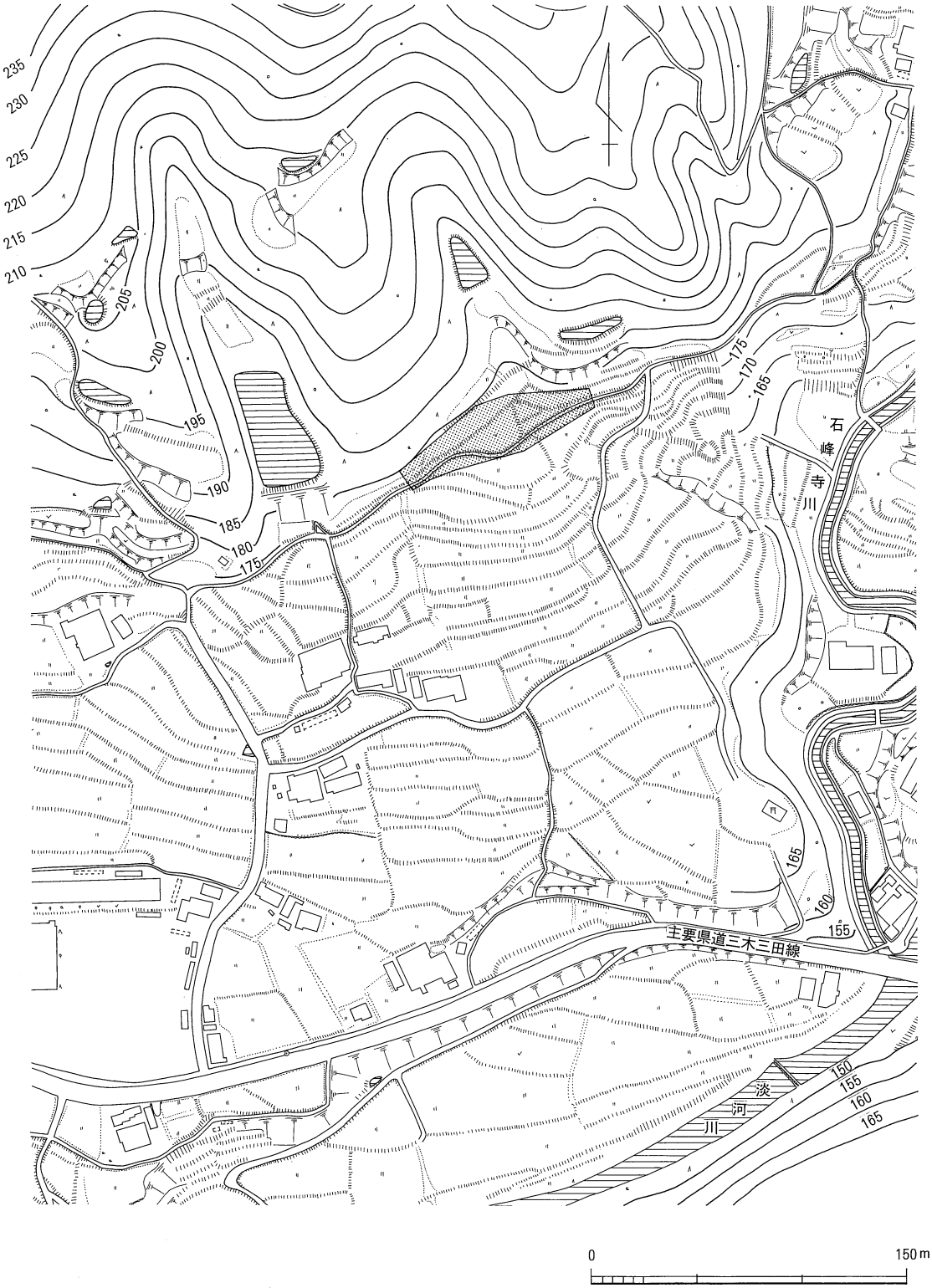


宮ノ沢城跡遠景

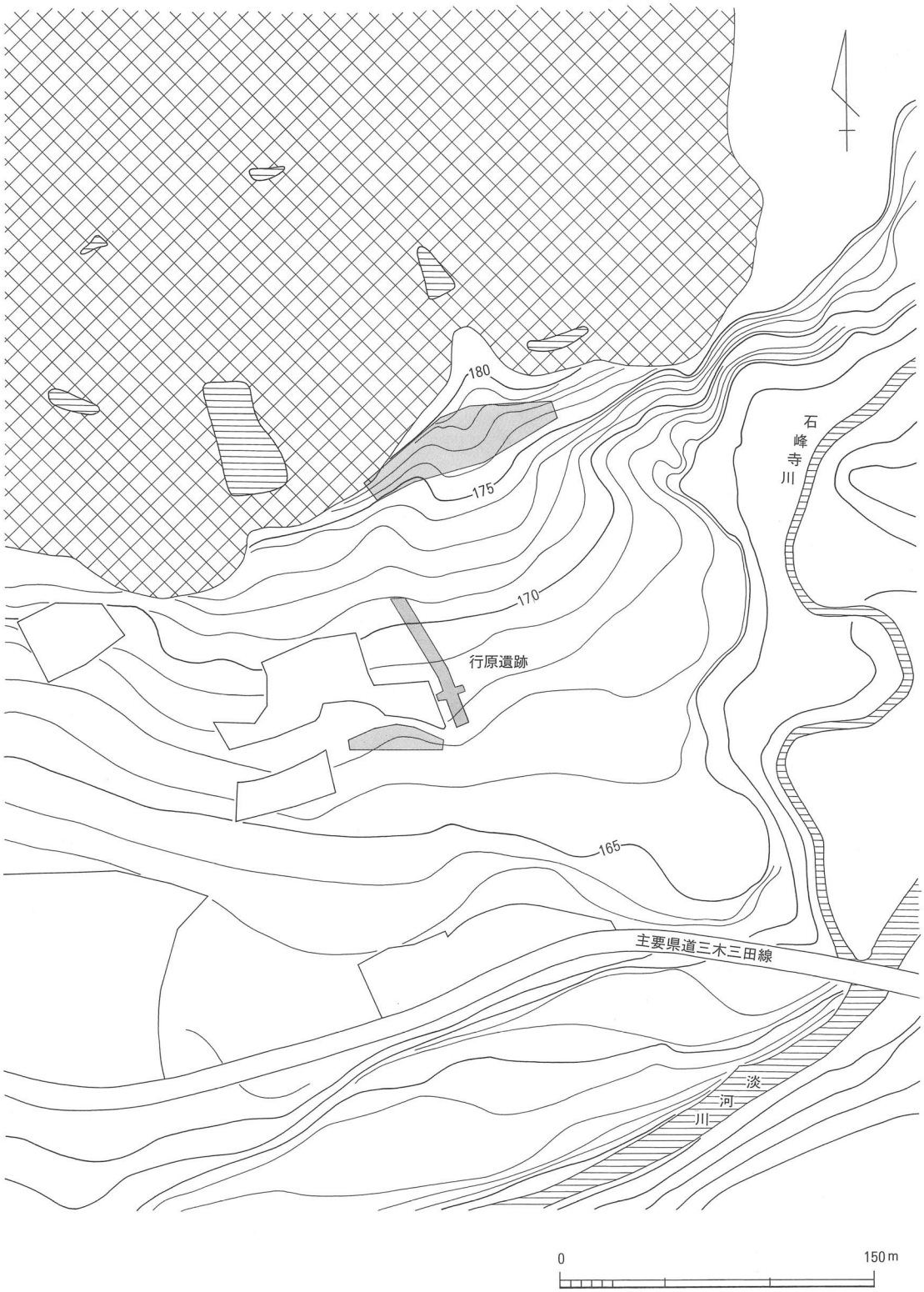
図版16



淡河上中遺跡確認調査試掘坑設定図

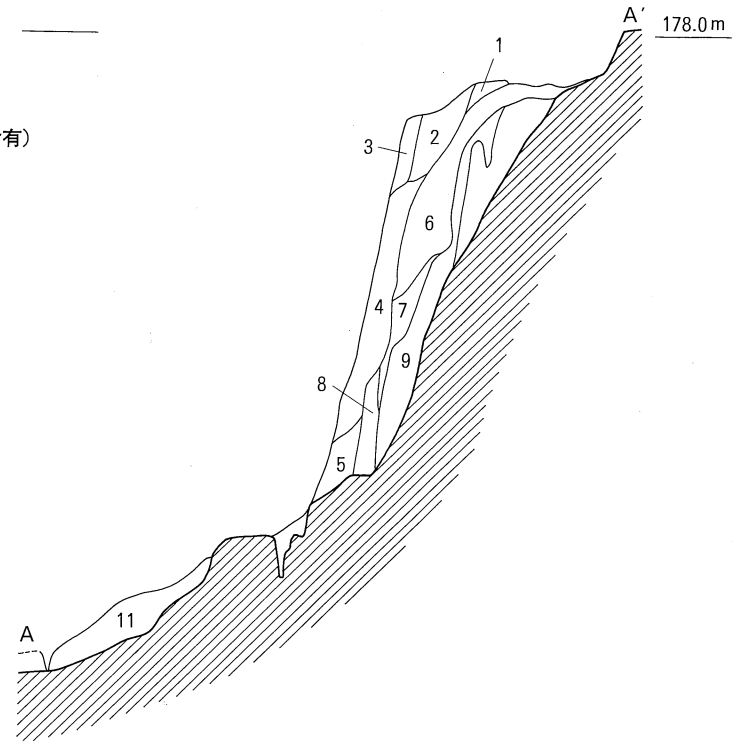


淡河上中遺跡調査区位置図　1／3000

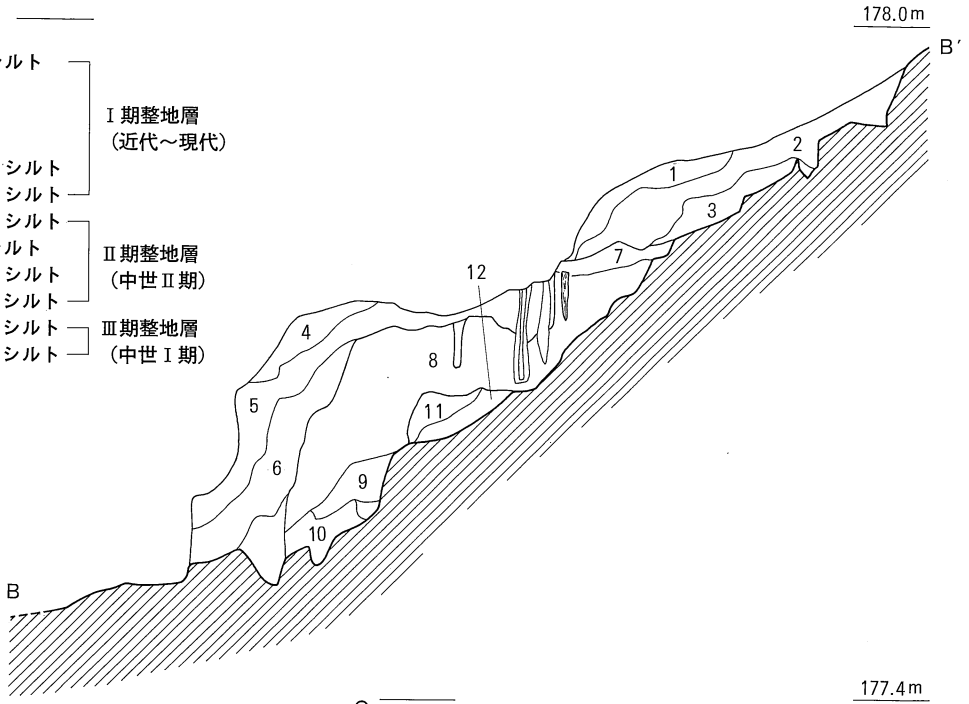


淡河上中遺跡微地形等高線図　1／3000

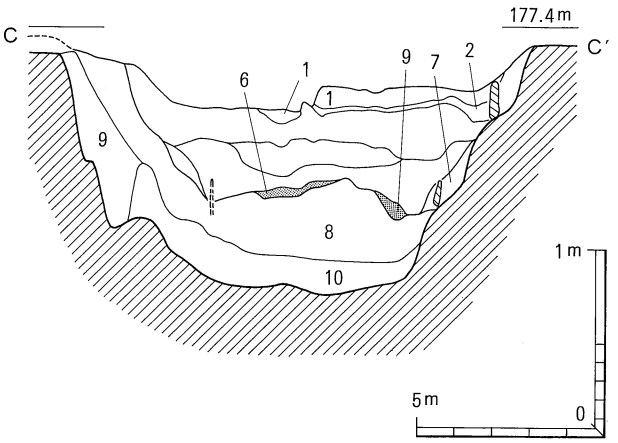
Ⅱ期整地層（中世Ⅱ期～現代）
1．灰白色粗砂～小礫混りシルト
2．暗茶褐色粗砂～小礫混りシルト（焼土・炭化物含有）
3．灰黄色粗砂～小礫混りシルト
4．灰褐色粗砂～小礫混りシルト（焼土含む）
5．灰褐色粗砂～小礫混りシルト
6．灰色中砂～粗砂混りシルト
7．暗灰色中砂～粗砂混りシルト
8．褐灰色小礫混りシルト
9．緑灰色中砂～粗砂混りシルト
10．褐灰色粗砂～小礫混りシルト
11．褐灰色粗砂～小礫混りシルト



1．黄灰色中～粗砂混りシルト
2．褐灰色粗砂混りシルト
3．灰黄色粗砂混りシルト
4．灰白色粗砂混りシルト
5．灰オリーブ色粗砂混りシルト
6．緑灰色粗砂～小礫混りシルト
Ⅰ期整地層（近代～現代）
7．浅黄色中砂～小礫混りシルト
8．灰色粗砂～小礫混りシルト
9．灰白色粗砂～小礫混りシルト
10．黄灰色粗砂～小礫混りシルト
Ⅱ期整地層（中世Ⅱ期）
11．緑灰色中砂～小礫混りシルト
12．灰白色粗砂～小礫混りシルト
Ⅲ期整地層（中世Ⅰ期）

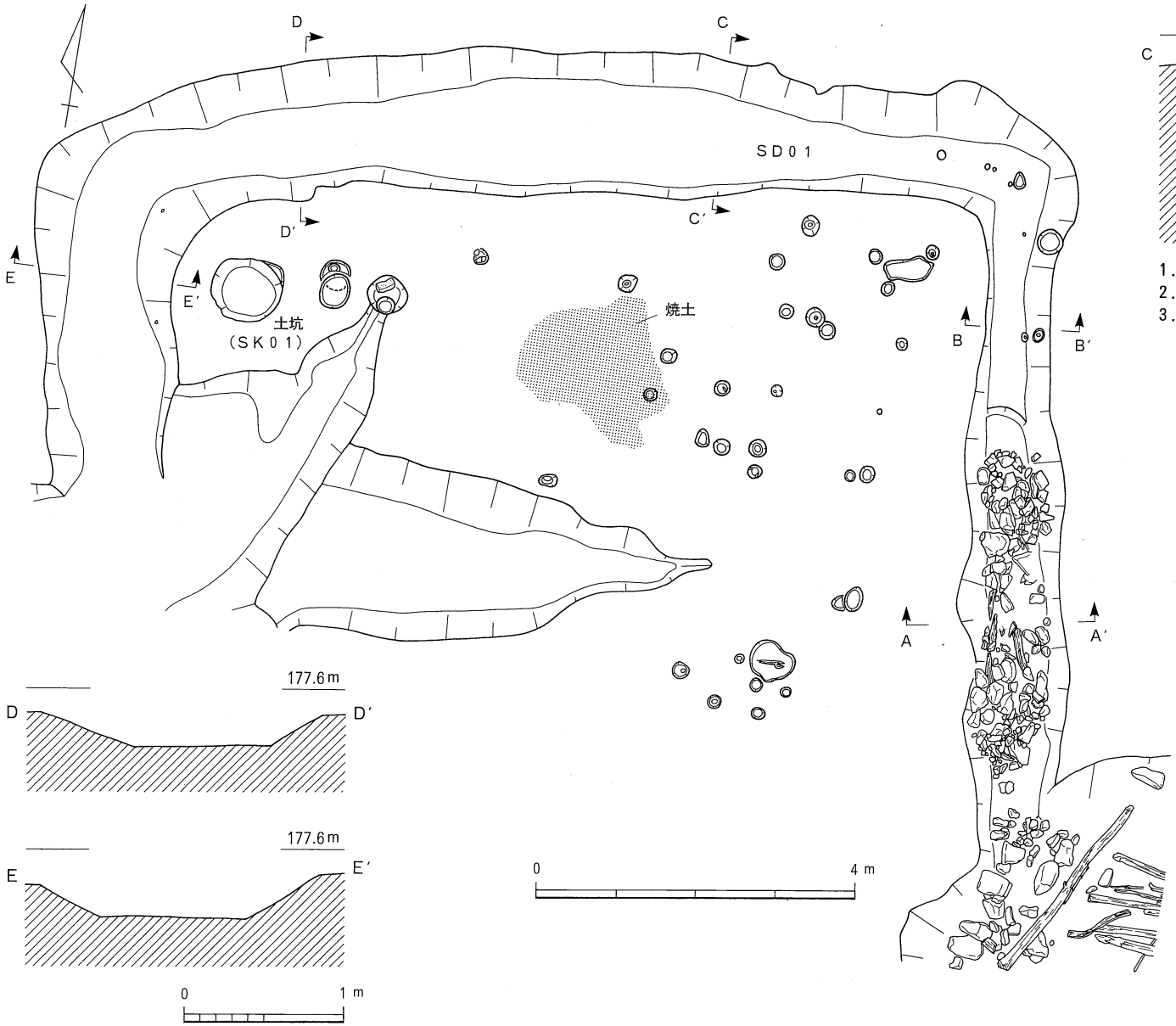


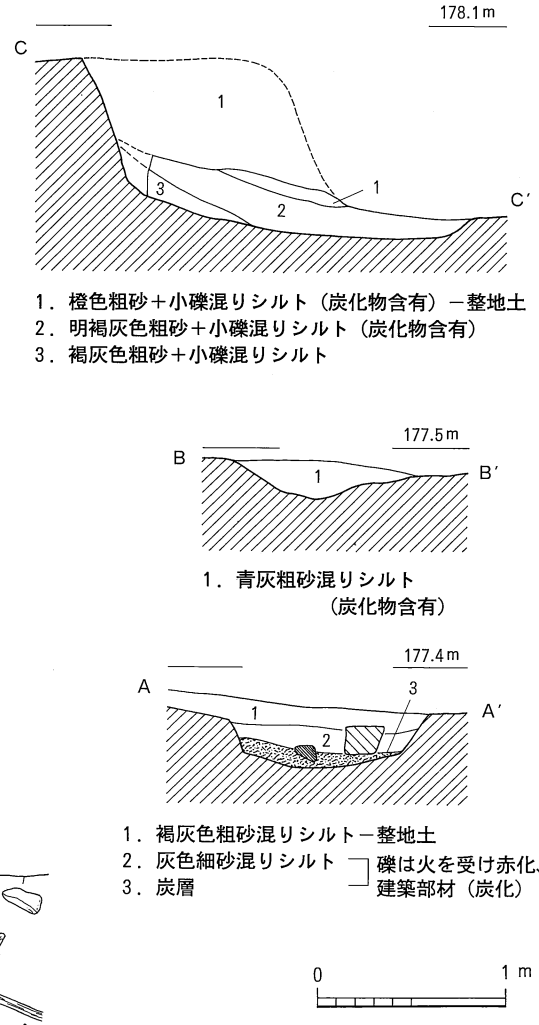
1．黄褐色粗砂混りシルト
2．黄灰色シルト
3．灰白色粗砂混りシルト
4．褐灰色シルト
5．黄灰色中～粗砂混りシルト
6．粗砂～小礫
（中世Ⅱ期）
7．黄灰色粗砂～大礫（河原石）混りシルト
8．黄灰色粗砂～中礫混りシルト
9．褐灰色中礫混りシルト
10．黄褐色粗砂～大礫（河原石）混りシルト
（中世Ⅰ期）



淡河上中遺跡調査区土層断面図　縦1／40、横1／200

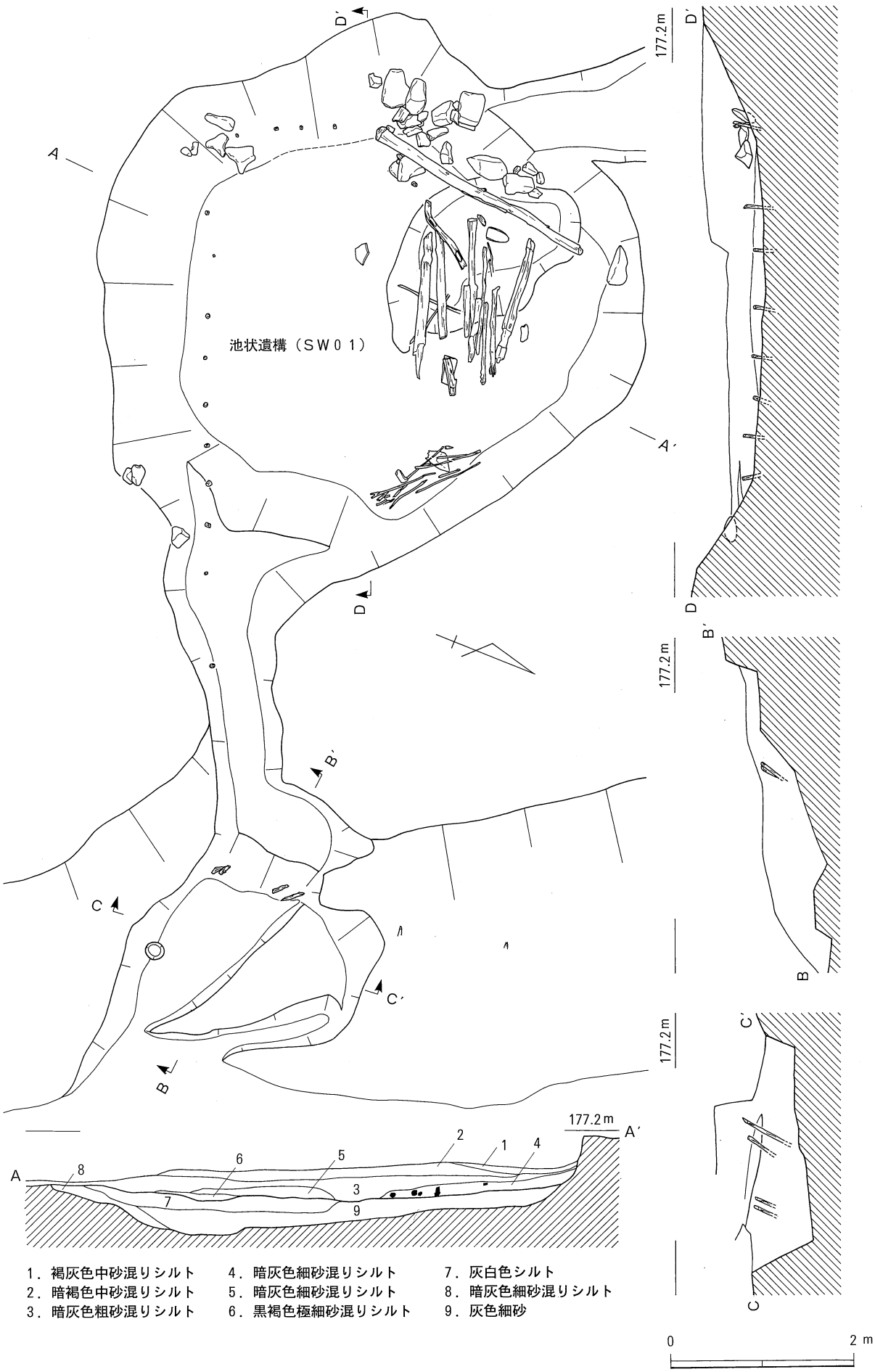
淡河上中遺跡全体図　1／500



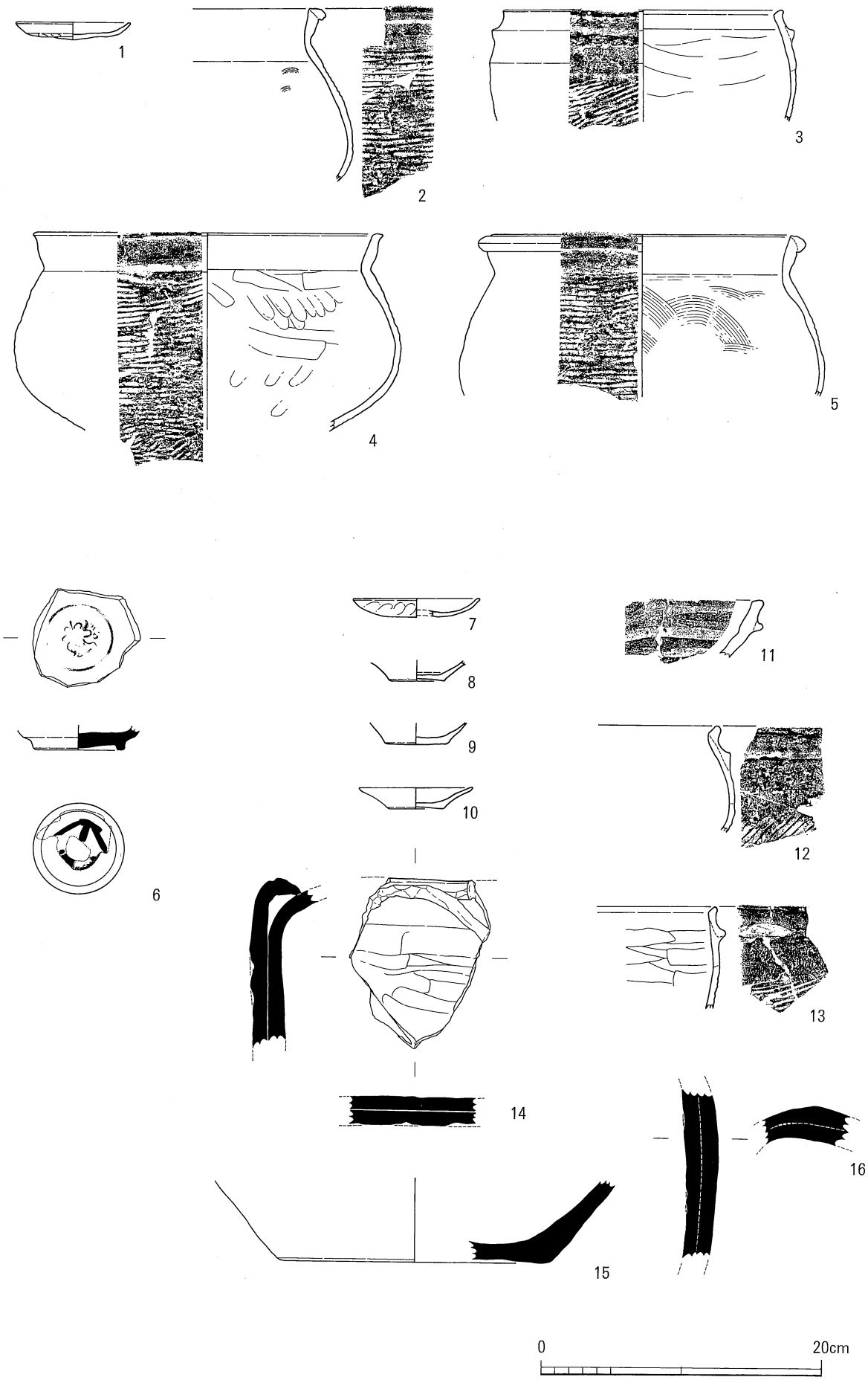


淡河上中遺跡SD 01

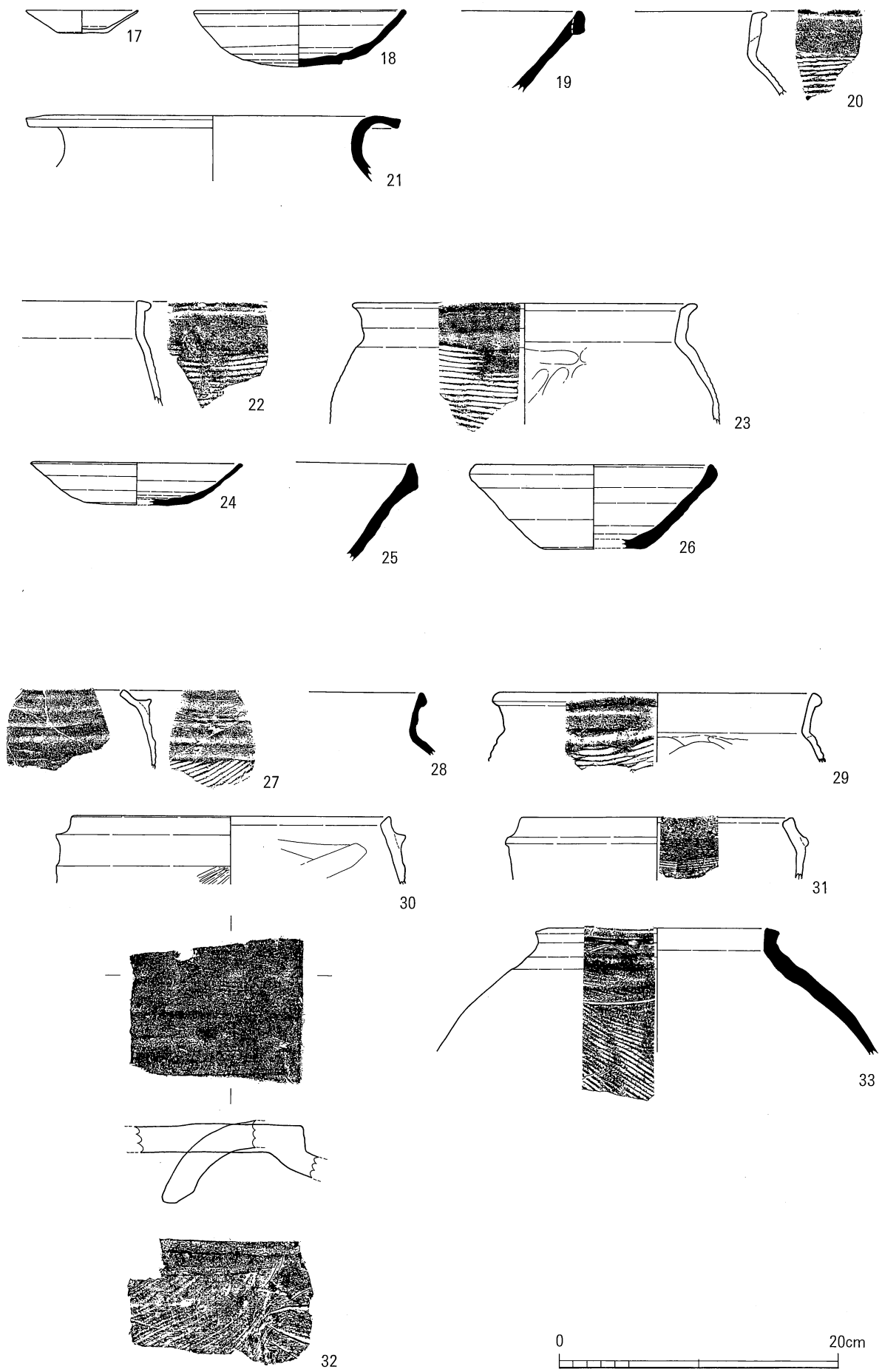
図版21



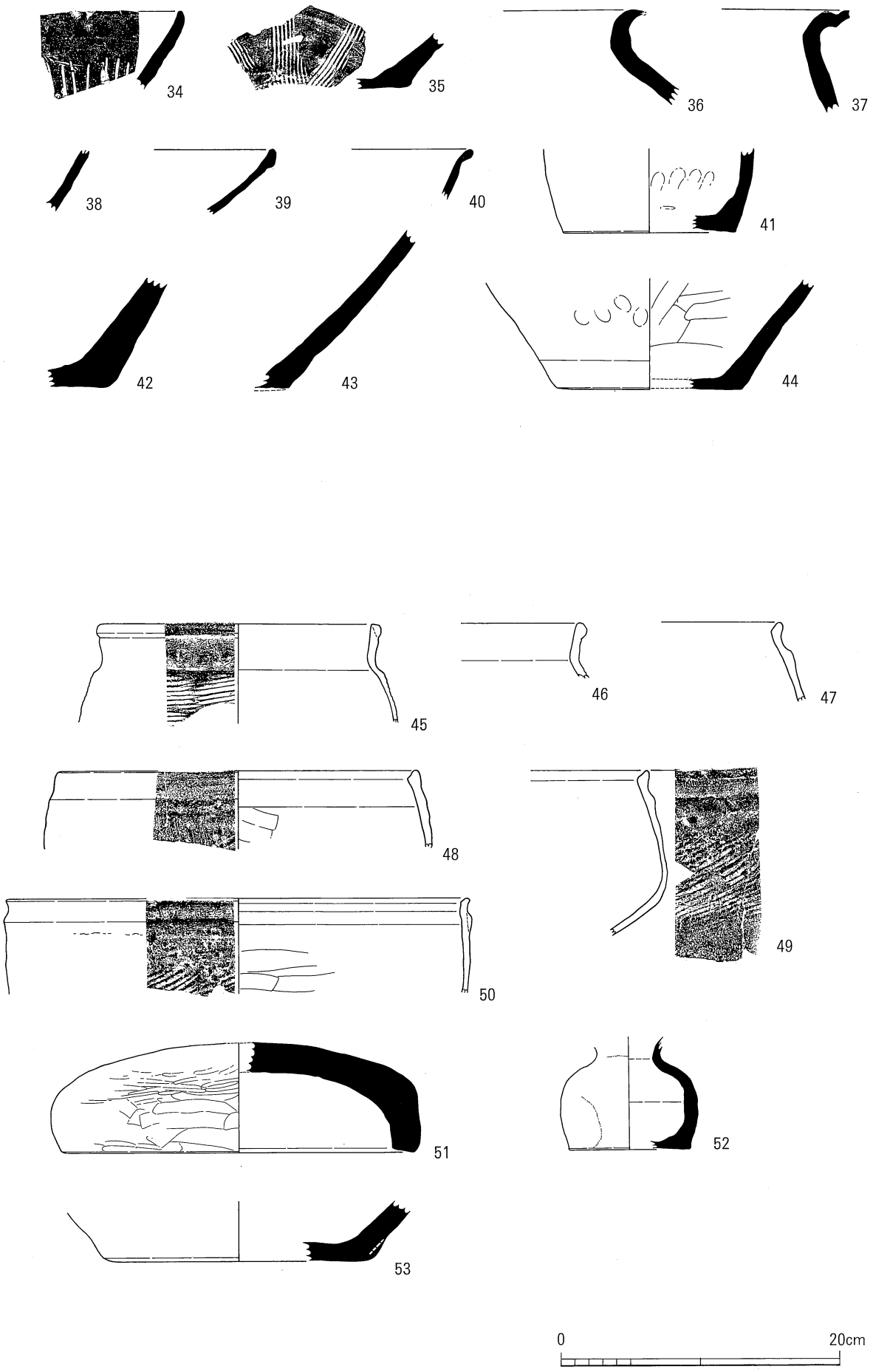
淡河上中遺跡池状遺構（ＳＷ01）



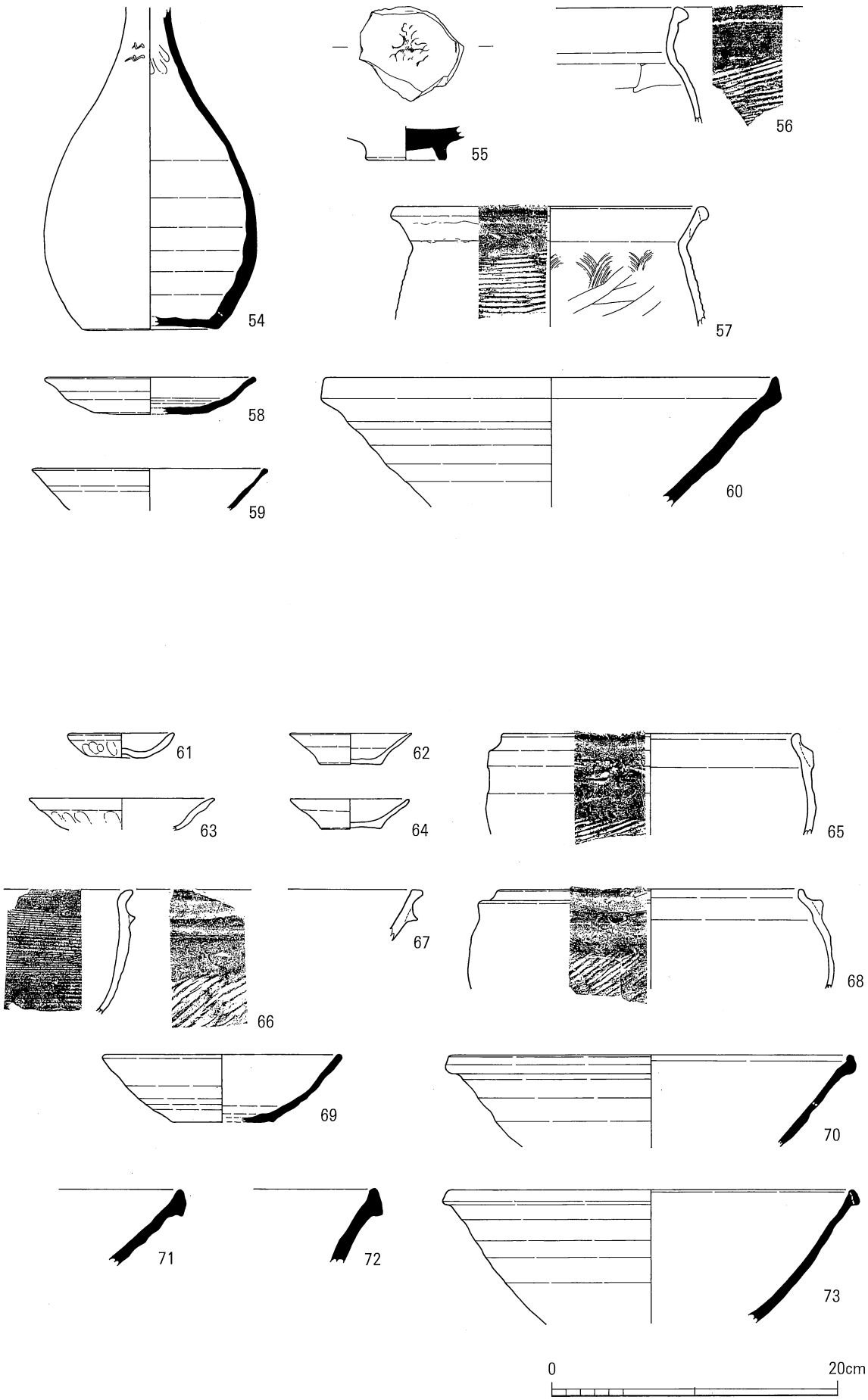
淡河上中遺跡出土遺物（1）



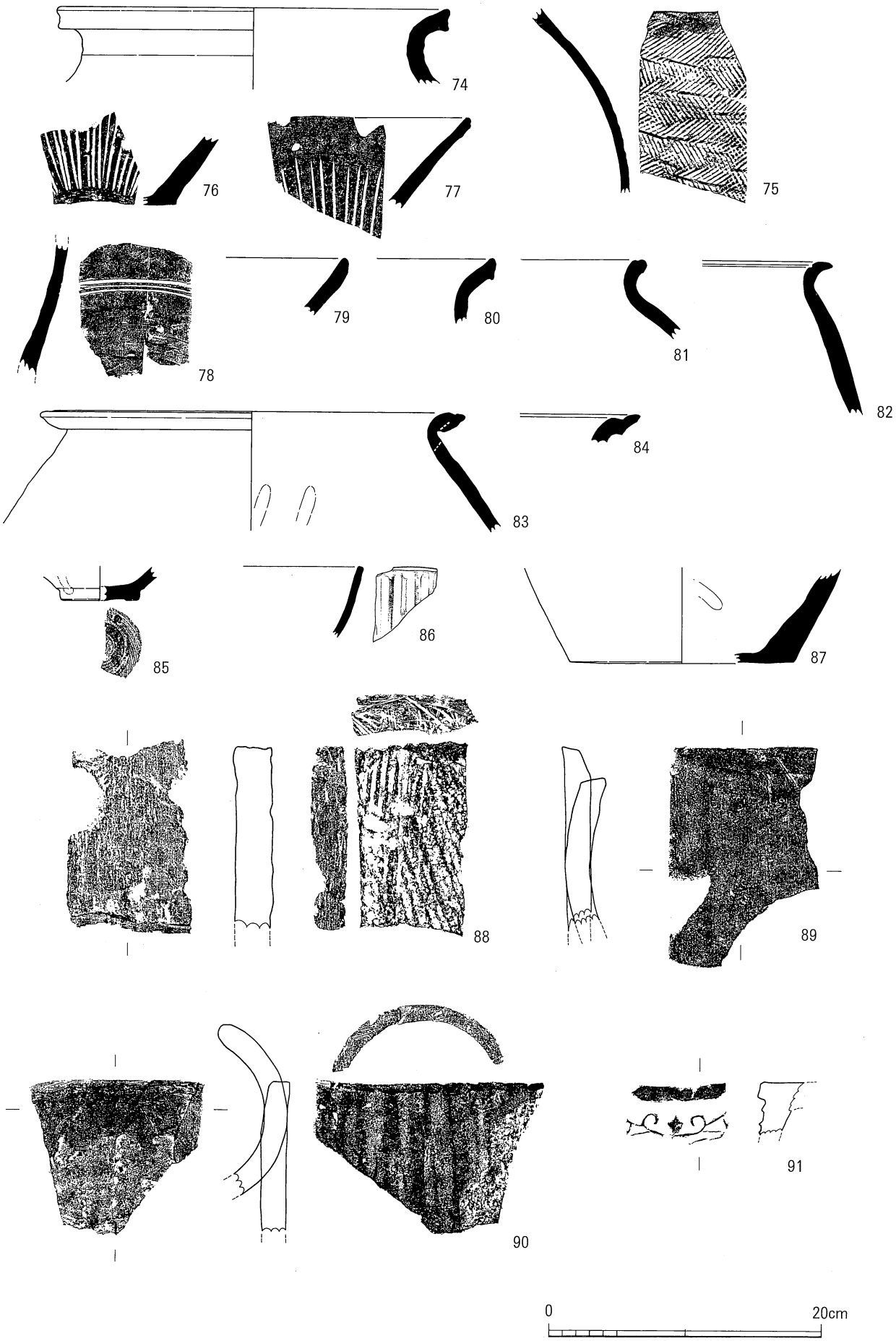
淡河上中遺跡出土遺物（2）



淡河上中遺跡出土遺物（3）

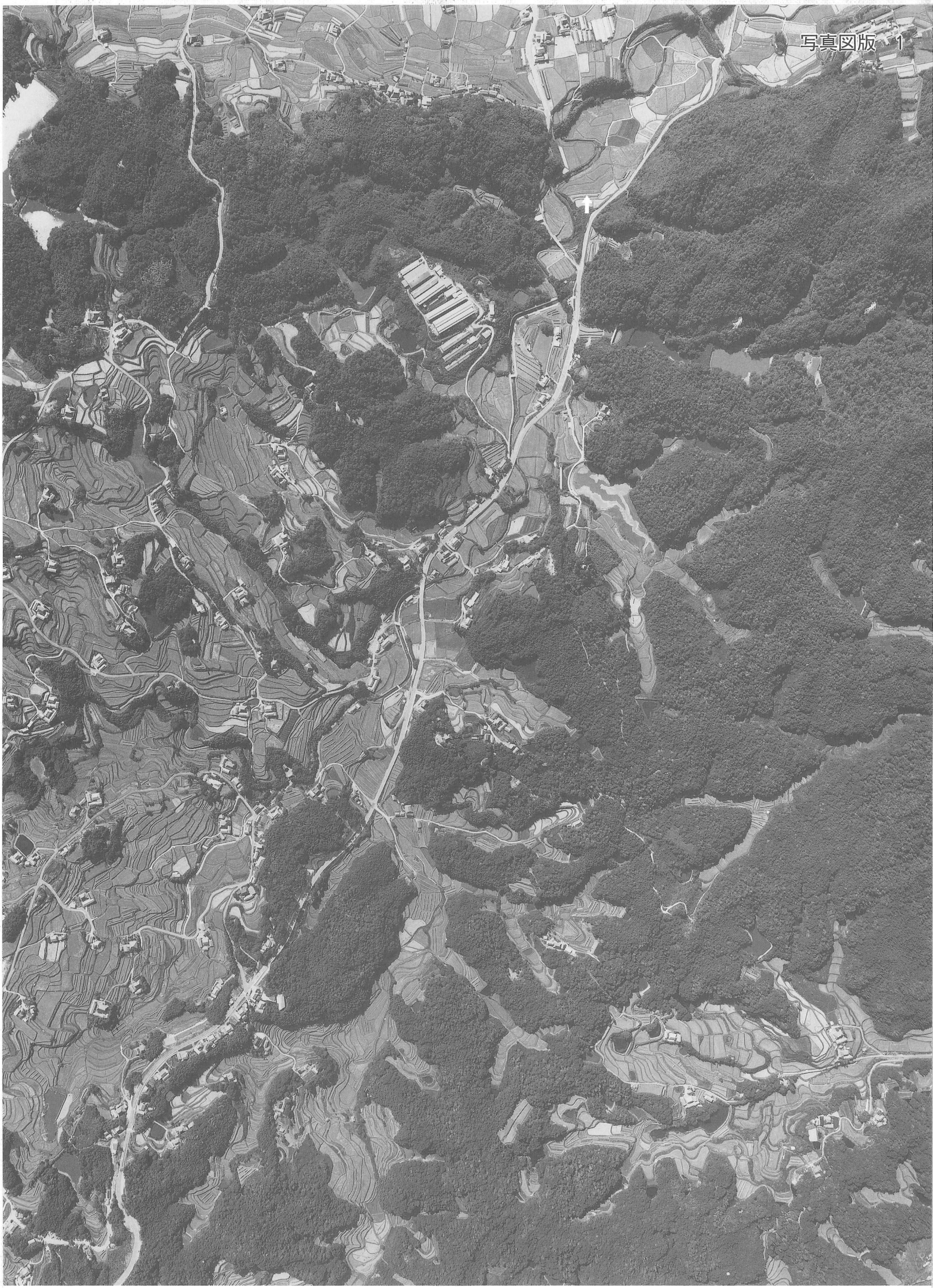


淡河上中遺跡出土遺物（4）



淡河上中遺跡出土遺物（5）

写 真 図 版



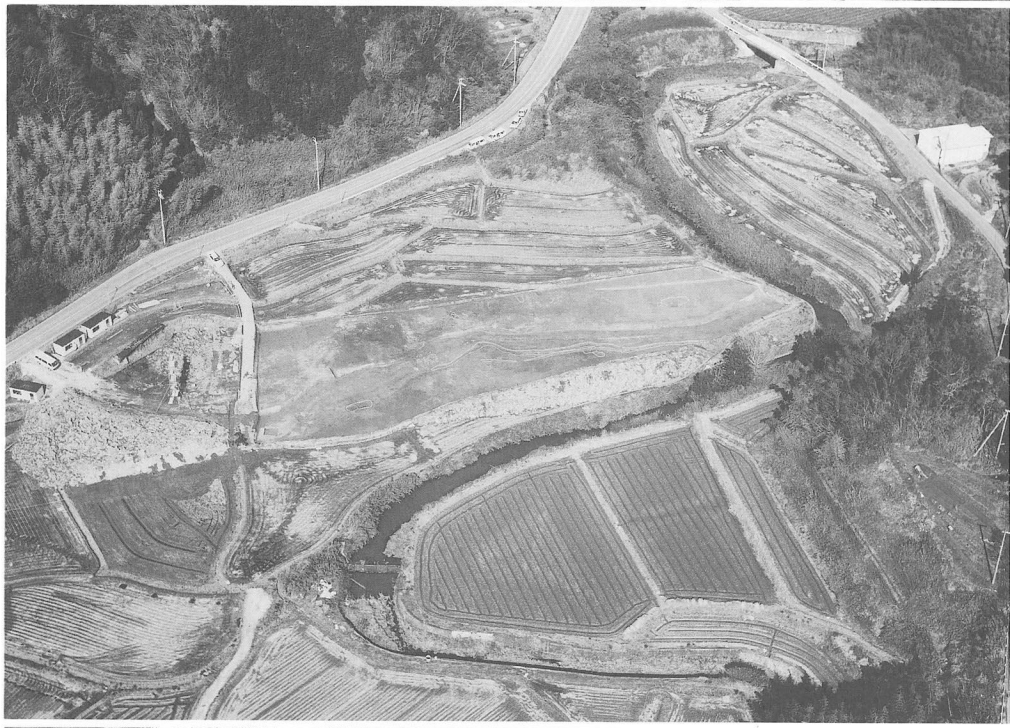
奥遺跡の位置（国土地理院撮影）

奥遺跡　遠景（南西から）

奥遺跡　遠景（北東から）

調査区周辺（南から）

調査区周辺（垂直方向）



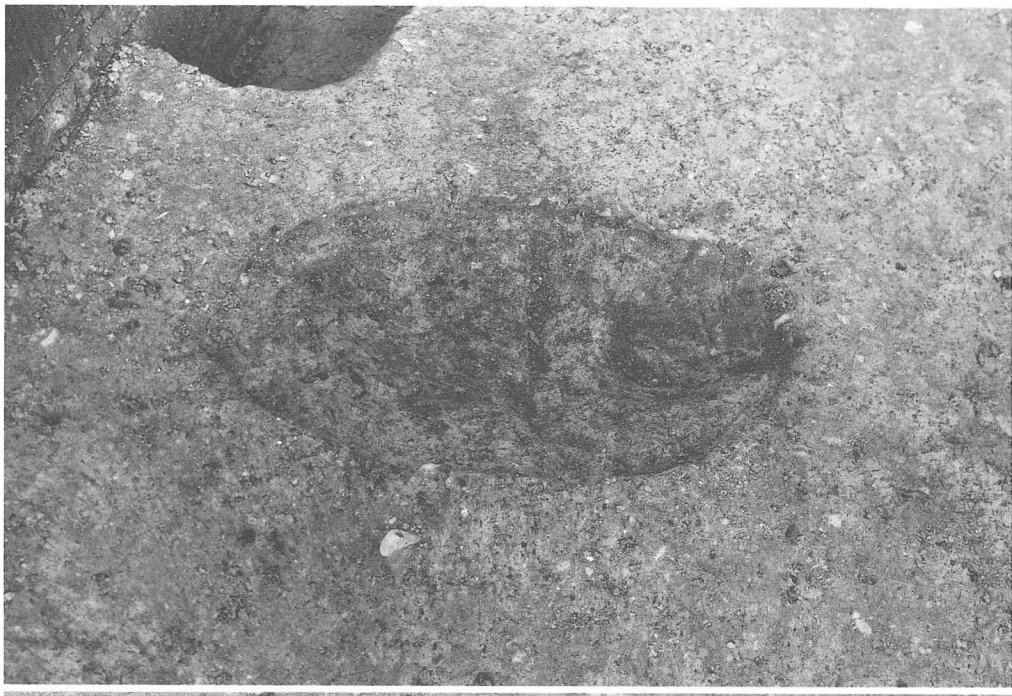
調査区全景（南から）

調査区全景（東から）

調査区全景（西から）

谷部（西から）

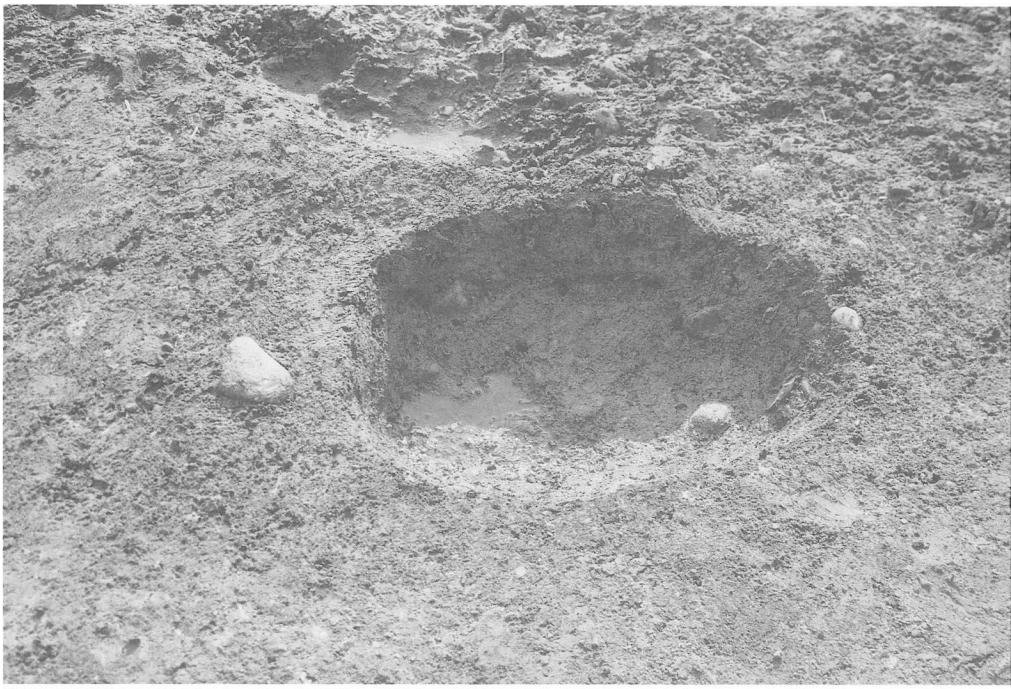
ＳＫ０１（南東から）



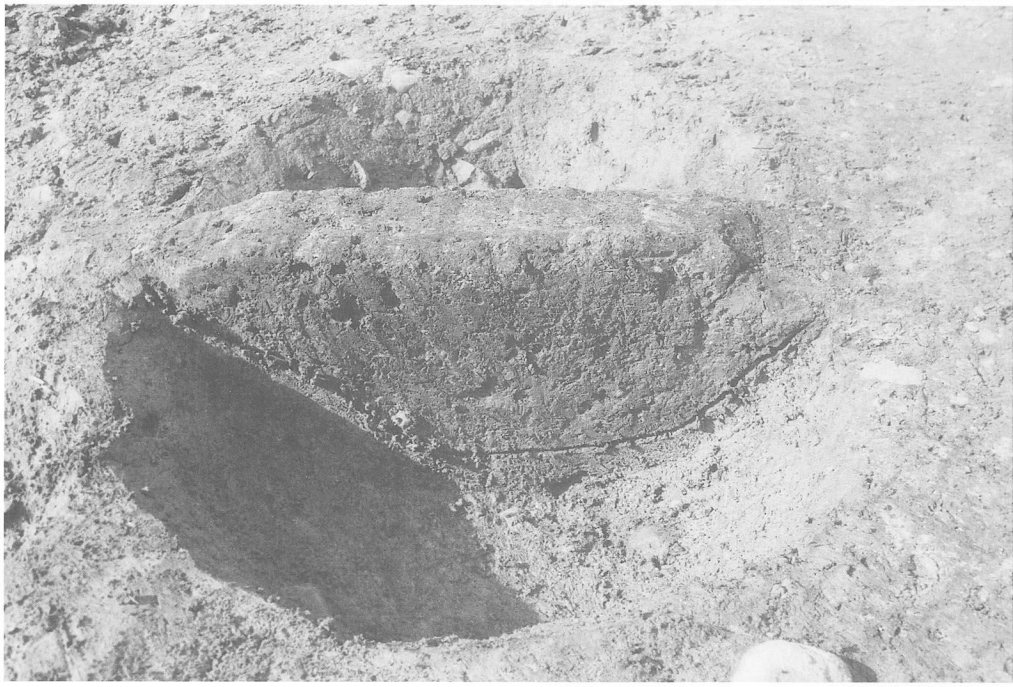
ＳＫ０２（西から）

ＳＫ０６（東から）

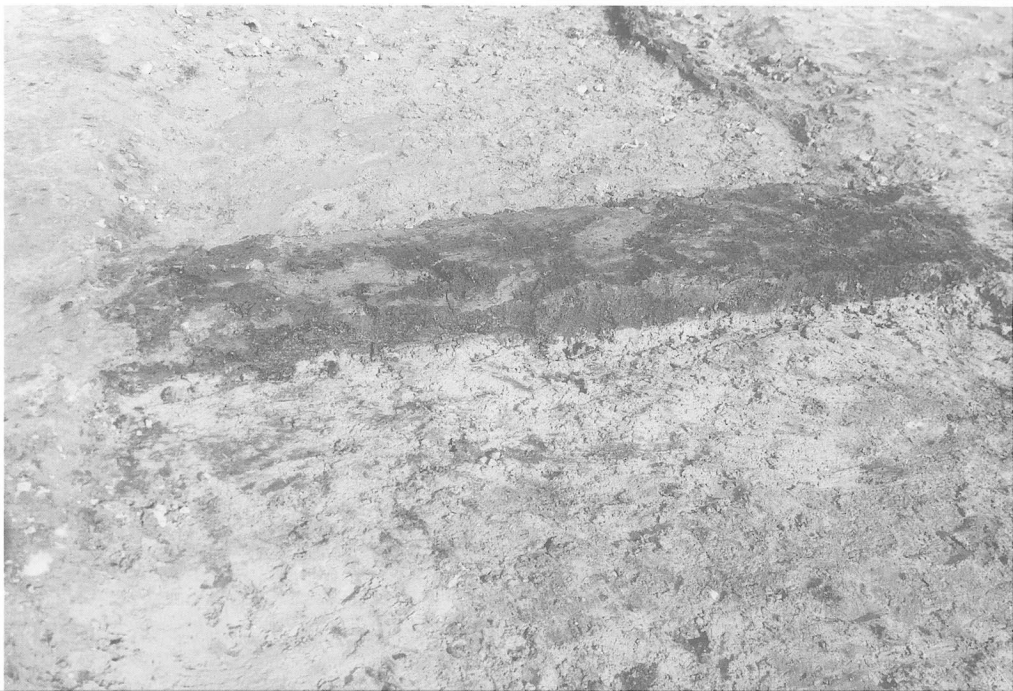
ＳＫ０６　断面（南東から）



ＳＫ０７（北東から）

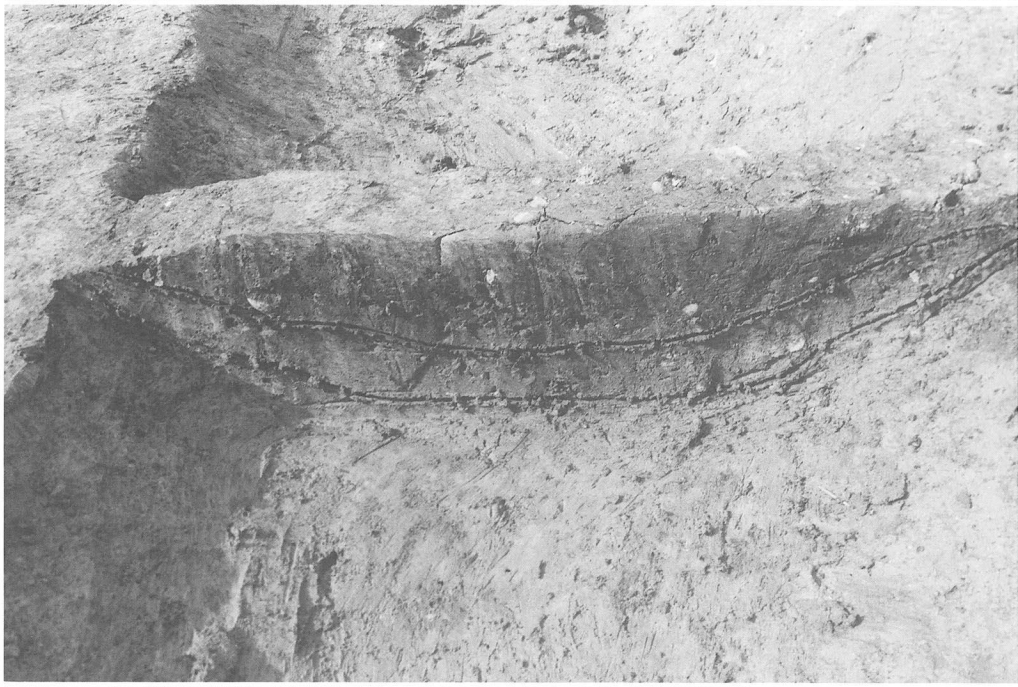


ＳＫ０７　断面（南東から）

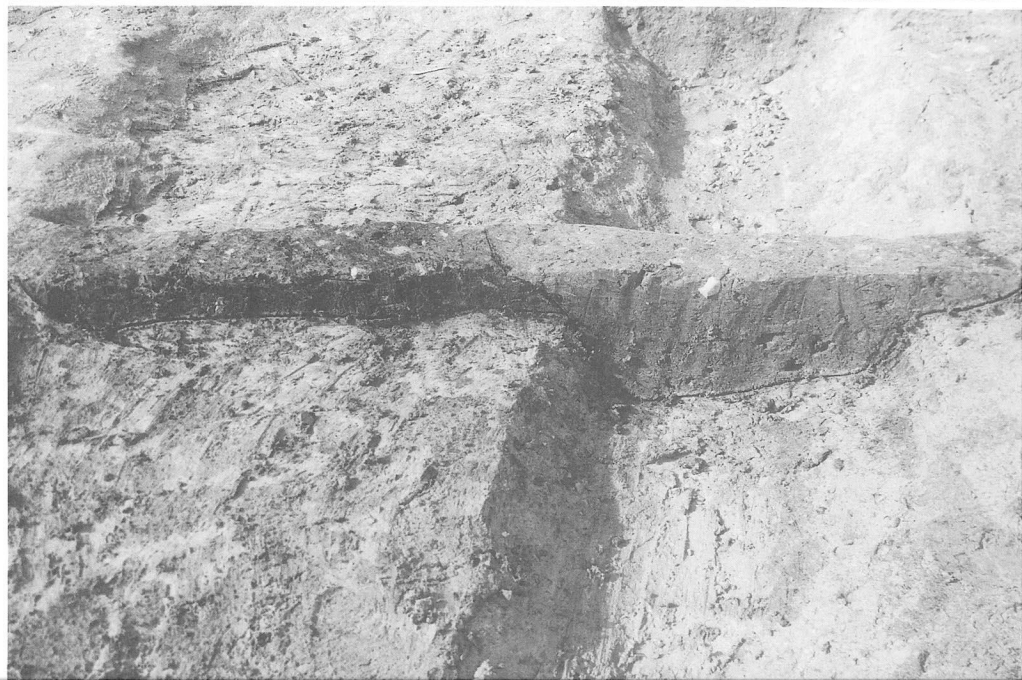


ＳＫ１０　断面（西から）

ＳＤ０２（西から）



ＳＤ０２　断面（東から）



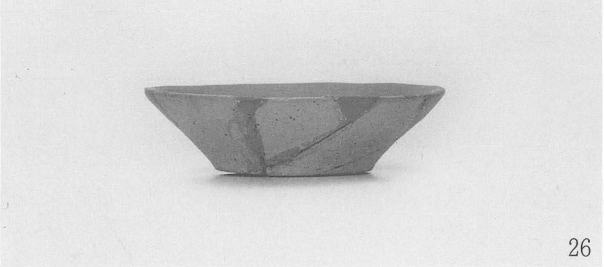
ＳＫ０９とＳＤ０２の切り合い
（西から）

3

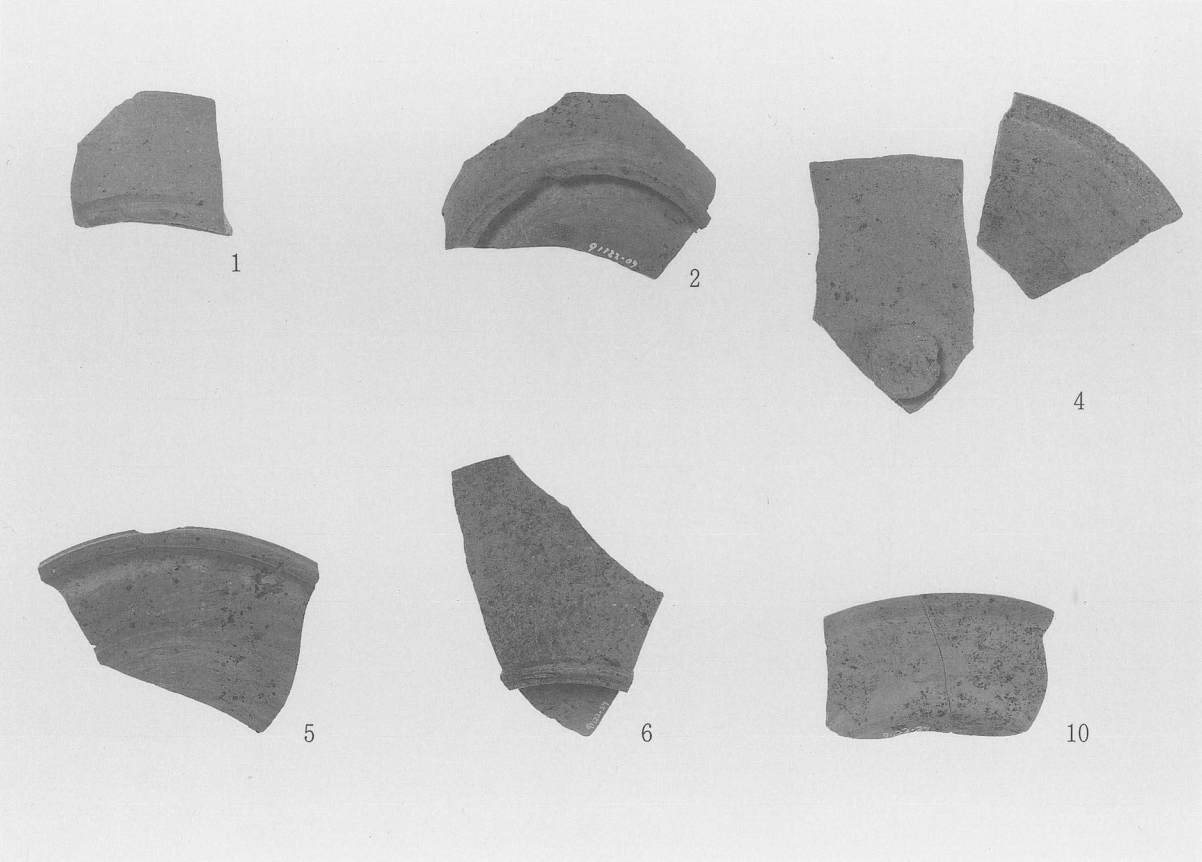
8

9

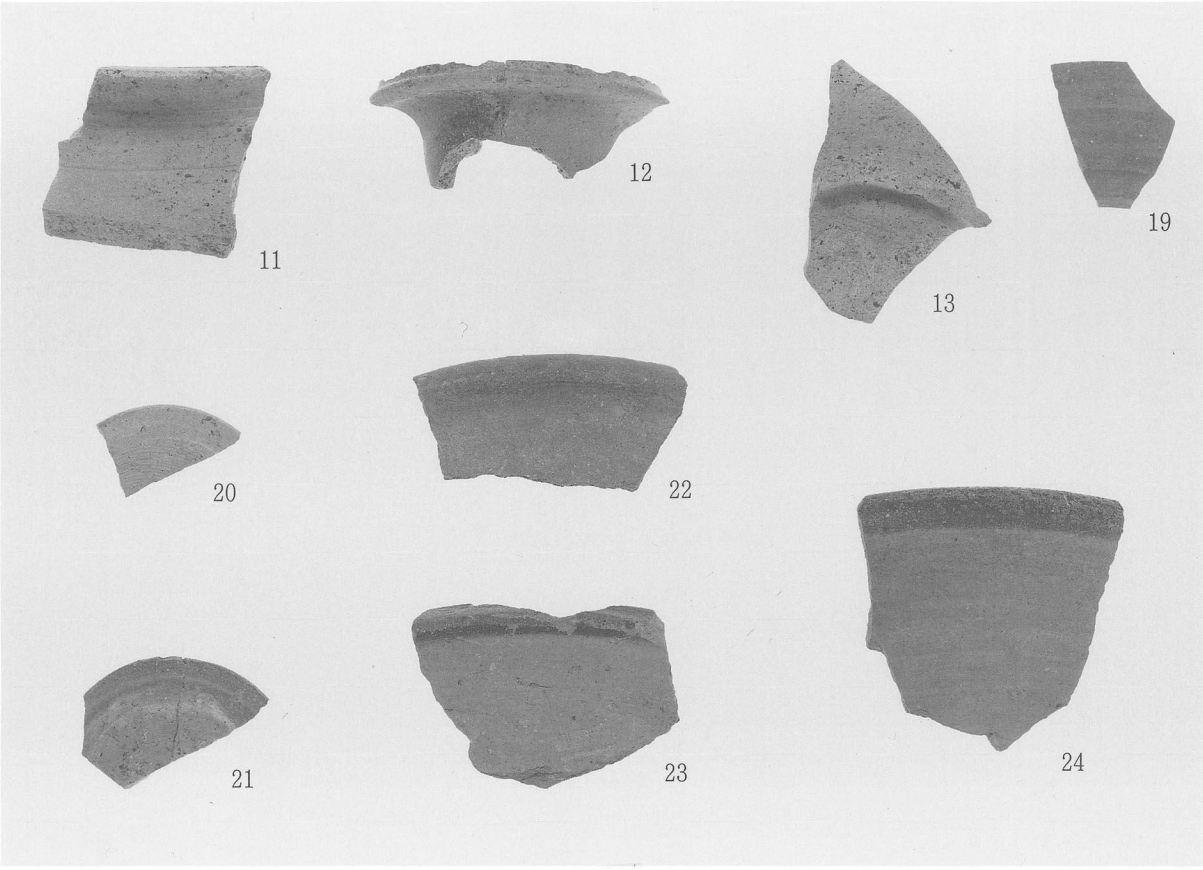
16

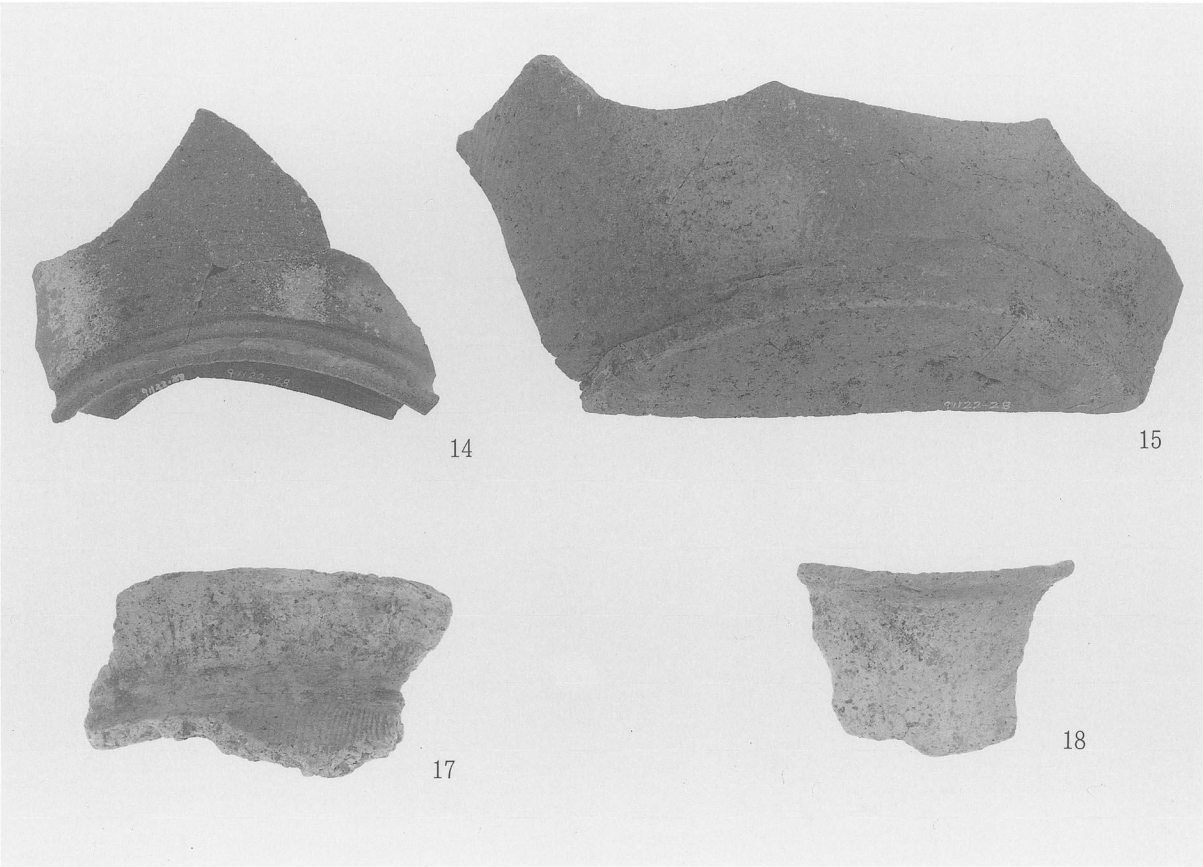

26

31

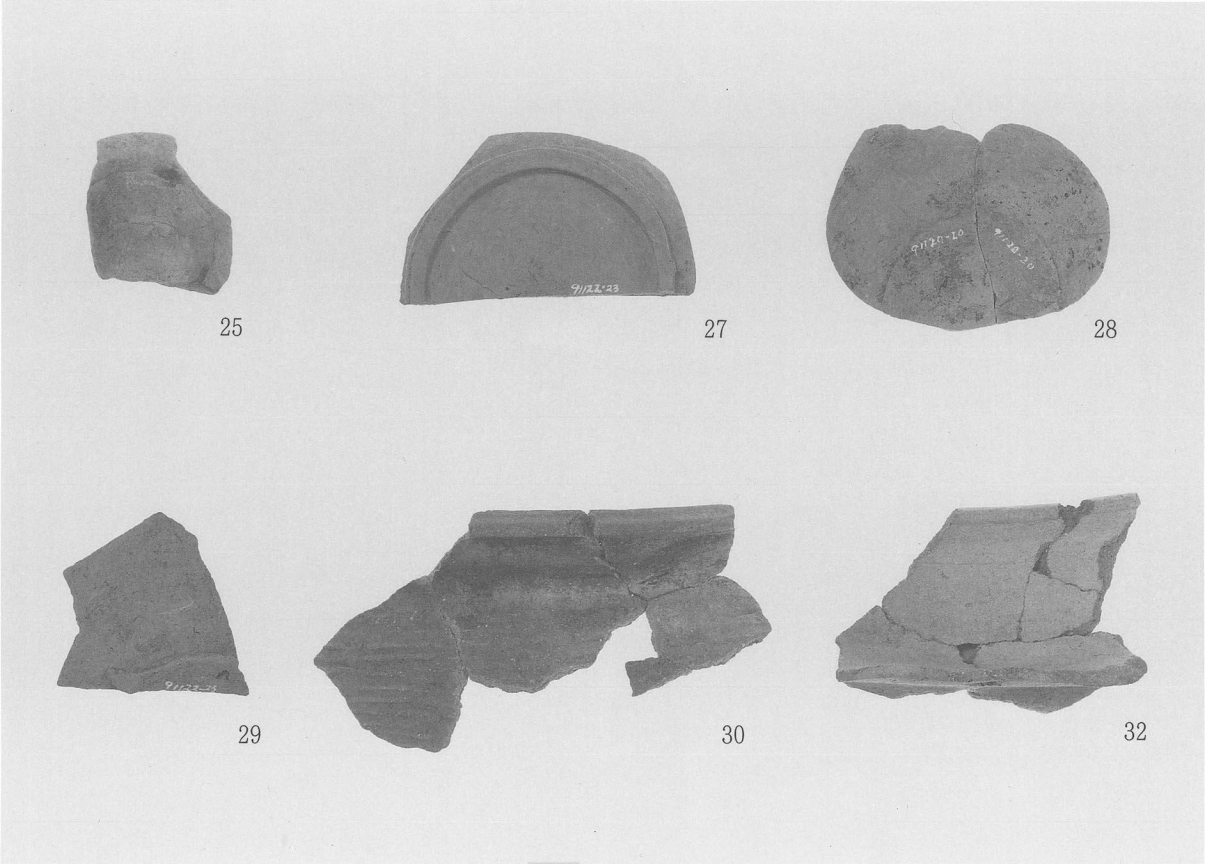


奥遺跡出土土器（1）

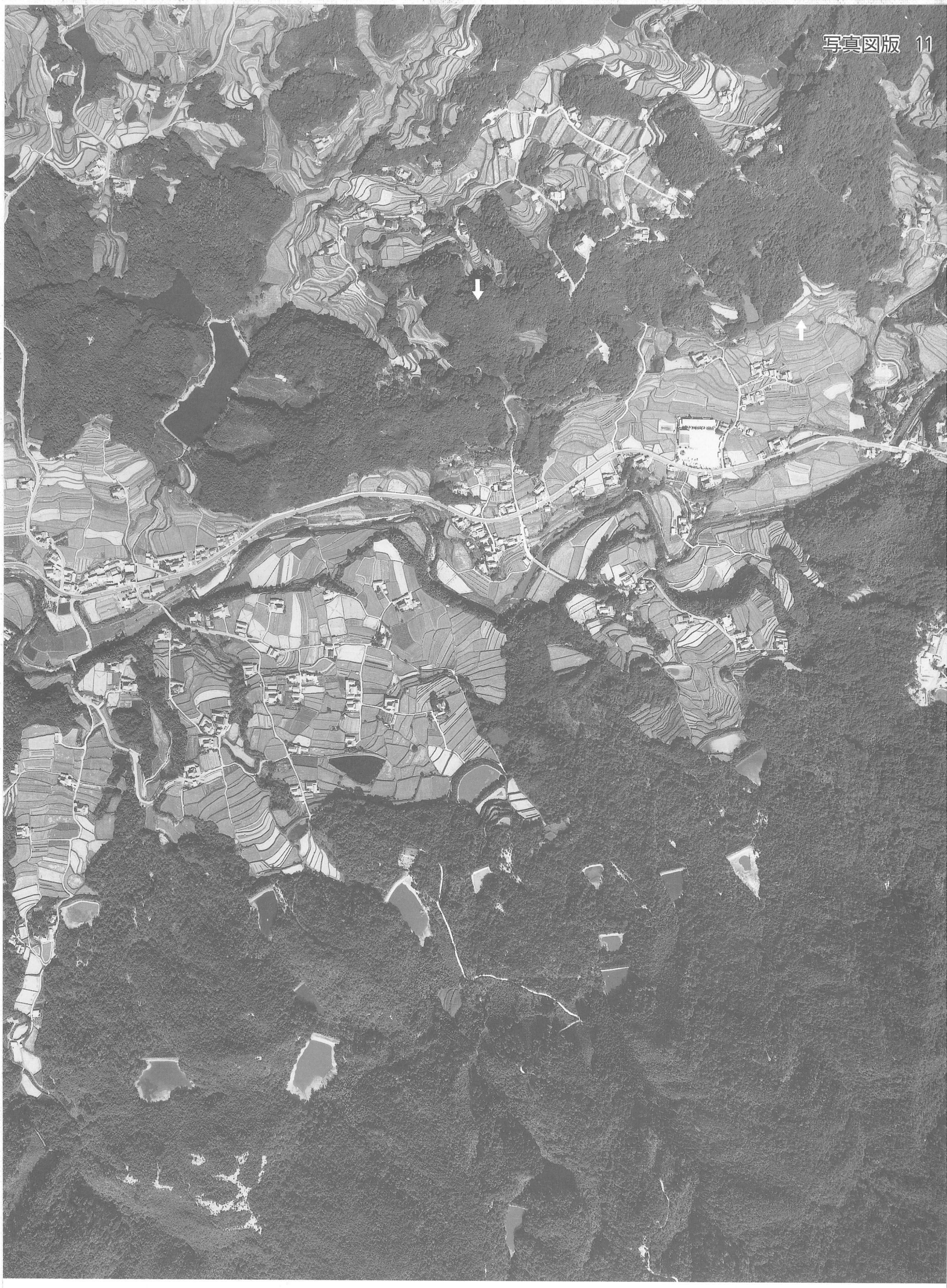




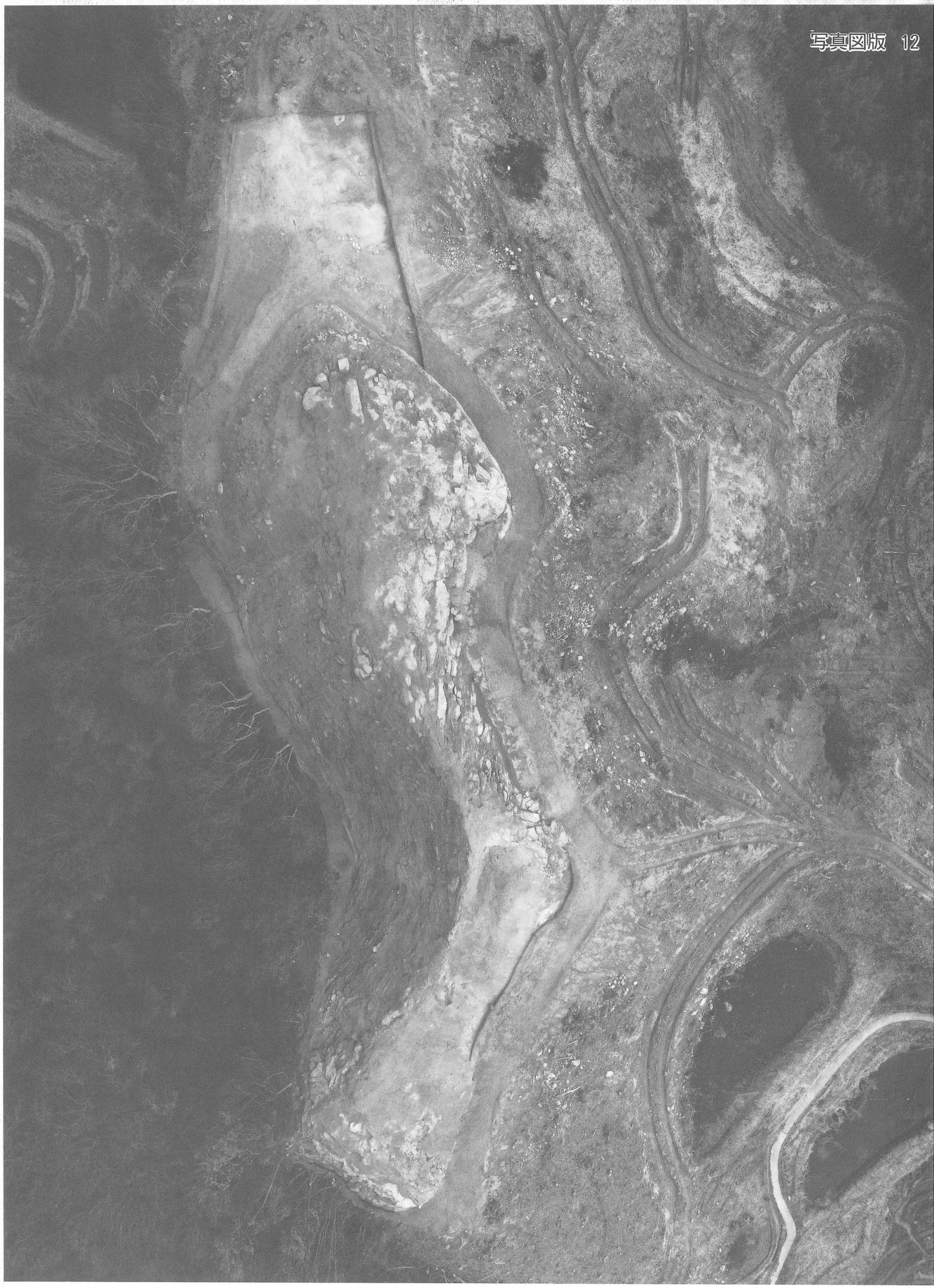
奥遺跡出土土器（２）



奥遺跡出土土器（3）

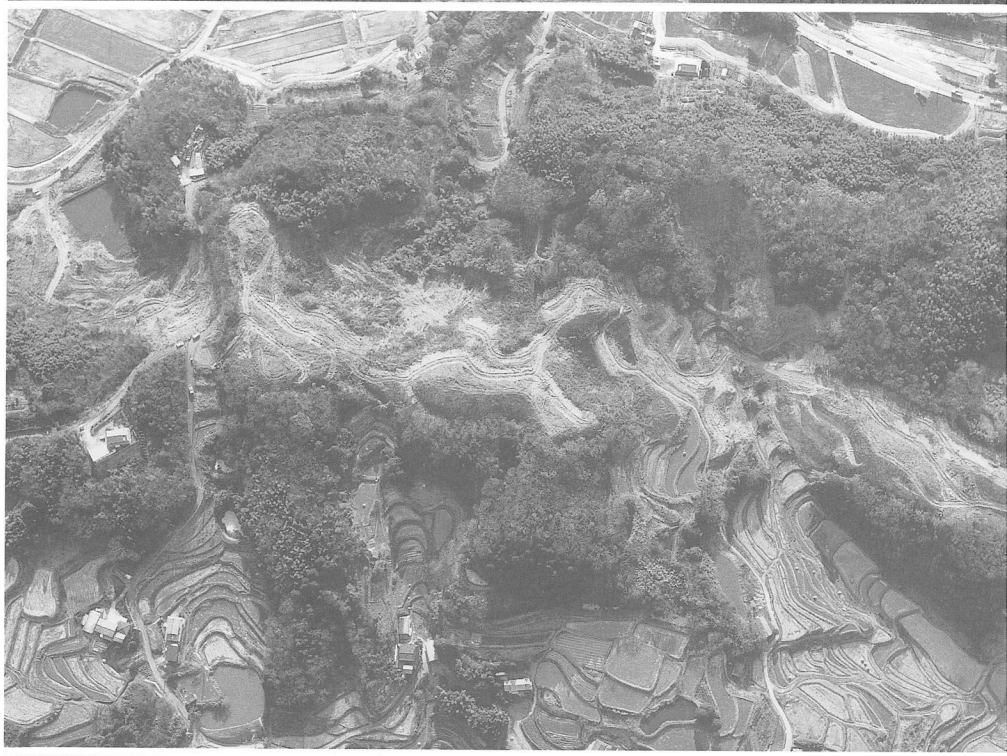


宮ノ沢城跡・淡河上中遺跡の位置（国土地理院撮影）



宮ノ沢城跡　調査後全景

宮ノ沢城跡　遠景（南から）



調査前全景

調査前全景（南から）

宮ノ沢城跡　調査後全景（南から）

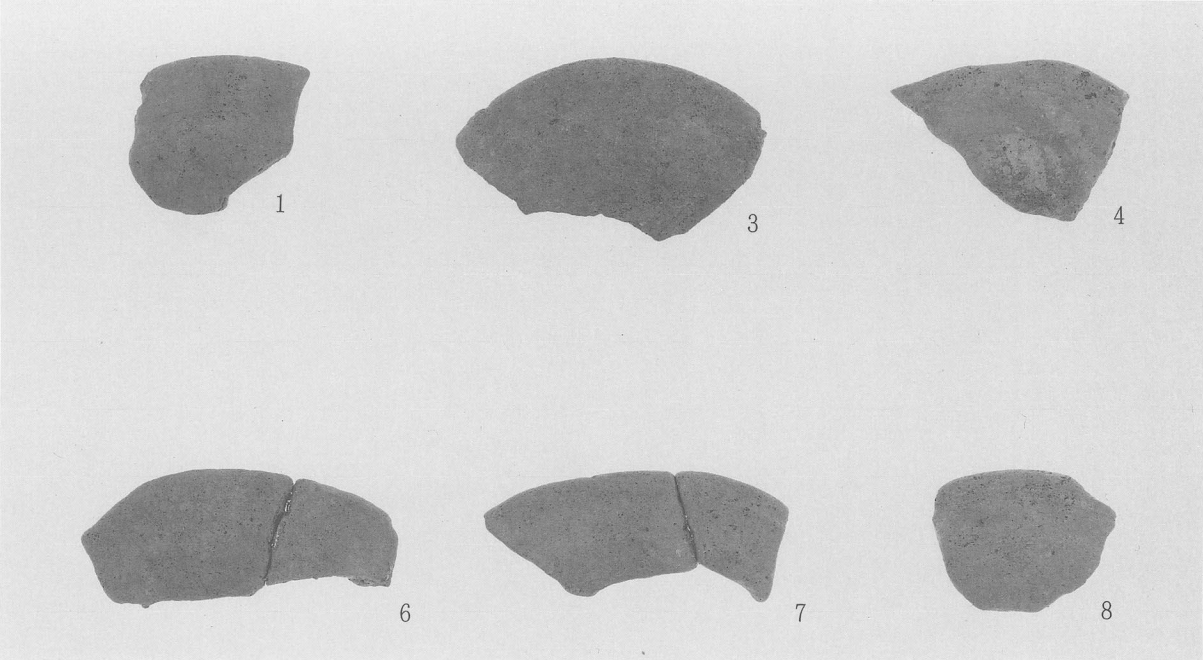
第１ピーク（南から）

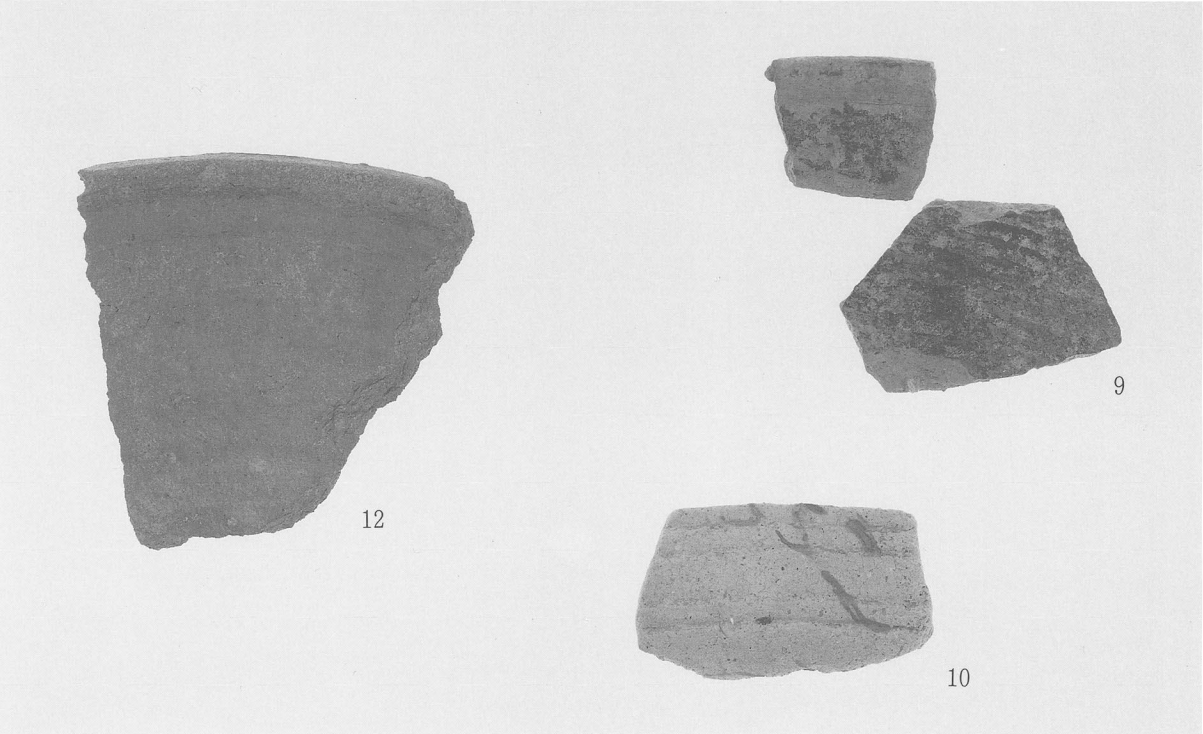
第１ピーク・東側尾根（東から）

宮ノ沢城跡
第１ピーク・東側尾根（北から）

北側平坦地（東から）

第２ピーク・西側尾根（上空から）





宮ノ沢城出土土器

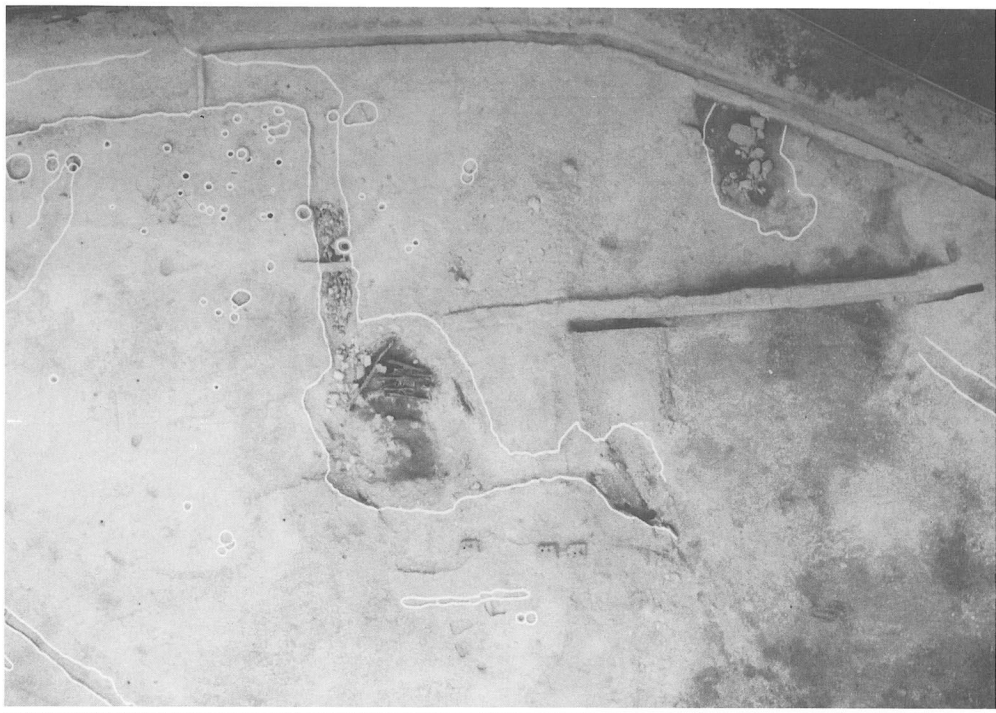
淡河上中遺跡
調査区全景
（垂直方向）

調査区全景（東から）

淡河上中遺跡
遠景（南から）

全景（南から）

全景（南から）



ＳＤ０１と池状遺構

ＳＤ０１東辺部出土状況
（西から）

池状遺構（ＳＷ０１）
（南西から）

調査後全景（西から）

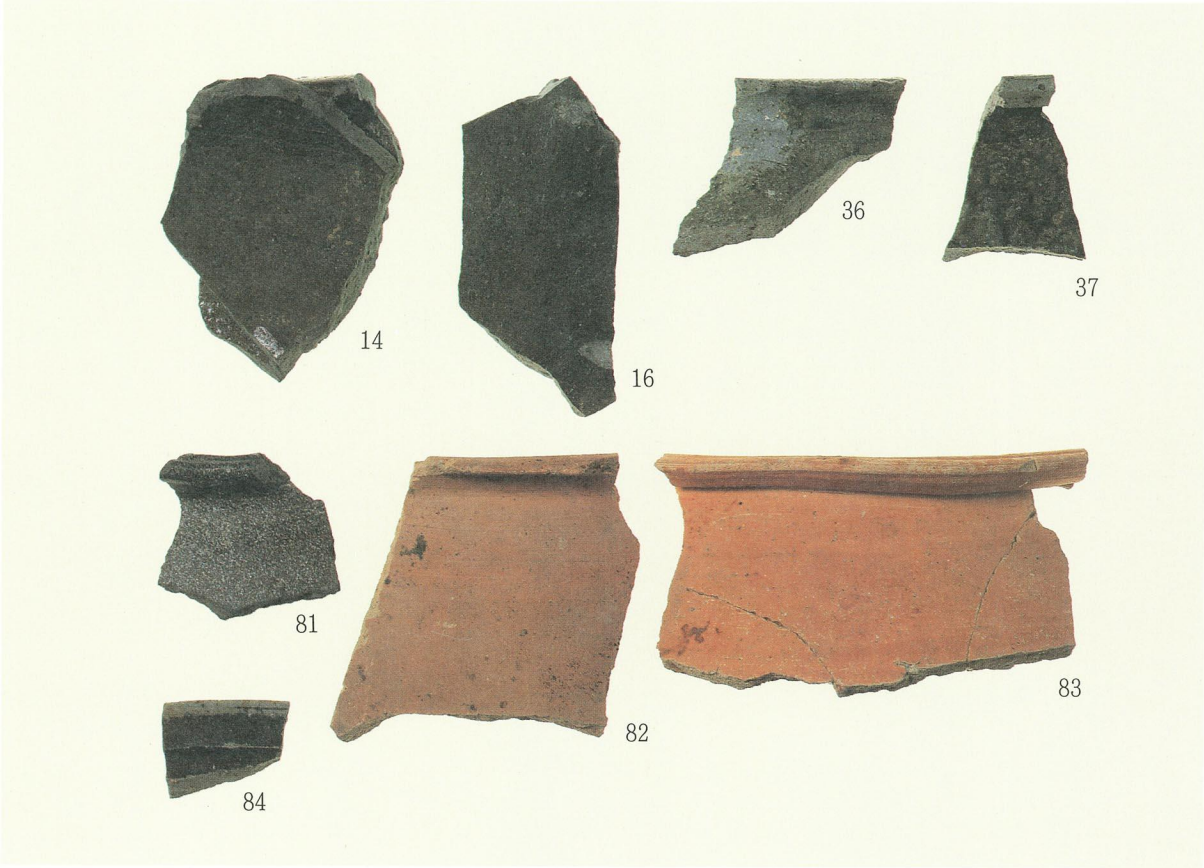
調査区土層断面（西から）

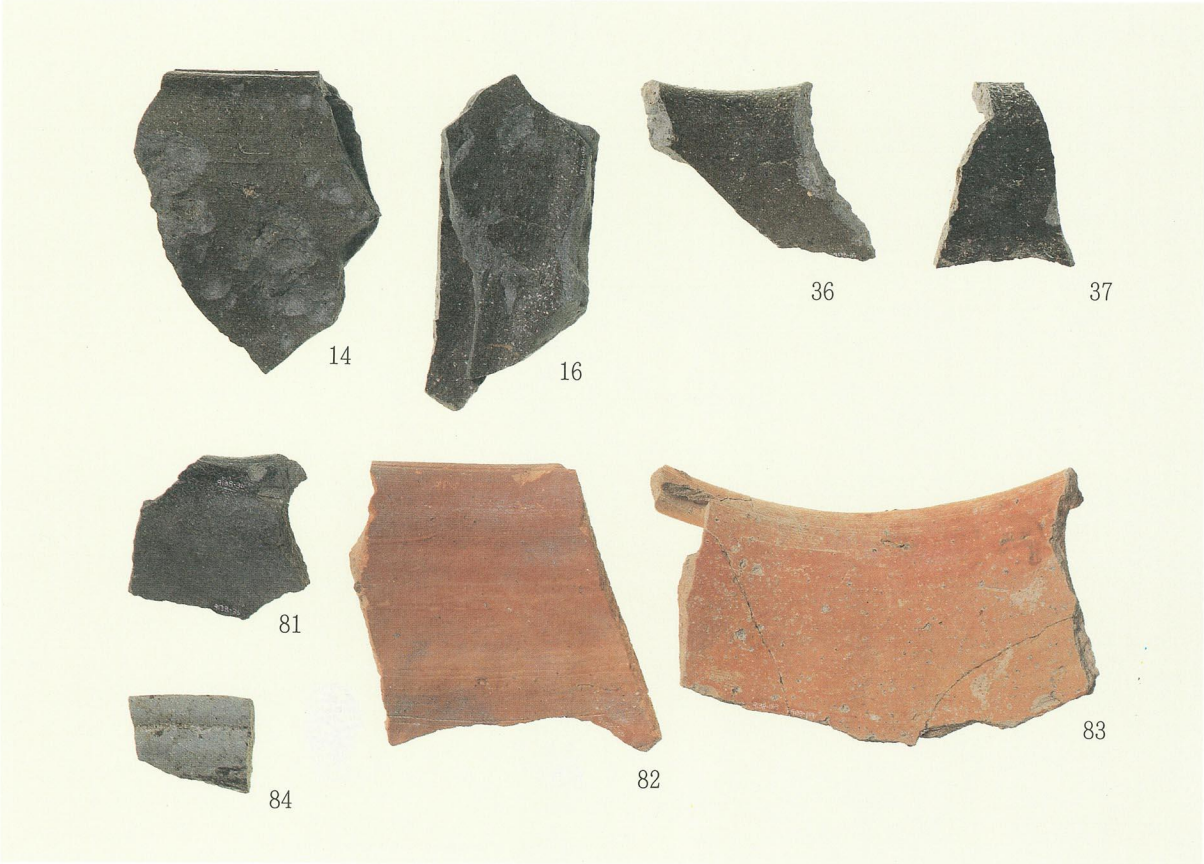
調査区土層断面（東から）

池状遺構（ＳＷ０１）

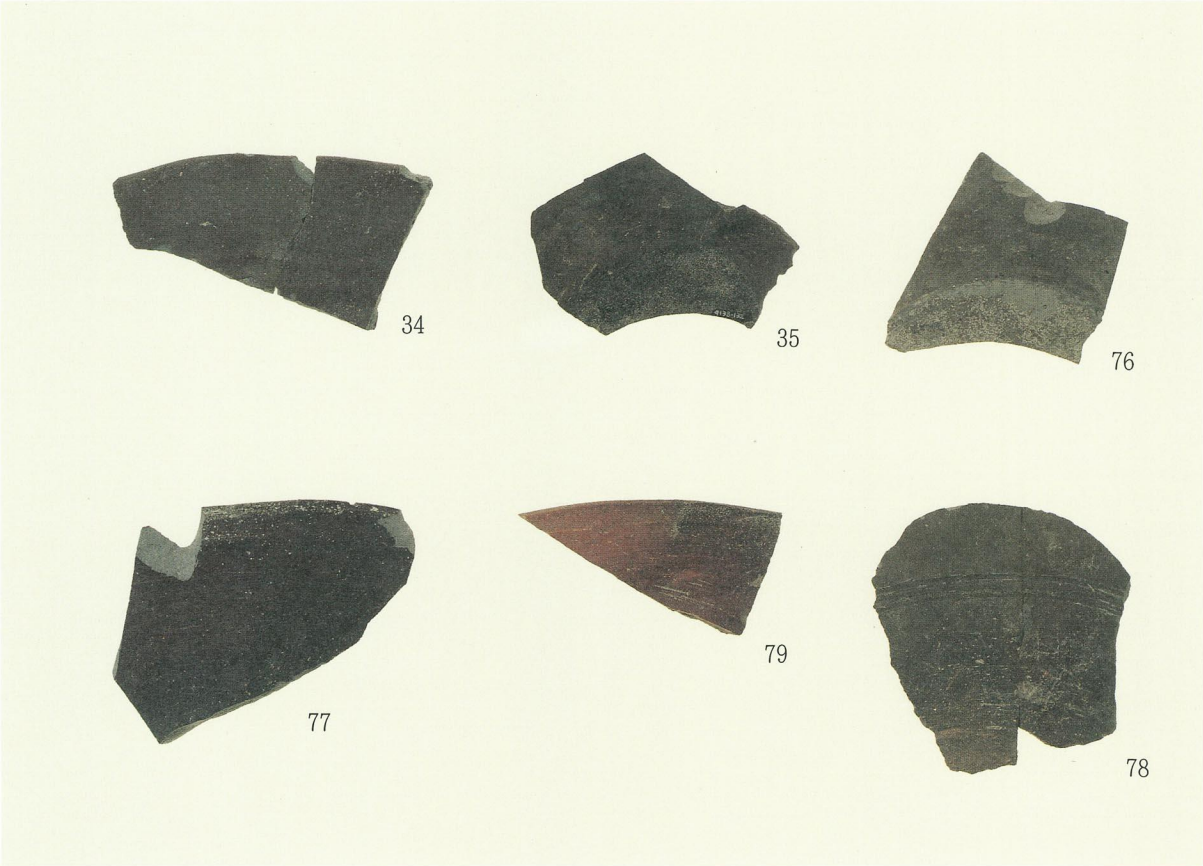
池状遺構（ＳＷ０１）
排水部分（東から）

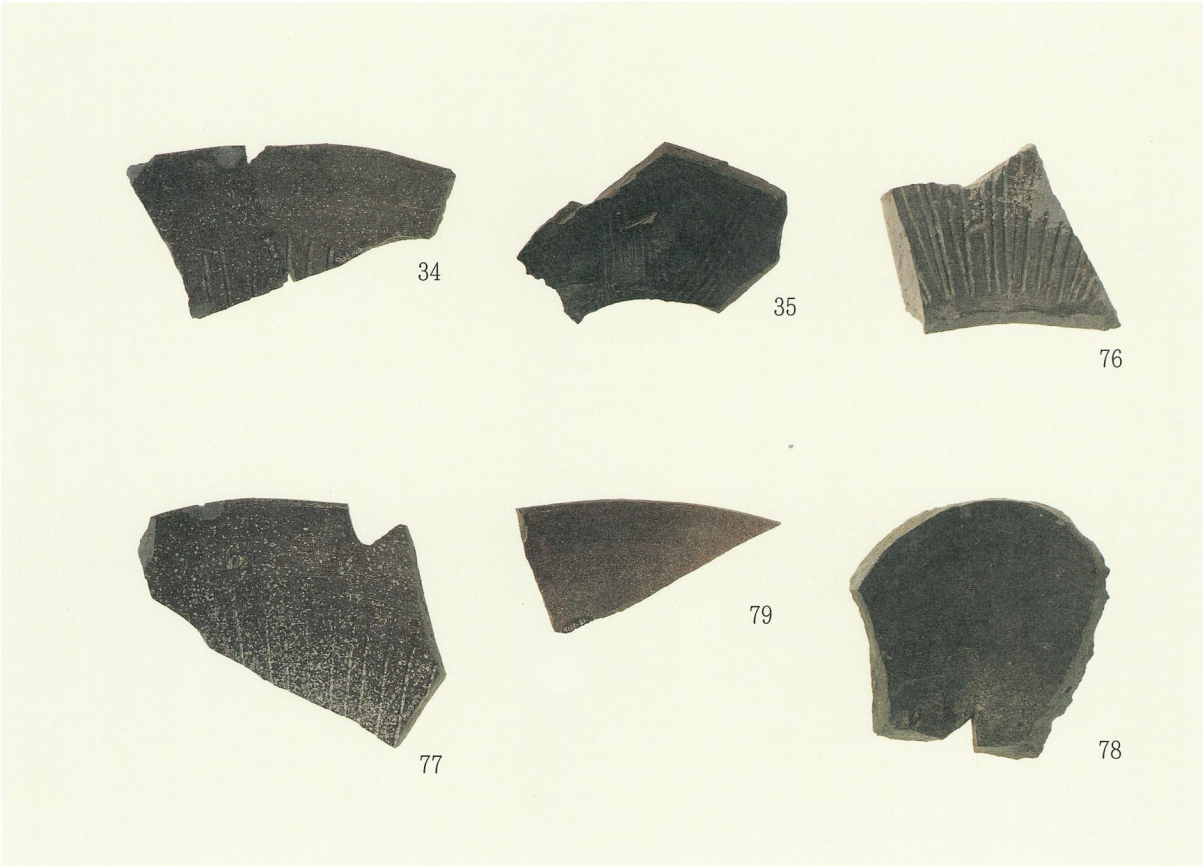
池状遺構（ＳＷ０１）
土層断面（南東から）





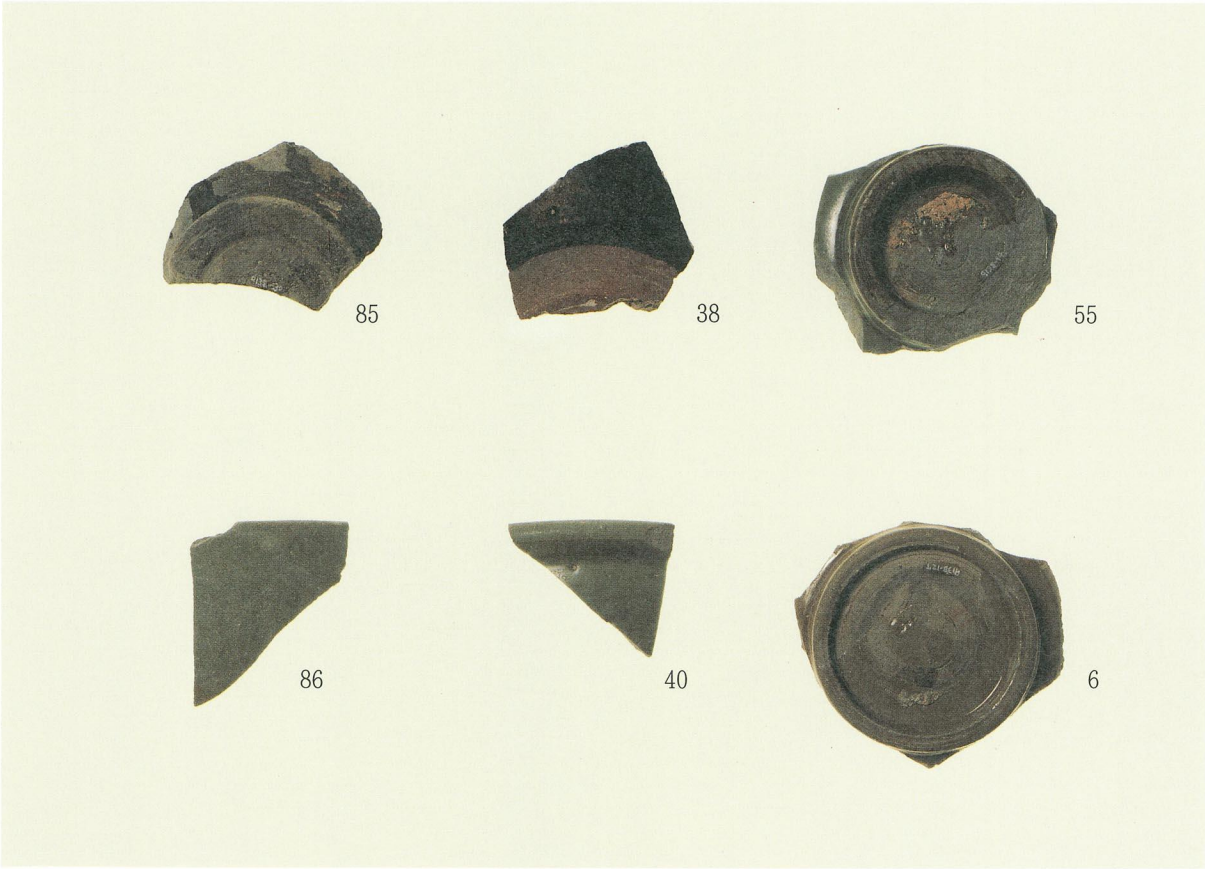
淡河上中遺跡出土土器（1）

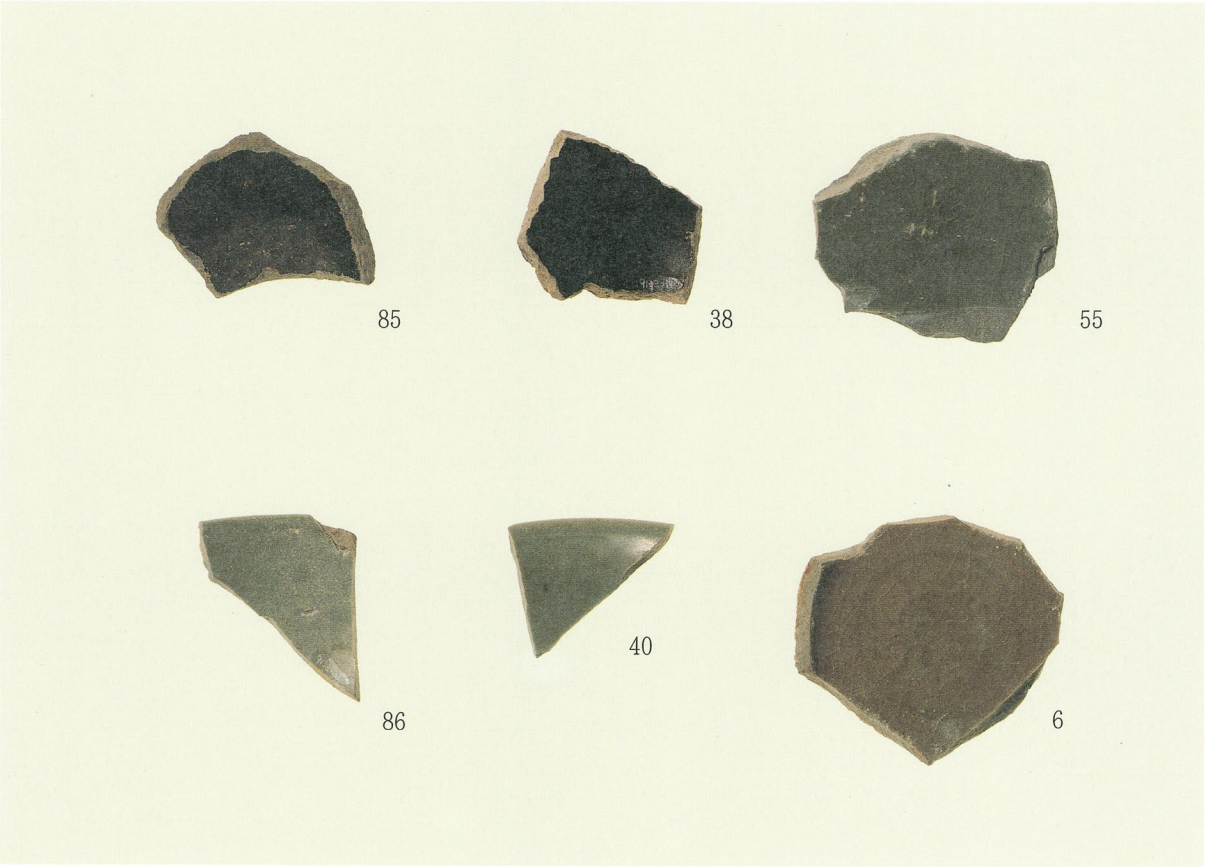




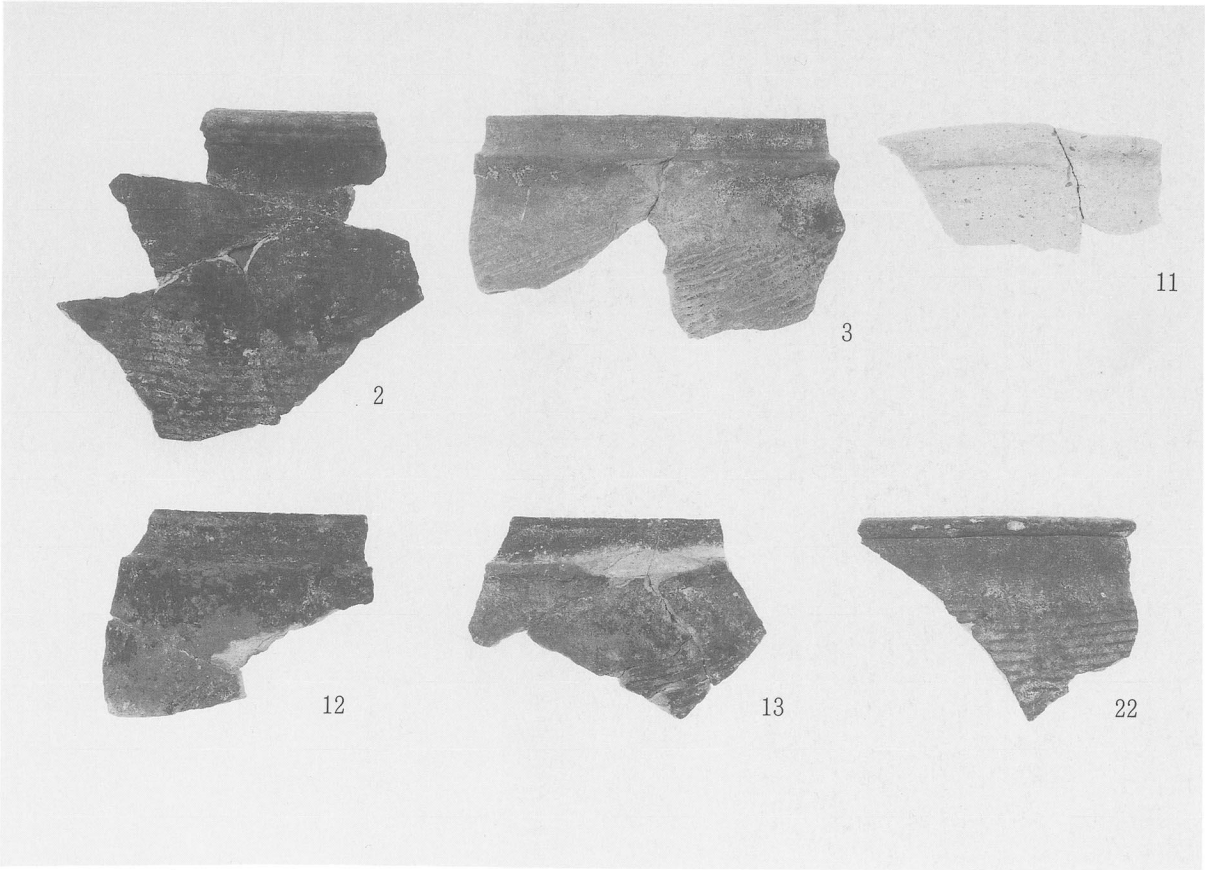
淡河上中遺跡出土土器（２）

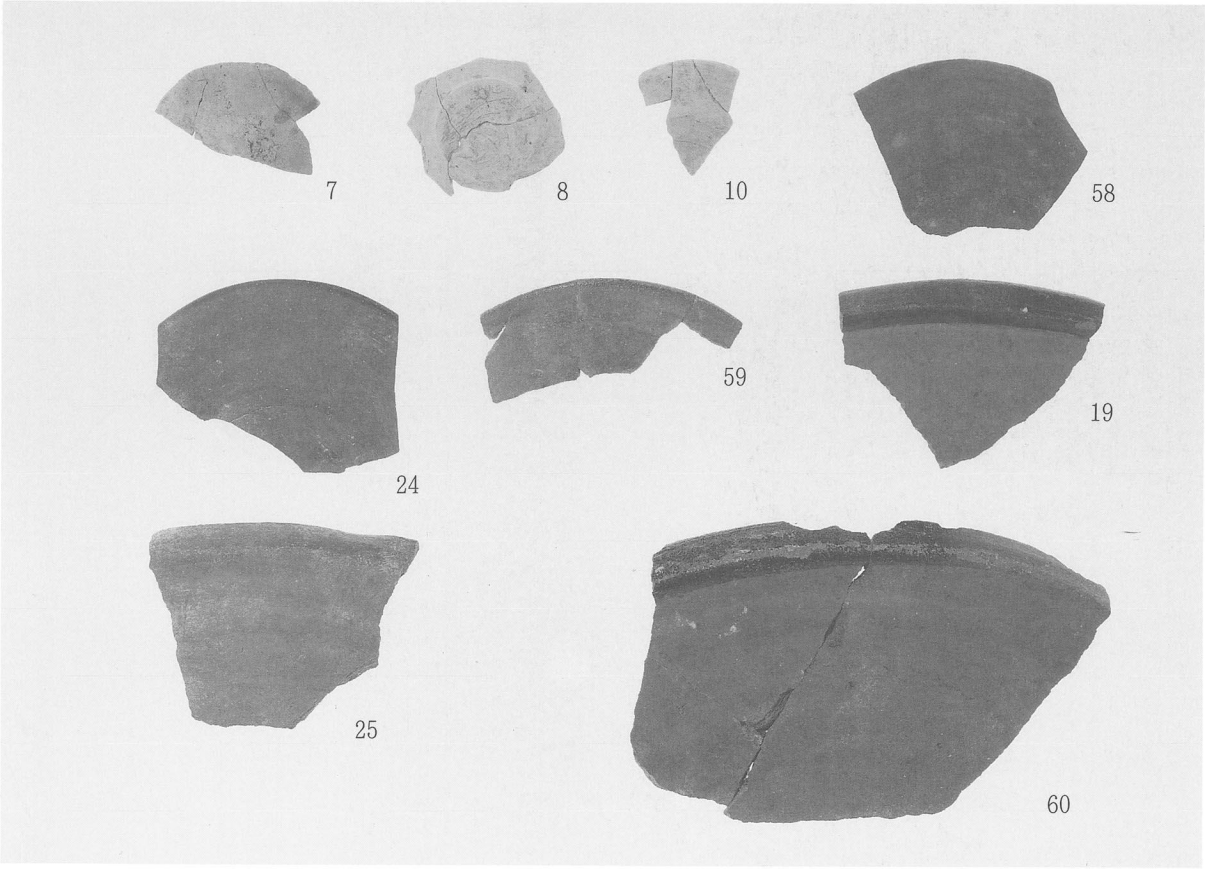
淡河上中遺跡出土土器（3）



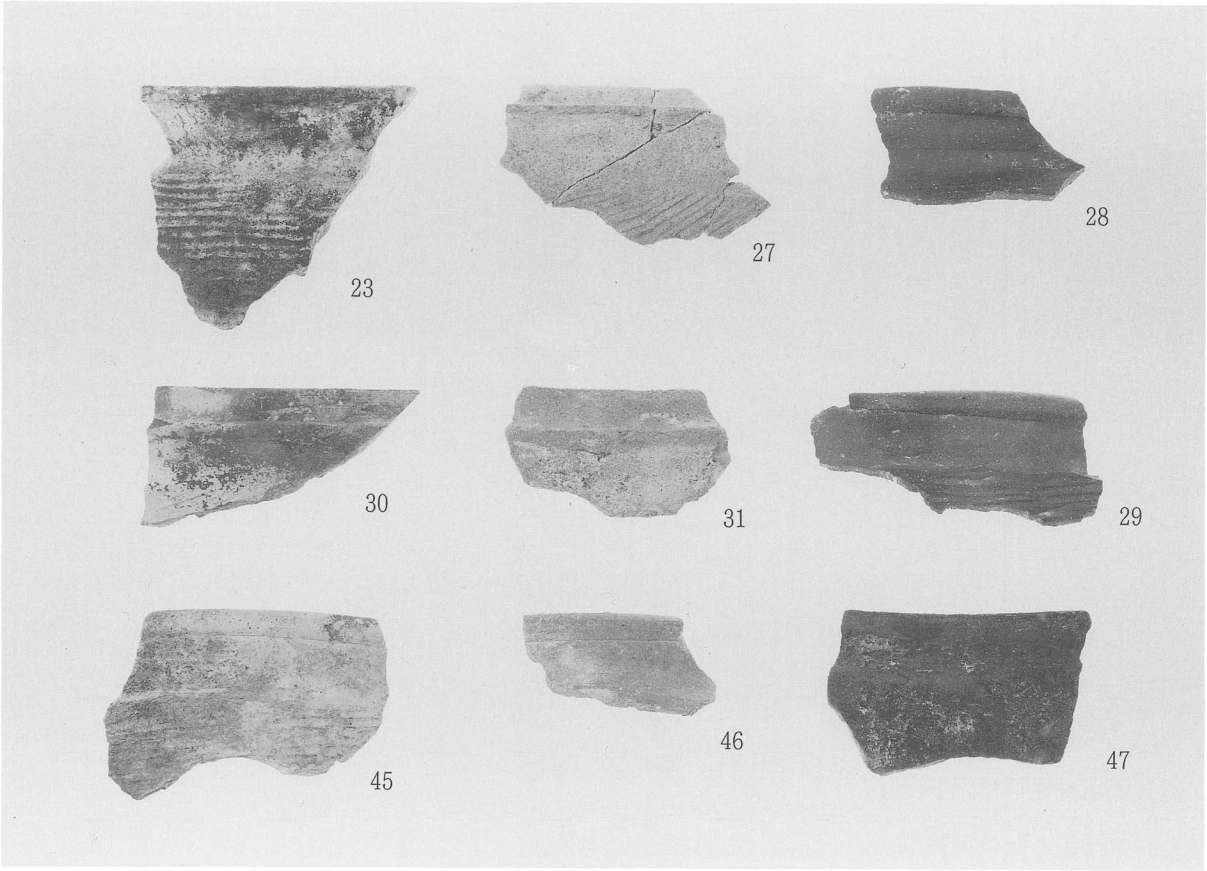


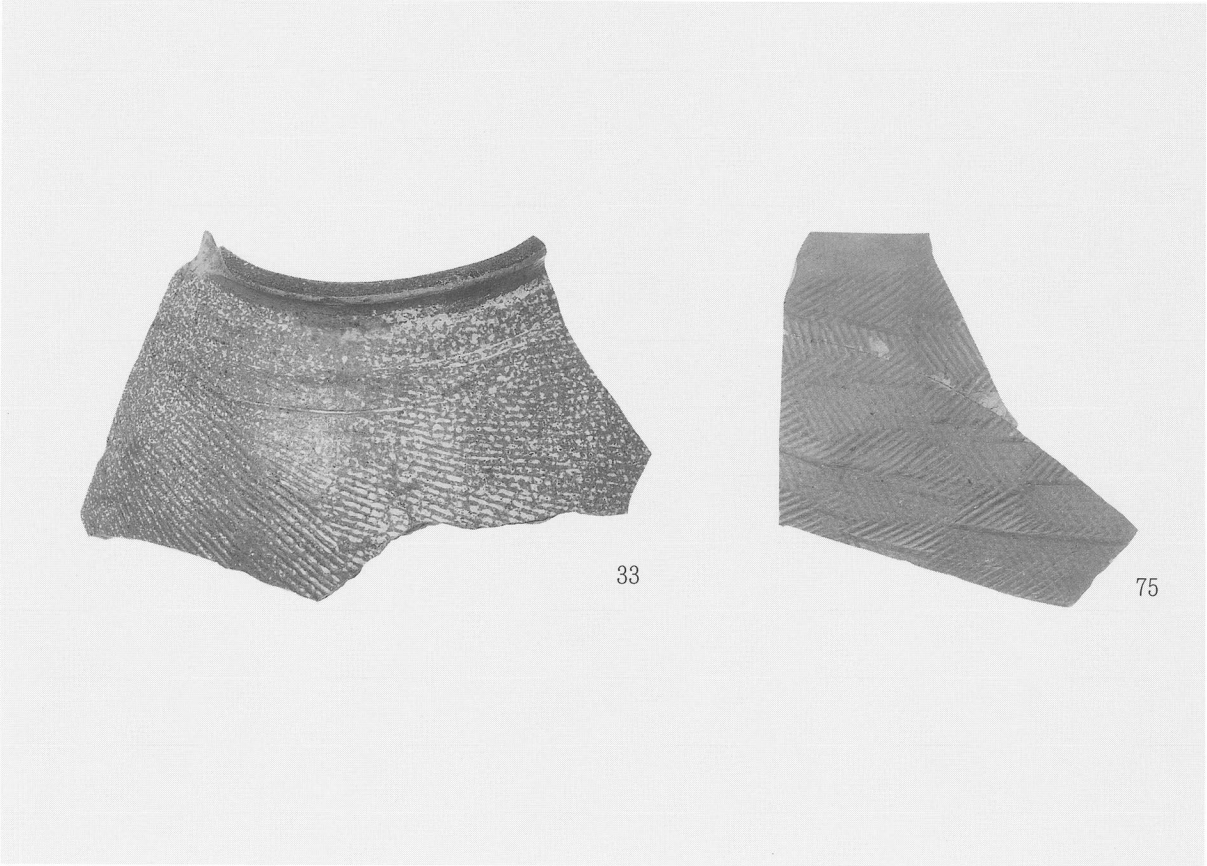
淡河上中遺跡出土土器（４）



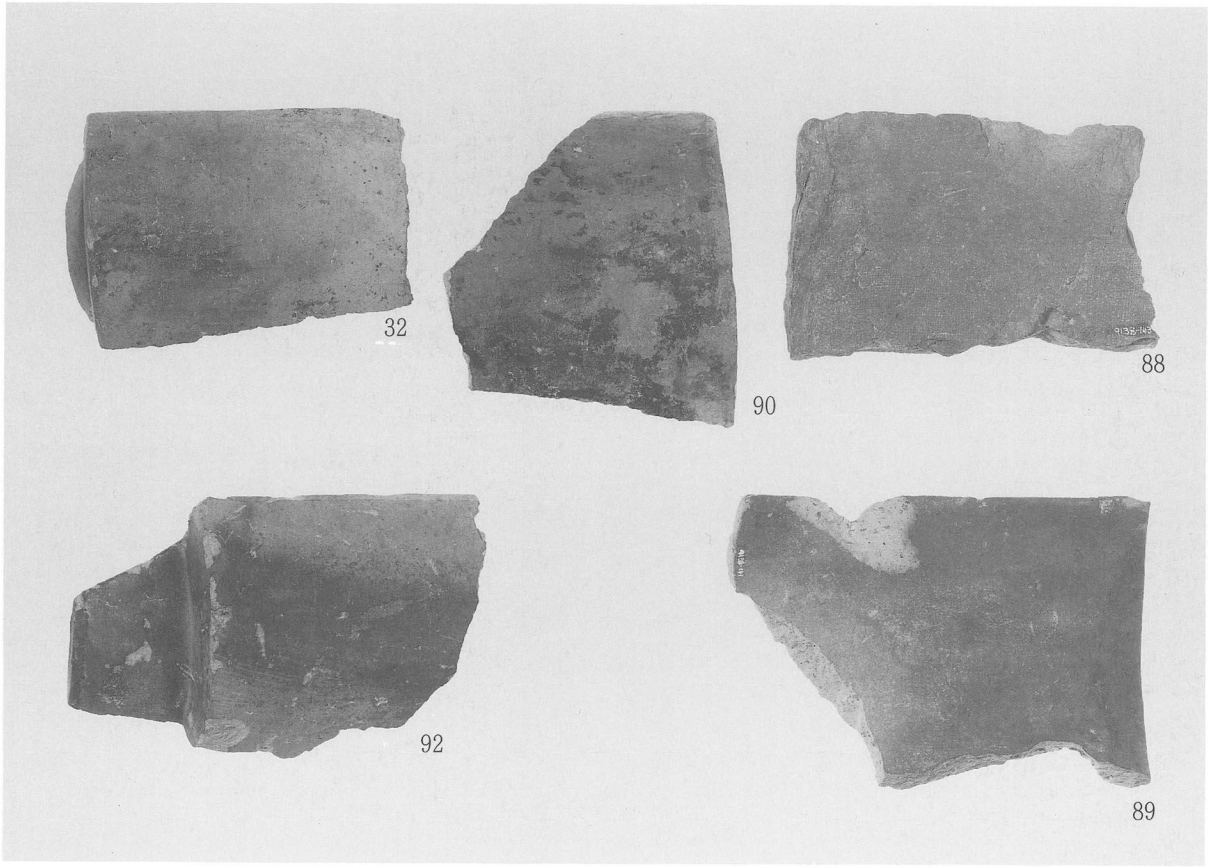


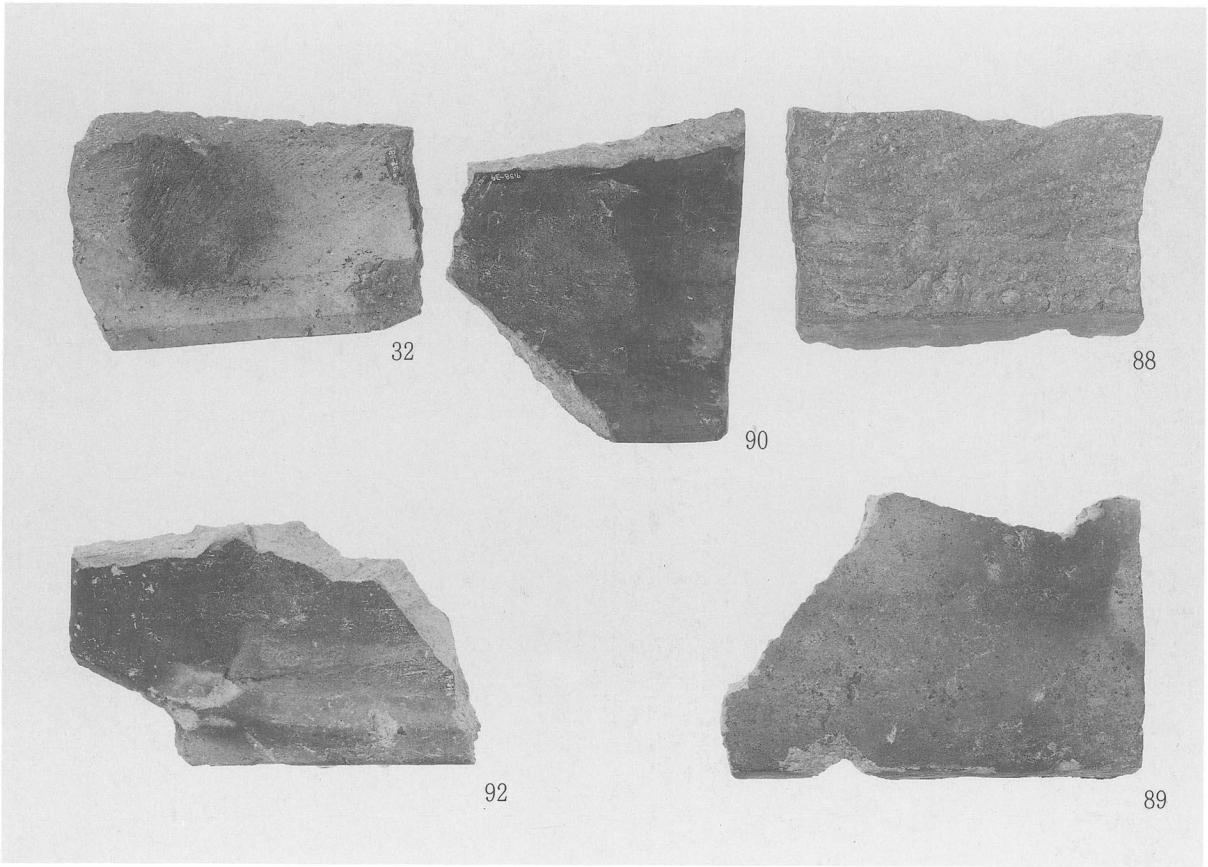
淡河上中遺跡出土土器（5）



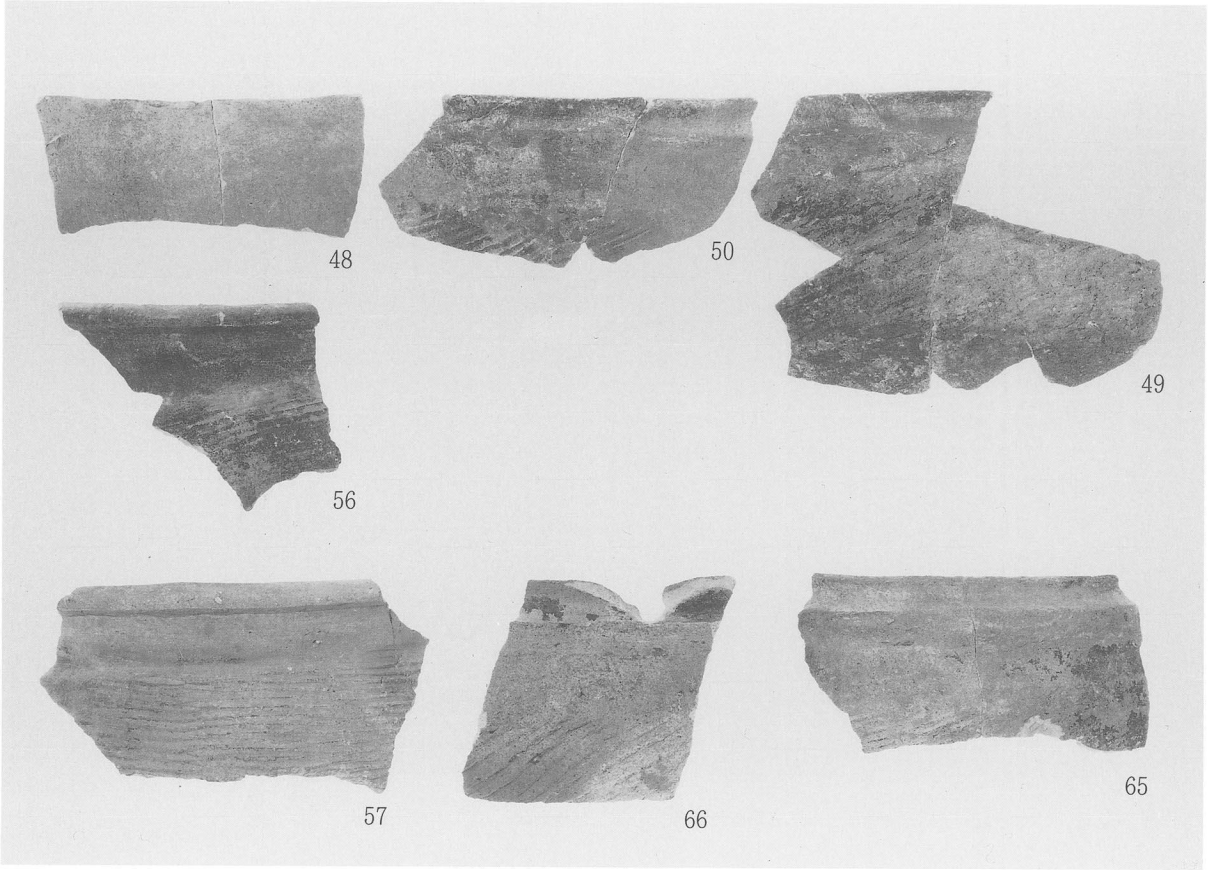


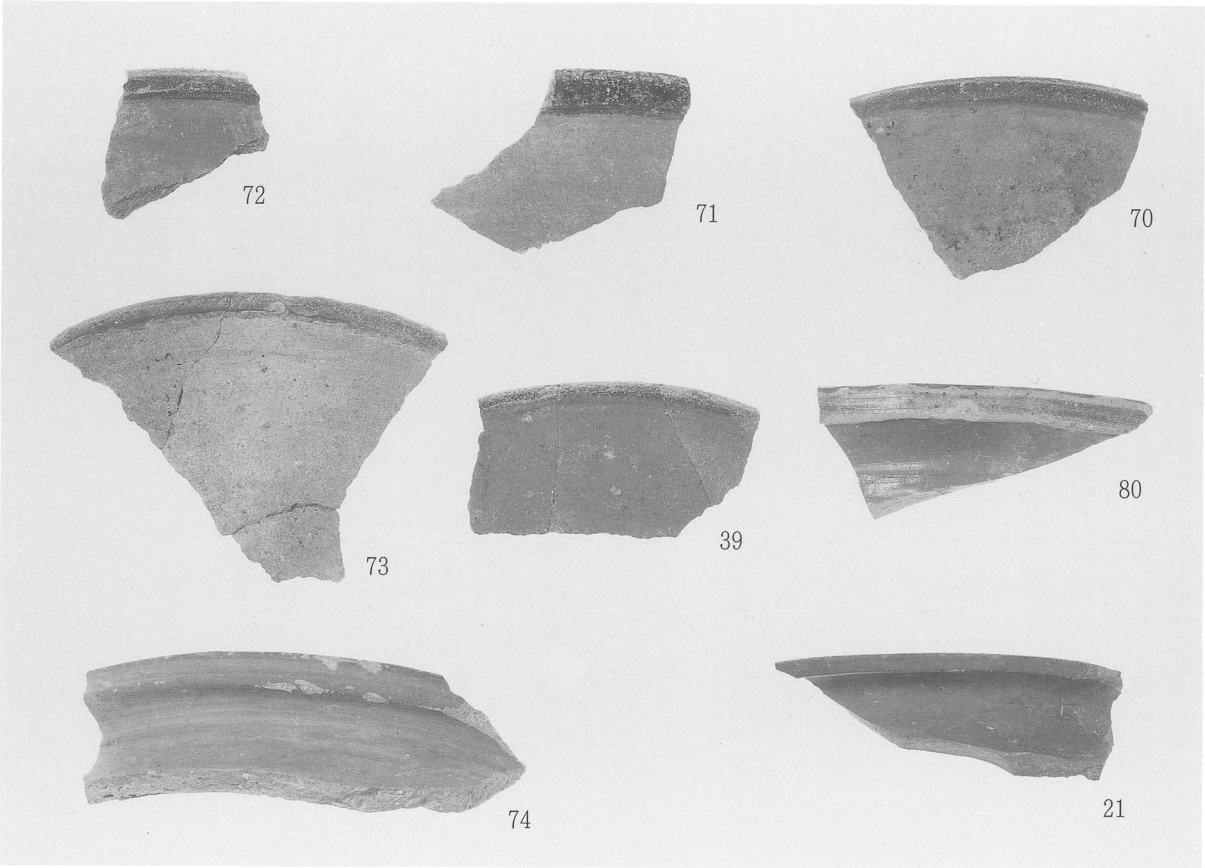
淡河上中遺跡出土土器（6）



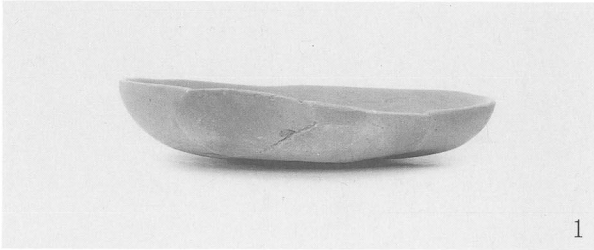


淡河上中遺跡出土土器（7）





淡河上中遺跡出土土器（8）


1

5

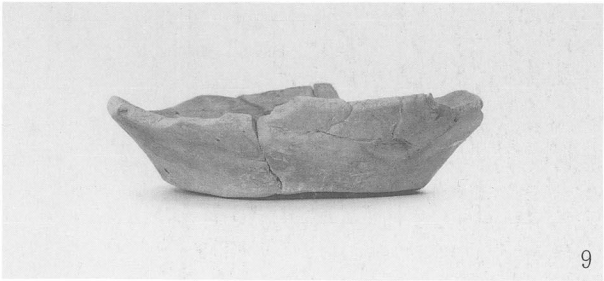
26

51

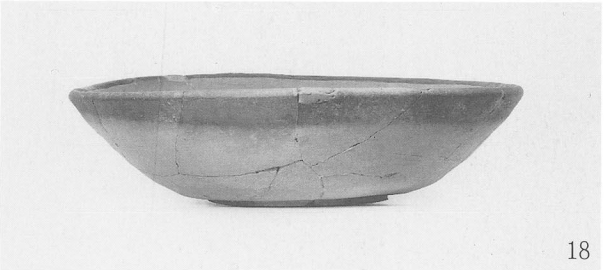
61

62

4


9

17


18

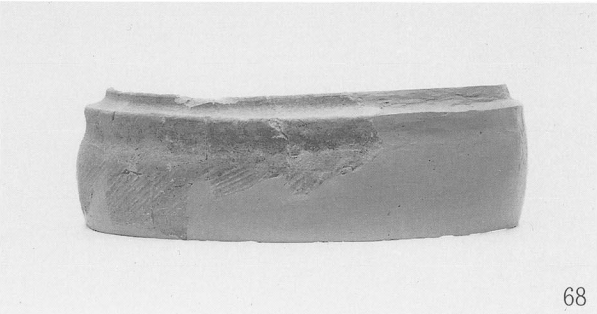
52

淡河上中遺跡出土土器（9）

54

63

64


68

91

淡河上中遺跡出土土器（10）

兵庫県文化財調査報告　第153冊

奥　遺　跡
宮ノ沢城跡　発掘調査報告書
淡河上中遺跡

－山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸＩ－

平成８年３月29日発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号
ＴＥＬ　078－531－7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒650　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　大神印刷株式会社
〒652　神戸市兵庫区本町１丁目４番21号